

安曇野物語

飯塚 充

上高地①「上高地帝国ホテル」

上高地は標高約一五〇〇m五千尺にあり。

大正池から梓川を遡ると、田代池・ウエストン碑・カップ橋・小梨平・明神池・・と名勝が続く。その途中、木立の中に上高地帝国ホテルが凜として佇んでいる。

一九七七年九月一日、上高地帝国ホテルの写真室に務める友人を訪ねた時、同ホテル改築工事の竣功式が行われていた。当時、同ホテルの改築計画には強い反対運動があつて、なかなか建物の仕様が決まらず延び延びの完成だった。当初ホテル側は、旧来の木造建築では冬期の積雪に耐え難く、毎年オーブン前の補修工事に莫大な費用がかかることから、堅固なRC構造の建物を設計した。ところが「上高地に近代的なホテルは似合わない」とのクレームが各方面から出された。同ホテルは一九三三年に日本で初めての本格的な山岳リゾートホテルとして開業した、言わば上高地観光の大御所である。そう簡単には引き下がれない。

式典後、友人の案内で建物の内外を見学することができた。屋根は本瓦、外壁は山小屋風の木造仕立て、内部は太い柱や梁をふんだんに使った古民家風洋館仕立て、屋根越しに雄大な穂高連峰。説明を受けなければ、RC構造であることに気付かない。つまり、RC構造の建物本体の内外を野趣な木材で仕上げたサンドイッチ構造だったのだ。唯々脱帽するばかりだった。

上高地②「カツ井」

カツ井はワンタンメンや蕎麦と並ぶ我が三大好物。外食時はその中から選ぶ。ワンタンメンはない店もある。そうした時は普通のラーメンにする。上高地帝国ホテル訪問の後、友人と別れ昼食場所を探すことになった。同ホテルのランチでは予算を遙かにオーバーする。

帝国ホテルからカップ橋まで凡そ二km、写真を撮りながらポチポチ歩くこと小一時間。当時の上高地は「ゴミ高地」と揶揄されるほどの人気スポットで、重装備のクライマー、中装備のハイカー、街中からそのままハイヒール姿でやってきた無装備の観光客などで溢れ返っていた。因みに、この時のボクの装備は、軽登山靴・リュック・プロニカの中型カメラ・交換レンズを入れたショルダーバッグ、そして三脚。典型的なカメラ小僧ルックだった。

さて何処で食事をするか、と言っても選択の余地はない。カップ橋の袂にある五千尺ホテルの食堂へ直行した。確か、一階が土産物店、二階が食堂、上階が客室だった。夜行で新宿を発ち早朝に松本着、朝食は持参のパンを齧かっただけだったので腹は激ペコ。メニューからカツ井を選んだ。

それまでカツ井とは、カツを玉子でとじたものと認識していた。ところが出されたカツ井の何処にも玉子は見当たらない。カツ定食を丼に盛っただけの様。まさか玉子のかけ忘れでは・否、隣席も同じ仕様。肉は硬め、ご飯に味が浸みていないので全体に薄味、カツにソースをかけるとき、ソースご飯は好みではないので、少量に留めたため尚更。何だこれは。

その後、ソースカツ丼なるものを知った。揚げたカツをソースに浸してご飯の上にのせたものとか。だが、上高地のカツはソースに浸してなかった。では、上高地のカツ丼は特別かと言うとそうでもない。所変われば品変わるの良い例。カツ丼には多くのバリエーションがあり、必ずしも玉子でとじたカツ丼が主流とも言えないようである。一度、全国のカツ丼を食べ比べてみたいと思いつつ三十年経ってしまった。一人旅の時は専ら蕎麦かうどんの立ち食い。家人同伴の時は贅沢三昧。旅先でカツ丼をいただく機会がほとんどなかったのである。

上高地③「明神池」

五千尺ホテルの食堂を後に明神池へ向かった。カップ橋の直ぐ上流にある小梨平には昼時にも拘わらず幾張りかのテントがあつた。付近の梓川は大きく蛇行しているので浅瀬が広がり子供達の格好の遊び場だ。歓声が遠くまでよく響いていた。

やがて川筋から離れ、ほんのり色付き始めた樹林を進むこと三十分余。徳沢方面への道と岐かれ明神池へ。池の入口に穂高神社の奥宮がひっそりと鎮まっていた。明神池は同社の境内にあつて拝観料一〇〇円を納めた。池の前に立つと、それは別世界。明神岳の麓にある池の周りの針葉樹林に落葉樹が混じり既に紅葉が始まっていた。池には常に湧水が流れ込むため、冬期でも氷結しないとのこと。そのためか薄つすらとモヤがかかり、幽玄な雰囲気包まれていた。池の中には「御船神事」に使われるという色鮮やかな船が繫留され、針葉樹の深い緑を背景に水面に映えていた。

誰でもシャッターを切りたくなる佳景。何枚か取り終えた後、風景写真だけでは物足りず、辺りを見回してモデルを探した。いたいた、妙齡の婦人が。色白で細面、少し長身でスタイル良し、願ってもないモデルだ。さてここからが問題。どう糸口を見つけて被写体になつて貰うか。

何と、案ずるより産むが易しとはこのことか、それとなく近づいたら「すみません撮して貰えますか」とカメラを差し出された。一端のカメラマンに見えたのだろうか。カメラを預かつてパシャパシャ、序でに自分のカメラでも数枚撮った。勿論断つた上で。カメラ慣れしているようで、自ら進んでポーズを付けてくれた。やがて明神池を後にボクは松本へ、彼の人は連れの女性と徳沢へ。名前も住所も聞かずに・・・その証写真昨日から探しているのだが、未だ見つからない。

穂高神社①「神々しさ」

明神池が穂高神社奥宮の境内にあることをその日まで知らずにいた。実は旅行の目的が大町の「仁科神明宮」を調査することにあり、上高地帝国ホテル訪問は急遽決まったため、明神池や穂高神社については事前には調べなかった。とは言え職業柄不勉強極まりない話である。

さて、明神池から松本に戻り、駅前でソバを掻き込み、駅裏のビジネスホテルに泊まった。値段相応と言うべきか、調子の悪い空調機が盛大な音を響かせていた。夜が更けるにつれて益々五月蠅く感じられ、なかなか寝付けず参った。

翌一九七七年九月二日早朝、眠い目をこすりながら大町へ向かった。朝食は前日買いた求めた菓子パンで済ませた。バスの便が悪いので大町駅前からタクシーを奮発して仁科神明へ。同宮は、神明造りの社殿としては全国で唯一国宝に指定された由緒深い神社である。村はずれの鎮守様のな立地のため、表街道からは目に付き難く一見楚々としていているが、一步鳥居をくぐれば正に御神域。檜の巨木が林立する深い杜、苔むした石階や玉石、緩やかな斜面に沿って流れる清流、姿形の美しい杜、神々しく荘厳な雰囲気、決して有名大社に負けていない・・

おっと、仁科神明は今回のテーマではない。穂高神社の話に戻そう。

仁科神明では深い感動と強い衝撃を受けたが、何故か明神池の件が脳裏に焼き付いて離れない。映画を見終わってしばらくの間、知らず知らずにテーマ音楽を口ずさむように、帰りの車中ではそのことばかり考えていた。と言っても彼の麗人のことではない。断じてそうではなく明神池それ自体についてである。同じ神々しさではあっても、仁科神明と明神池とは全く印象が異なる。その理由が思い浮かばないので。抑も、山奥の小さな池で「お船まつり」とは何なのだ。

穂高神社②「話四半分」

世に歴史文献多けれども、俄に信じてはならぬものの代表格と言えば・・・そう、社寺縁起の類である。良くて半分、悪しければ八分の一、中を取って四半分くらいに捉えるのが賢明か。

と、これまで歴史愛好家の間で囁かれてきた。ところが近頃は少し様子が違う。出版された論文ならば、それなりに調査研究を行った上で書かれたものと受け止められるが、ホームページやブログ等では社寺の縁起について誰でも自由に自説を述べることができるため、話四半分では甚だ危険である。唯の思いつきや牽強附会の解釈を堂々と述べる輩が蔓延り、玉石混淆のネット情報から信頼するに足る資料を見つけて出すことが極めて厄介な作業となった。(我が身に照らして深く反省している)さて、穂高神社について調べるならば、まず、その「御由緒」から入る。余程の大社大寺でなければ確かな文献は少なく、社伝と称する口碑や伝承を取り上げざるを得ない。

では、穂高神社の由緒沿革を「神社名鑑」から見てみよう。この書は昭和三十七年神社本庁創立十五周年を記念し、全国八万余社と言われる神社の中から代表的な神社六千社を選んで紹介した極めて貴重な資料である。その内容は、各神社から提出された報告書に基づいて編集された、言わば当時の公式文書集である。そしてまた、旅行直後に調べた穂高神社に関する唯一の資料でもあった。

穂高神社 ほたかじんじや 旧国幣小社 こくへいしょうしや (神社名鑑より)

【祭神】 本宮 穂高見命 ほたかみのみこと 綿津見命 わたつみのみこと 瓊々杵命 にぎぎのみこと

奥宮 穂高見命

【神事と芸能】

御船神事 本宮例大祭に柴船五艘が社前を三周する。

人形飾物 式年遷宮祭に歴史人形を飾る。

【由緒沿革】

主祭神穂高見命は社伝によると、神代の昔人跡未踏の穂高岳に御降臨になり、重畳たる中部山岳を開発されると共に、梓川の流域安曇筑摩を沃野となし、神胤をこの地に蕃息せしめ給うた。古より天下の名社として皇室の崇敬極めて篤く、平安朝の頃、既に祈年の国幣に与り或は累次の神階昇叙の事あり。延喜の制には式内名神大社も以て遇せらる。然るに武家時代に及び漸く社運衰微にかたむき、僅に地方の藩候崇事の有様と変つたが、さすがに氏人たる郷土人の信仰は衰えず、二十年毎の御造替、七年毎の御修営、或は九月二十七日の御船祭、三月十七日の奉射神事等の古儀は毫も懈怠なく伝承されて今日に至る。(振り仮名は筆者が付した。以下同)

「昔々、穂高見命さまが穂高の岳に降臨し、安曇や筑摩の地を開拓された、それは尊い神さまである」信仰的には十分な説明である。けれども、歴史的な観点から見れば、うゝん今一つ判らない、なぜ例大祭に船がでるのか、その御船祭はいつ頃から始まったのか、明神池の位置付けは、と次々に疑問が湧いてくる。

穂高神社③「安曇氏」

翌一九七八年、新しい神道辞典を購入し穂高神社の項を確認した。執筆者は國學院大學の菟田俊彦氏。神社名鑑とはかなり異なった内容である。

穂高神社 (神道辞典より)

長野県南安曇郡穂高町字穂高に里宮(本宮)・穂高岳(上高地)に奥宮が鎮座。旧国幣小社。祭神穂高見命・綿津見命・瓊々杵命(本宮)、穂高見命(奥宮)。式内の名神大社。諏訪および生島足島と併せて信濃三社と称し、海神族安曇氏がその祖神を奉祀した古社。穂高見命は綿津見神の子で、古事記に「安曇連等は其の綿津見神の子宇都志日金折命の子孫なり」とみえる神である。奥宮のある穂高岳は日本北アルプス槍ヶ岳南方にあつて飛驒と信濃の国境を成し、最高峯の奥穂高は海拔三一九〇m。上高地の名は近代の称呼で、もとは奥宮のある霊地を、神垣内・神河内・神合地・神郷地・神ヶ平などと呼んだのに由来する。神名のホダカミは秀峯の意と主宰神を意味するカミとの合成語。

要約すると、

- ・ 南安曇郡穂高町に里宮、穂高岳に奥宮がある。
- ・ 穂高神社は信濃三社に列す。
- ・ 安曇氏は海神族である。
- ・ 伊邪那岐命↓綿津見神↓宇都志日金折命 || 穂高見命↓安曇連
- ・ 上高地は近代の呼称。古くは神垣内・神河内・神合地・神郷地・神ヶ平。
- ・ ホダカミとは秀峯の主宰神の意。

安曇氏が海神族であるとしても御船祭は解せない。穂高見命の功績は此の地を開拓したことであり、既に船との関りは薄らいでいたはず

だが・・・また納得が行かない。(一九七七年の旅行後に調べた結果はここまで)
二〇〇八年十一月、ぶらり散人殿の「穂高物語」と梅文殿の「上高地物語」に触発され、再び穂高神社について調べることになった。

和多都美神社① 「神話の歴史化」

神々の系譜を調べると、大和・山城・伊勢・出雲など、有名大社が鎮座する地域の他に、彦岐・対馬・能登・伊豆など、その昔は辺境の地であったと思われる離島や半島が浮かび上がってくる。

一九八九年二月、三泊四日の対馬旅行に出かけた。目的は延喜式神名帳に記載された「西海道對馬嶋二十九座」の神社を調査するため。折しも昭和天皇の大葬の礼を間近に控え、行く先々で警察官の姿が目立った。「これなら安心だ」と博多から対馬へ心細いYS-11で向かった。「凄い空母みたいな空港だ」これが対馬の第一印象。ここで対馬の思い出を話し始めると数回分のレポになる。ばつさりカットして「和多都美神社」に絞る。

【延喜式】は弘仁式・貞観式の後を承けて編纂された律令の施行細則。神名帳はその中にあり、祈年祭の幣帛にあずかる宮中・京中・五畿七道の神社三、一三二座を国郡別に登載した、数ある神社史料の中でも最も重要な文献である。

先ず、当時境内に掲げられていた「和多都美神社 御由緒」と同一の内容と思われる記述を「日本の神々 神社と聖地」(谷川健一著)から転載する。

和多都美神社 御由緒

当社は海宮の古跡なり。上古、海神豊玉彦命此の地に宮殿を造り玉ひ、御子に一男二女ありて、一男を穂高見命と申し、二女を豊玉姫命・玉依姫命と申す。或時、彦火火出見命失せし鉤を得んと上国より下り玉ひ、此の海宮に在す事三年にして、終に豊玉姫を娶り配偶し玉ふ。良有て鉤を得、又上国に遷り玉ふが故に、宮跡に配偶の二神を齋き奉りて和多都美神社と号す。又社殿を距る凡二十歩にして豊玉姫の山陵及豊玉彦の墳墓あり。寛文中洪浪(津波のこと)の為に神殿悉く流れて、神体のみ渚に寄り来れるが故に、往古の棟札なく勸請年月不詳。

対馬旅行中、厳原の歴史民族資料館を訪れ、館長殿直々対馬の歴史について数時間に亘り貴重な話を伺うことができた。その中で「対馬では江戸期の神道家が神話の歴史化を図ったため、どこまでが本来の伝承か見極めが難しい」との発言が印象的だった。

次に、現在の「和多都美神社 御由緒」をネット上から転載する。

名神大社 和多都美神社

御祭神

彦火々出見尊 豊玉姫命

御由緒

当社の所在地表示は、現在下県郡であるが、以前は上県郡であった。平安時代の律令細則である延喜式の神名帳の中に「対馬国上県郡和多都美神社（名神大）」とあるのは当社である。貞観元年に清和天皇から従五位上の神階を賜り、また、三代実録によれば、永徳元年に、更に従一位を叙せられ、往古より島内は言うに及ばずわが国の名神大社の一つに数えられた。

縁起を辿れば、神代の昔、海神である豊玉彦尊が当地に宮殿を造り、宮を海宮と名づけ、この地を夫姫と名付けた。その宮殿の大きさは、高さ一町五反余り、広さ八町四方もあったという。そして神々しい神奈美夫姫山のさざ波よせるこの靈地に彦火々出見尊と豊玉姫命の御夫婦の神を奉斎したと伝えている。

豊玉彦尊には一男二女の神があり、男神は穂高見尊、二女神は豊玉姫命・玉依姫命という。ある時、彦火々出見尊は失った釣り針を探して上国より下向し、この宮に滞在すること三年、そして豊玉姫を娶り妻とした。この海幸彦・山幸彦の伝説は当地から生まれたものである。

満潮の時は、社殿の近くまで海水が満ち、その様は龍宮を連想させ、海神にまつわる玉の井伝説の遺跡や満珠瀬、干珠瀬、磯良恵比須の磐座などの旧跡も多く、また本殿の後方に二つの岩がある。これを夫婦岩と称し、この手前の壇が豊玉姫命の墳墓（御陵）である。また、西手の山下に、石があり、それが豊玉彦尊の墳墓（御陵）である。

このように当社は古い歴史と由緒を持ち、時の国王や藩主の崇敬も篤く、たびたびの奉幣や奉獻それに広大な社領の寄進があつた。現在でも対馬島民の参拝は勿論のこと全国各地からの参拝が多い。

歴史と神話とが渾然一体となった内容である。同神社の鎮座する豊玉町は、近年「神話の里」として売り出し中と伝えられる。町おこしに呼応したのか、少し乗り過ぎの感が否めない。

和多都美神社② 「海の幸」

業界用語オンパレードのレポが続いてしまった。ここでお茶ケタイムにしよう。お茶ケの友には海の幸が一番。

対馬旅行の間、厳原のビジネスホテルで二泊、対馬北部の国民宿舎で一泊、合計十回食事した。初日の夕食はホテル近くの料理屋でイカと石鯛の刺身をメインに戴いた。やはり本場のイカは違う、身が透き通って柔らかい。これなら丼一杯でも食えるぞ、と幸せな気分浸った。翌日、ホテルの朝食にもイカ料理がでた。昼食は島の南部の小さな食堂

に入り刺身定食を注文した。ここでもイカと石鯛の刺身。・・・いか同じく、行く先々でイカと石鯛の刺身がでた。二日目の食事処で「対馬ではイカや石鯛が豊漁のようですね」と板さんに尋ねたら「別に豊漁というわけではない。このところ海が荒れて休漁が続く生簀の魚しかない。海老やアワビは品切れ。残りはイカと石鯛だけ」とか。まあ嫌いじゃないから良いけど、少し心配ななあ。と言うのは、決してイカや石鯛の刺身に飽きたからではない。問題は醤油だ。当時、我家ではキッコーマンとヤマサの醤油を使い分けていた。比較的しょっぱ目が好み。ところが対馬の醤油は濃い口で味は悪くないが兎に角甘々なのだ。始めの内は食べ易く別段不満もなかったが、流石に三日目ともなれば食傷気味。にも拘わらず国民宿舎でも同じ刺身と醤油。今度対馬に来るときは絶対醤油を持ってくるぞ。

対馬旅行の数年前、熊本へUターンして写真館を開業した友人を訪ねたことがある。(上高地帝国ホテル写真室の彼)その時、不知火海の「うたせ船」で歓待された。確か真夜中に出港し朝の八時過ぎに帰港した。うたせ船は打瀬網うたせあみと呼ばれる小型の底引網を使い、帆に風を孕はらませ潮の流れに身を任せ、ゆっくり移動しながら漁をする帆船。近年、うたせ船を観光船に仕立てて一般客を乗せるようになった。観光客は船上で釣りや酒宴を楽しむ。その日の乗員は、ボク・友人・友人の従兄弟である船長の三人だけだった。乗船して甲板のベンチに腰掛けたら「そこ、この前松原智恵子さんが座ったところ」と教えてくれた。

釣が始まった。先ず太刀魚たちうおを釣る。さてここで問題。太刀魚を釣るための餌は何か。・・・答えはアジ。ではそのアジはどこで調達したか。・・・

答えはスーパーの魚売り場。

殆ど入れ食い状態だった。漁火に照らされてキラキラ輝く太刀魚が続々釣れた。だが太刀魚は目当てでない。この時期の狙い目は車エビだ。釣り上げた太刀魚を小さく切り刻んで餌にした。始め太刀魚で太刀魚が釣れたが、針を外して海へ戻した。やがて車エビの漁場に差し掛かったのだろうか、大振りの車エビが次々に掛かった。二十尾くらい釣り上げたところで早速戴くことになった。生きたまま殻を裂いて身を取り出し、醤油を付けて一気に口へ放り込んだ。まだピクピク動いていた。太刀魚も同様に食った。(某国の動物愛護団体に知れたら大騒ぎになるかも)

その時の醤油がやはり極甘だった。九州の海岸地方では毎日大量の魚を食べるので、自ずと醤油の塩分は控えめになる。塩分が少ないと味が薄くなるため「**」を加えて味付けをする、とのこと。その「**」については思い出せないが、兎に角甘かった。海の幸が豊富な地方はどこも同じなのだろうか。

和多都美神社③ 「宮司長岡家」

さて、二種ある「和多都美神社 御由緒」の内、後者は前者を元に更に詳しく述べたものと考えられる。よって、今回は前者について検証する。なお「古事記・日本書紀」を「記紀」とする。

当社は海宮の古跡なり。

此の文章の趣旨は、「海彦山彦伝説」に登場する海宮を指しているものと思われる。とするとやや問題あり。

上古、海神豊玉彦命此の地に宮殿を造り玉ひ、

記紀に豊玉彦命は登場するが、此の地に宮殿を造つたと言う記述は見当たらない。

御子に一男二女ありて、一男を穂高見命と申し、二女を豊玉姫命・玉依姫命と申す。

此の部分は記紀の記述に合致する。

或時、彦火火出見命失せし鉤を得んと
此の部分は記紀の記述に合致する。

上国より下り玉ひ、此の海宮に在す事三年にして、終に豊玉姫を娶り配偶し玉ふ。

記紀では海宮の場所を特定していない。他の部分は記紀の記述に合致する。

良有て鉤を得、又上国に遷り玉ふが故に、
此の部分は記紀の記述に合致する。

宮跡に配偶の二神を齋き奉りて和多都美神社と号す。

此の記述は記紀に見えない。抑も此の和多都美神社の祭神が誰か、確かな記述はどこにも見当たらない。

又社殿を距る凡二十歩にして豊玉姫の山陵及豊玉彦の墳墓あり。

此の部分に関しては、根拠となる文献が見当たらない。

寛文年中洪浪の為に神殿悉く流れて、神体のみ渚に寄り来れるが故に、往古の棟札なく勸請年月不詳。

【日本災異志】によれば【續日本玉代一覽】に「寛文二年九月十九日日向大隅地大震、海嘯起、損害甚多」とある。

海嘯||洪浪||津波

「神体のみ渚に寄り来れる」は縁起書の常套句。

全体的に古くからの伝承と記紀神話を融合させた印象が強い。しかしながら、和多都美神社が「わたつみのみや||海の宮」として永年伝えられてきたことは確かである。それが「海神族が奉斎する宮」か「海神を祀る宮」か明らかではないが、何れにしても海神族を守護する神社であることに間違いはない。

祭神についてはやや混乱している。対馬に伝わる文献から、神社名・祭神・神主名をまとめてみると、次頁の如くなる。

和多都美神社の祭神が具体的に表記されるようになったのは江戸時代中期、つまり国学が盛んになり全国の神社の由緒来歴を記紀に当て嵌めて考える風潮が高まった時代である。また、同表に「大島神社」とあるのは、「式内社和多都美神社名神大」がどの神社に相当するかを議論する

ようになった時、権力のある神道家が豊玉町に鎮座する和多都美神社とは別の神社に比定した^{ひてい}ことによる。そうした議論は今でも続いている。

では、和多都美神社についてまとめてみよう。

- ・和多都美神社は海神族を守護する神社である。
- ・対馬に海幸彦山幸彦伝説が伝わっている。
- ・祭神の系譜に穂高見命が見える。
- ・宮司長岡家の系図（十四世紀？）に同家は安曇氏の裔とある。
（式内社調査報告第二十四巻 昭和五十三年刊）
- ・「式内社和多都美神社」について昔から議論されているが、やはりこの豊玉町の神社が最有力と考えられる。

その他にも重要な点がある。それは和多都美神社の立地についてである。同社は対馬の上島と下島の間にある浅茅湾^{あそうわん}の奥深くに鎮座する。そこは対馬海峡の荒波とは全く無縁な処で、社殿は鏡のように静まり返った入江に面している。そして満潮の時は一之鳥居が海水に浸かる。安芸の厳島神社をコンパクトにした感はあるが、少し趣きが違う。厳島神社は標高六百m近い宮島の北西にある入江に鎮座し、対岸までは二km程。和多都美神社背後の山は標高百m、対岸まで六百m程の入江に鎮座する。宮島は正に厳島の大神さまが鎮座まします処としてその威容に圧倒されるが、和多都美神社はどこかアットホームな雰囲気に含まれている。規模の違いがそう思わせるのだろうか。

史料	年	神社名	祭神	宮司名
長岡家文書	観応二年（一三六一） 貞治六年（一三六七）			渡宮宮司 わたつみの宮司
懸佛	応仁三年（一四六九）	渡海宮		
對洲神社誌	貞享三年（一六八五）	渡海宮	渡海大明神	
長岡家文書	宝永六年（一七〇九） 享保七年（一七二二）			
大小神社帳	宝曆十年（一七六〇）	和多都美神社	彦火火出見命・鵜葺草葺不合命	和多都美神主職
對馬神社大帳	天明年間（一七八一～八九）	大島神社	祭神二座	
神社明細帳	明治初年	和多都美神社	彦火火出見命・豊玉姫命	
特選神名牒	明治九年（一八七〇）	大島神社	彦火火出見命・豊玉姫命	
宮弊社上申書	大正十五年（一九二〇）	和多都美神社	彦火火出見命・豊玉姫命	

〔表一〕

志賀海神社① 「小遣帳」

不知火海の「うたせ船」での酒宴は、一九八五年十月二十三日早曉、つまりボクの誕生パーティーでもあった。

十月二十三日の昼過ぎ、熊本の国鉄湯浦駅を発った。急行との接続が悪く鈍行で。二日市に午後五時頃到着。例によって駅近くの安宿に泊まった。温泉の看板は出ていたが、湯質についての記憶はない。食事が美味しくなかったのだけは覚えてる。その前まで三食続けて取れたての魚を戴いた訳だから致し方ない。翌朝、旅館からタクシーに乗り、博多周辺の有名大社廻りに出発した。一日チャーターで三万円。電車やバスで廻れば二日かかるコースなので、これまた致し方ない。

コースは、二日市温泉→太宰府天満宮→宇美八幡宮→宗像大社→志賀海神社→香椎宮→筥崎宮→櫛田神社→住吉神社→明太子のヤマヤ→博多駅。走行距離は凡そ二二〇km。

今、旅程を確認するために当時の小遣帳を捲りながら書いている。熊本の友人へのお土産は、今は亡き「日ノ出町 伝助」の焼き鳥五〇本とオールドパー一本と記されている。彼は伝助の常連で熊本に帰ってからも毎晩焼き鳥の夢を見ていたとか。

とか何とか思い出に耽っていたら思わぬ発見があった。最近、夏物の羽織がもう一領欲しいと思いつつ、呉服屋の敷居が高く買いそびれていたのだが、何と、同年十月十五日に「紹の羽織五万四千元」を購入していた。旅行の準備や事前調査にかまけ、どこかに仕舞い込んでそのまま忘れていたのだ。早速探してみよう。

志賀海神社② 「安曇氏」

では、安曇氏の本拠地とも言われる福岡県福岡市東区志賀島(旧福岡県糟屋郡志賀村)に鎮座する志賀海神社について、神社名鑑(昭和三十七年)を見てみよう。

志賀海神社 旧官幣小社 (神社名鑑より)

【祭神】

底津綿津見神 仲津綿津見神 表津綿津見神

【神事と芸能】

異賊退治表示の歩射祭 (正月一五日)

山誉種蒔漁獵祭 (二月一五日)

山誉漁獵祭の山誉神事 (十一月一五日)

御神幸祭 (九月八日夜神占により有無を定む)

【由緒沿革】

祭神綿津見の三神は志賀の荒雄安曇氏の祀った事が既に旧事紀に見えている。神功皇后新羅親征の砌りこの三神御船を守り海上の風難なからしめ給うた。よって皇后御凱旋の後安曇連をして鎮め祀らしめ給うたという。新抄格勅符によると、大同元年神封八戸を寄進せられ、三代実録には、貞観元年志賀海神に従五位上を授けられ、延喜の制名神大社に列せられた。当社は近世神領五十石を有した。大正一五年一月官幣小社に列す。

今は便利な時代である。ネット上に古事記の現代語訳が幾つかアップされている。その中から、伊邪那岐命が黄泉の国から帰り禊をする一節を転載する。ここに始めて綿津見神が登場する。訳者は不明、一部編者が訂正した。

古事記 上巻より

伊邪那岐命は黄泉の国からお帰りになって、

「私はずいぶん醜く穢れた国に行ってきたのだ。早く身体を祓い清めなければ」とおしゃって、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原にお着きになると、身につけているものを次々と脱ぎました。

(中略)

そこで「上流は流れが激しく、下流は流れが弱い」と真ん中の瀬の下りて身をすすいだ時に生まれた神の名は、

八十禍津日神 大禍津日神

この二柱の神は黄泉の国においてになったときの穢れによって現れた神です。

次にその禍を直そうとして生まれた神の名は、

神直毘神 大直毘神 伊豆能売神

次に水底で身をすすいだ時に生まれた神の名は、

底津綿津見神 底筒之男命

水中で身をすすいだ時に生まれた神の名は、

中津綿津見神 中筒之男命

水面で身をすすいだ時に生まれた神の名は、

上津綿津見神 上筒之男命

この三柱の綿津見神は安曇氏の祖神です。

安曇連たちは綿津見神の子 宇津志日金拆命の子孫です。

また底筒之男命 中筒之男命 上筒之男命の三柱の神は住吉神社の神様です。

そして左目を洗った時に現れた神の名は、

天照大御神

右目を洗った時に生まれた神の名は、

月読命

鼻を洗った時に生まれた神の名は、

建速須佐之男命

以上十四柱の神は身体を洗ったので現れた神々です。(以下略)

先の御由緒に「祭神綿津見の三神は志賀の荒雄安曇氏の祀った事が既に旧事紀に見えている」とあるので、原文を確認する。

旧事紀(先代舊事本紀) 第一巻より

底津少童命中津少童命表津少童命此三神者。

安曇連等齋祠筑紫斯香神。

少童と綿津見、斯香と志賀はそれぞれ同じ読みである。右を読み下すと、

底津少童命 中津少童命 表津少童命、此の
三柱の神は、安曇連等が齋い祠る筑紫の
斯香しか志賀の神である。

古事記では「綿津見神」、日本書紀や旧事紀では「少童命」とある。
綿津見と少童は同じ読みで表記が異なるだけなので問題ないが、
「・・神」「・・命」の違いは気になる。神道辞典に「皇祖や天神の
命を奉じて行動する神（その神の上に更に神が存在する）が命である」と
の鈴木重胤説について、「示唆的ではあるがなお検討の余地がある」と
述べている。つまり、神と命の区別は必ずしも明解ではない。

さて、同由緒に「神功皇后新羅親征の砌り、この三神御船を守り海上の
風難ふうなんなからしめ給うた。よつて皇后御凱旋の後安曇連をして鎮め祀ら
しめ給うた・・」とある。

この神功皇后新羅出兵を契機に、その後今日に至るまで日本と朝鮮
半島との間で争いが絶えない。少し立ち入って検証してみよう。抑も、
海神族である安曇氏が、何故信州の山奥を開発し、穂高の地に穂高見命
を祀ったのか、どうも事の発端はこのあたりにありそうだ。
臭つてきたぞ。

日本書紀① 「神功皇后」

ここで報告を。「紹の羽織」が見つかった。箆笥の奥深くに仕舞い込
んであった。けれども疑問が。何故、夏物の羽織を十月に購入したのか。
記憶を手繰り寄せたら原因が判った。羽織を注文したのは七月、納品は
八月、ところが支払いは十月だった。催促無しのある時払いが効く
業者なので、こうしたことは度々ある。今年もその業者への支払いが
滞っていた。深く反省し昨日完済した。近年、古い日記や出納帳が貴重な
史料として見直されている。いつの日かボクの小遣帳もその仲間に入れ
るか・・・脱線は程々にして本線に戻ろう。

古事記や日本書紀に記された内容がすべて史実と捉える人はごく希で
ある。一方、そのすべてが創作であると捉える人も同じく希である。
近年、遺跡の発掘調査などで考古学的検証が進んだことにより、記紀の
記述の正しさが徐々に証明され、信頼するに足るとされる時代が少し
ずつ遡りはじめた。昔は推古天皇、最近では継体天皇あたりまでか。

さて、神功皇后が実在の人物であったかどうか、或いは歴史的事実の
神話化であったかどうかの議論は他に譲るとして、日本と朝鮮半島との
間で幾度かの争いがあったことは確かである。また、古代の日本は
一種のアニミズム社会ともシャーマニズム社会とも考えられる。とする
ならば、国難に際し特に靈感の強い女性が活躍する場面は決して少なく
なかったのではないか。天照大御神・卑弥呼・倭迹迹日百襲姫命、そして
神功皇后。

ここで古典をそのまま引用するとかなり長くなる。安曇（阿曇）と新羅をキーワードに抜き出してみよう。古事記に登場する安曇は、上に述べた「この三柱の綿津見神は安曇氏の祖神です。安曇連たちは綿津見神の子 宇津志日金拆命の子孫です」の一節のみである。以下日本書紀から引用する。

【仲哀天皇二年】

一月、氣長足姫尊（神功皇后）を皇后とされた。

七月、皇后は豊浦津（現在の山口県下関付近？）に泊まられた。

この日皇后は如意の珠（すべて願いが叶うという珠）を海から拾われた。

【仲哀天皇八年】

九月、ときに神があつて、皇后に託り誨を垂れ、「天皇はどうして熊襲の従わないことを憂えられるのか、そこは荒れて瘦せた地である。戦いをして討つに足りない。この国より勝つて宝のある国、譬えば処女の眉のように海上に見える国がある。目に眩い金・銀・彩色などが沢山ある。これを栲衾（新羅の枕詞）新羅国という。もしよく自分を祀つたら、刀に血ぬらないで、その国はきつと服従するであろう。また熊襲も従うであろう・以下略」と述べられた。天皇は神の言葉を聞かれたが、疑いの心がおありになった。そこで高い岳に登って遙か大海を眺められたが、広々としていて国は見えなかった。天皇は神に答えて「私が見渡しましたのに、海だけあつて国はありません。どうして大空に国がありませんようか。

どこの神が徒に私を欺くのでしよう。またわが皇祖の諸天皇たちは、ことごとく神祇をお祀りしておられます。・以下略」といわれた。神はまた皇后に託して「水の映るように、鮮明に自分が上から見下ろしている国を、どうして国がないといつて、わが言を誹るのか、汝はこのようにいつて遂に実行しないのであれば、汝は国を保てないであろう。ただし皇后は今始めて孕つておられる。その御子が国を得られるだろう」といわれた。天皇はなおも信じられなくて、熊襲を討たれたが、勝てないで帰つた。

【仲哀天皇九年】

二月、天皇は急に病氣になられ、翌日亡くなられた。齡五十一。

【仲哀天皇九年↓神功皇后撰政元年】

九月、諸国に令して船舶を集め兵を練られた。軍卒が集まりにくかつた。大三輪の神社を建て、刀・矛を奉られた。すると軍卒が自然に集まつた。吾瓮海人烏麻呂を使つて、西の海に出て、国があるかと思させられた。還つていうのに、「国は見えません」と。また磯鹿（志賀島）の海人名草を遣わして見せた。何日か経つて還つてきて、「西北方に山あり、雲が横たわっています。きつと国があるでしょう」といった。

皇后は三軍に令ちていわれた。「士気を励ます鐘鼓の音が乱れ、軍の旗が乱れるときは、軍卒が整わず、財を貪り、物を欲しいと思つたり、私事に未練があると、きつと敵に捕らえられるだろう。敵が多くてもくじけてはならぬ。暴力で婦女を犯すのを許しては

ならぬ。自ら降参する者を殺してはならぬ。戦いに勝てば必ず賞がある。逃げ走る者は処罰される」と。

十月、鰐浦(対馬の最北端にある)から出発された。その時風の神は風を起こし、波の神は波を上げて海中の大魚はすべて浮かんで船を助けた。風は順風が吹き、帆船は波に送られた。舵や櫂(かい)を使わないで新羅に着いた。その時、船をのせた波が国の中にまで及んだ。これは天神地祇(てんじんちぎ)がお助けになっているらしい。新羅の王は戦慄して、なすべきを知らなかった。多くの人を集めていうのに、「新羅の建国以来、かつて海水が国の中まで上がってきたことは聞かない。天運が尽きて、国が海となるかも知れない」と。そしてまた「東に神の国あり、日本というそうだ。聖王(せいおう)があり天皇という。きつとその国の神兵だろう。とても兵を挙げて戦うことはできない」と、白旗を揚げて降伏した。

日本書紀② 「水先案内人」

右の引用文は神功皇后新羅出兵の段の一部であるが、他の部分を見ても志賀海神社の由緒書にある「神功皇后新羅親征の砌(みき)、この三神御船を守り海上の風難なからしめ給うた。よつて皇后御凱旋の後安曇連をして鎮め祀らしめ給うた」という記述は見えない。書紀では住吉の神の功績を大きく取り上げている。ただし「天神地祇(てんじんちぎ)がお助けになって・・・」

を拡大解釈すれば、綿津見神も当然その中に含まれることになり、強ち潤飾(じゆんしやく)とも言い切れない。

むしろ新羅出兵を決定付けた「志賀の海人名草(あまなぐさ)」の役割に関心が及ぶ。彼は海原遠く遙か彼方の山を見て、その結果を皇后に報告している。このことから志賀の海人(あま)は安曇族の役割が一種の水先案内人であったことが推察される。古代の航海に於いて、太陽も星も見えない時に頼りになるのは山や岬ではなかったか。そして自分のいる位置を割り出すためには、事前に山並や海岸線の特徴を掴んでいる必要がある。「山並の特徴は最も目立つ峰は穂高」とは言えないだろうか。もし、その推察が許されるならば、穂高見命は阿曇族の中でも最も地形に詳しいエキスパートだったのではないか。と益々想像を掻き立てられる。もう少し日本書紀の引用を続けよう。

【應神天皇三年】

十一月、各地の漁民が騒いで、命に従わなかった。阿曇連の先祖大浜宿彌(おほはまのすくね)を遣わしてその騒ぎを平らげた。それで漁民の統率者とされた。

【應神天皇五年】

八月、諸国に令ちて海人部・山守部を定めた。

【履中天皇元年 仁徳天皇崩御の年】

一月、皇太子(後の履中天皇)と弟の住吉仲皇子との間で諍(いさか)いがあつた。阿曇連浜子は仲皇子(なかつみこ)についた。やがて仲皇子は殺され阿曇連浜子は捕らえられた。

二月、履中天皇が即位された。

四月、天皇は阿曇連浜子を召して言われた。「お前は仲皇子と謀つて、国家を傾けようとした。死罪に当たると。しかし大恩を垂れて、死を免じて額に入墨の刑とする」と。その日、目の縁に入墨をした。時の人はそれを阿曇目と言った。

日本書紀③ 「御小休」

しばしお茶ケタイム（＝御小休・おこやすみ）にしよう。

今日のお茶ケの友は明太子だ。

その昔、神社脇の道路が拡幅される以前、社務所に隣接して貸し地があつて福岡出身の会社員夫婦で住んでいた。二人はよく福岡の実家へ帰り、そのお土産に明太子を戴いた。当時、首都圏で明太子を扱っていたのは東京モノレール浜松町駅の売店だけだった。福岡で製造した明太子を飛行機で運んでいたのだ。やがて山陽新幹線が博多まで開通し、徐々に販売拠点は増えたが、わざわざ探し求めるほどではなかった。年に一二度のお土産を待つのみだった。

一九八五年十月二十四日、博多周辺の有名大社を廻った後、タクシীর運転手さんに好みの明太子はどの店か尋ねた。「フクヤかヤマヤかな」とのご託宣を賜った。いつも戴く明太子はフクヤだったので、その時はヤマヤに決め、博多の中洲へ向かった。

当時の明太子は、菌触りや身の締りが良く味も好みに合い、えらくご飯が進んだものだ。ところが最近の明太子は、どこの製品も身が柔らかすぎて水っぽく、ご飯は半膳がやつとだ。大量生産になって味が落ちたのか、スケトウダラの品質に問題があるのか、原因は判らない。

以下、フリー百科事典ウィキペディアより、明太子の歴史を転載する。

【辛子明太子】とはスケトウダラの卵巣を唐辛子等を使った調味液で味付けしたもので、食材および食品の一種である。近年は明太子と略されることも多いが、正しい言い方ではない。同じくスケトウダラの卵巣を材料とする食品にたらこがある。

【名称】語源は中国語にまでさかのぼることが可能であるが、直接には朝鮮語でスケトウダラのことを「ミョンテ」と言ったのが始まりである。朝鮮半島で作られたスケトウダラの塩漬は、十七世紀に北九州・山口地方へ伝わった。このためこの地方では江戸時代から、スケトウダラを「めんたい」と呼んだ。漢字表記「明太」は朝鮮半島でミョンテを「明太魚」、「明太」と書いたことからきている。つまり「明太」とは「タラ」のことであり、「明太子」とは「タラコ」という意味になる。朝鮮半島では辛子明太という食べ物があるが、これは唐辛子で味付けした「タラ」である。

【歴史】スケトウダラを加工して食べる食文化は、朝鮮半島で十七世紀ごろには広まっていた。日本に伝わったのは江戸時代である。

戦前から戦中にかけて、国鉄は下関と当時日本領であった朝鮮（現韓国）の釜山との間に関釜連絡船を運行していた。この連絡船を經由して、昭和初期から明太の卵巣の辛子漬け「明卵漬」（ミヨンナツジョ）が下関へ輸入された。これは唐辛子やニンニクでまぶした「キムチ」に近いものであった。さらに下関では日持ちをよくするために唐辛子をまぶす再加工をしていたといわれる。これは「まぶす」タイプの「からしめんたい」の先駆といえる。辛子明太子の名が広く一般家庭にまで知られようになったのは、一九七五年に山陽新幹線が博多駅まで開業した影響が大きい。のちの辛いものブームの追い風もあり、急速に全国へ波及した。

日本書紀④ 「磐井の乱」

二〇〇七年正月、安曇野市長の年頭メッセージに「六世紀に安曇族と言われた海運氏族が、現在の福岡市志賀島から東日本へ進出し、信濃国へ入りその一部が安曇へ移住したと伝えられています」とある。安曇野地方の郷土史資料には、安曇族が信濃国へ移住した契機を磐井の乱とする記述が数多く見える。そこで、日本書紀から磐井の乱の一節を全文転載する。

【継体天皇二十一年】

六月二十一日、近江の毛野臣が、兵六万を率いて任那に行き、新羅に破られた南加羅喙己吞を回復し、任那に合わせようとした。

このとき筑紫国造磐井が、ひそかに反逆を企てたが、ぐずぐずして年を経、事のむつかしいのを怖れて、隙を窺っていた。新羅がこれを知ってこっそり磐井に賄賂を送り、毛野臣の軍を妨害するように勧めた。

そこで磐井は肥前・肥後・豊前・豊後などをおさえて、職務を果せぬようにし、外は海路を遮断して、高麗・百濟・新羅・任那などの国が、貢物を運ぶ船を欺き奪い、内は任那に遣わされた毛野臣の軍をさえぎり、無礼な揚言をして、「今でこそお前は朝廷の使者となつているが、昔は仲間として肩や肘をすり合せ、同じ釜の飯を食つた仲だ。使者になつたからとて、にわかにお前に俺を従わせることはできるものか」といって、交戦して従わず、氣勢がさかんであった。

毛野臣は前進をはばまれ、途中で停滞してしまった。天皇は
大伴大連金村・物部大連鹿鹿火・許勢大臣男人らに、詔をして、「筑紫の磐井が反乱して、西の国をわがものとしてゐる。いま誰か將軍の適任者はあるか」といわれた。大伴大連らみなが、「正直で勇に富み、兵事に精通しているのは、いま鹿鹿火の右に出る者はありません」とお答えすると、天皇は、「それが良い」といわれた。

秋八月一日詔して、「大連よ。磐井が叛いている。お前が行つて討て」といわれた。物部鹿鹿火大連は再拜して、「磐井は西の果てのずるい奴です。山河の險阻なのをたのみとして、恭順を忘れ乱を起こしたものです。道徳に背き、驕慢でうぬぼれています。私の家系は、祖先から今日まで、帝のために戦いました。人民を苦し

から救うことは、昔もいまも変わりませぬ。ただ天の助けを得ることは、私が常に重んずるところです。よく慎んで討ちましよう」といった。詔に、「良将は出陣にあたっては将士をめぐみ、思いやりをかける。そして、攻める勢いは怒濤や疾風のようなものである」といわれ、また、「大將は兵士の死命を制し、国家の存在を支配する。つつしんで天誅を加えよ」といわれた。天皇は將軍の印綬を大連に授けて、「長門より東の方は自分が治めよう。筑紫より西はお前が統治し、賞罰も思いのままに行なえ。一々に報告することはない」といわれた。

二十二年冬十一月十一日、大將軍物部麿鹿火は、敵の首領磐井と、筑紫の三井郡で交戦した。両軍の旗や鼓が相対し、軍勢のあがる塵埃は入り乱れ、互いに勝機をつかもうと、必死に戦って相ゆずらなかつた。そして麿鹿火はついに磐井を斬り、反乱を完全に鎮圧した。

十二月、筑紫君葛子は、父（磐井）の罪に連座して誅せられることを恐れ、糟屋の屯倉を献上して、死罪を免れることを求めた。

要点をまとめると、

- ・ 大和朝廷は新羅への出兵を計画していた。
- ・ このとき筑紫国造磐井がひそかに反逆を企てた。
- ・ 新羅が磐井に賄賂を送り、朝廷軍を妨害するように勧めた。
- ・ 磐井は肥前・肥後・豊前・豊後などをおさえた。

- ・ 磐井は高麗・百濟・新羅・任那などの貢物を運ぶ船を略奪した。
 - ・ 朝廷は物部大連麿鹿火を差し向けた。
 - ・ 翌年十一月、物部麿鹿火は筑紫の御井郡で磐井を斬った。
 - ・ 筑紫君葛子は糟屋の屯倉を献上して死罪を免れることを求めた。
- （筑紫君葛子は磐井の子）

さて、ここに安曇氏の名前は出てこない。けれども当時安曇氏は筑紫国造磐井の配下にあつて、何らかの処分を受けた可能性は極めて高い。特に海上を封鎖し半島諸国から朝廷への貢物を略奪している。その責めを安曇族が受けることは十分にあり得る。

うぐん、如何に可能性大とは言え、これだけでは説得力がない。抑も信濃国との接点が全く見えない。

日本書紀⑤ 「白村江の戦い」

磐井の乱の後、安曇（阿曇）氏が登場するのは、凡そ百年後の推古天皇の時代。そこで磐井の乱から安曇連比羅夫が戦死したと伝えられる（兵を収めて帰国したとの説もある）白村江の戦いまで、日本書紀及び吉川文館・日本史総合年表から、主に安曇氏と朝鮮半島情勢に関する記述を抜き出した。では、しばし日本史のおさらいを。

[年表二]

天皇	西暦	月	出来事（主に安曇氏及び朝鮮半島情勢について）
継体	507	2	継体天皇即位。
	512	12	百済の要請に応じ、任那の4県を割譲。
	527	6	任那復興のため、兵6万を遣わす。 筑紫国造磐井、新羅と通じ朝廷軍を遮る。
	528	11	物部麁鹿火、磐井を筑紫御井郡で交戦し斬殺。
		12	磐井の子筑紫葛子、糟屋屯倉を献上し死罪を免れることを請う。
531	2	継体天皇崩御。	
安閑 宣化	534		武蔵国造の地位をめぐり争いが起こる。
	537		任那を鎮め、百済を救う。
	538		この頃、仏教伝来。（異説あり）
欽明	540		大伴金村、任那問題で失脚。
	544		百済・任那日本府、任那復興を図る。
	547	4	百済、援軍を要請。
	550		この頃、倭国内で鉄生産が始まる。（異説あり）
	551		この年、百済・新羅・任那、高句麗を討つ。
	552	10	仏教礼拝の可否について論争が起こる。
	553	1	百済、軍兵の派遣を要請。
	554	2	百済より医・易・暦の博士渡来。
	560	9	新羅、朝貢。
	562	1	新羅、任那の宮家を滅ぼす。
	570		この年、物部尾輿ら、堂塔を焼き、仏像・教典を難波江に流す。
敏達	574		厩戸皇子誕生（聖徳太子）。
	575	4	新羅・任那・百済に使を派遣。
	579	10	新羅、調と仏像をおくる。
	580	9	新羅、調を献じる。朝廷、納めず返却。
	581		蝦夷数千が反乱、その首領らを召し、忠誠を誓わせる。
	582	10	新羅、調を献じる。朝廷、納めず返却。
	585	3	物部守屋、塔を倒し、仏像・仏殿を焼く。
用明 崇峻	587	7	蘇我馬子、物部守屋とその一族を滅ぼす。
		8	蘇我氏、崇峻天皇を擁立し、即位させる。
	589	7	東山道・東海道・北陸道に使者を遣わし、国境を視察させる。
	592	11	蘇我馬子、崇峻天皇を暗殺。
推古	592	12	推古天皇即位。
	593	4	厩戸皇子を皇太子にたて摂政とする。この年、難波に天王寺創建。
	596	11	蘇我氏、飛鳥寺（法興寺）を建立。
	597	4	百済王、王子阿佐を遣わし朝貢。
	600	2	新羅と任那が戦う。この年、海部某・保積某を遣わし、任那を援けて新羅を攻撃。
		601	3
	11		新羅征討を計画。
	602	2	来目皇子を撃新羅將軍とし、兵2万5千人を動員。
		6	来目皇子、筑紫で病に臥し、新羅征討を中止。
	603	12	冠位十二階を制定。
	604	1	はじめて暦日を用いる。
		4	憲法十七条を制定。
	607	7	遣随使（小野妹子ら）。聖徳太子、法隆寺を建立。
	608	4	妹子、随使を伴い帰国。
		7	妹子、随使とともに、再び随へ渡る。
	610	10	新羅・任那の使を朝廷に迎える。
	618	8	高句麗使、隋滅亡を伝える。
	620	8	蘇我馬子、聖徳太子、「天皇記」「国記」を選録。
	621		この年、新羅、朝貢。初めて上表。
	622	2	聖徳太子死去（49歳）。
	623		この年、新羅、任那を破る。

[年表二一の続き]

天皇	西暦	月	出来事（主に安曇氏及び朝鮮半島情勢について）
推古	623		この年、新羅、任那を破る。
	624	4	阿曇連を法頭とした。
		10	蘇我馬子、阿曇連と阿部臣麻呂の二人に、葛城県を馬子に賜るよう、天皇に奏上させた。
	626	5	蘇我馬子死去。蝦夷が大臣となる。
舒明	629	1	舒明天皇即位。
	630	3	高句麗・百濟使、朝貢。
		8	遣唐使を派遣。
	631	3	百濟王、王子豊璋を人質として日本に送る。
	635	6	百濟使、朝貢。
	637		この年、蝦夷反乱。上毛野形名を将軍として攻撃。
638		この年、百濟・新羅・任那使、朝貢。	
皇極	642	1	皇極天皇即位。
			百濟に遣わされた大仁阿曇連比羅夫が帰国した。
		6	百濟の王子翹岐を阿曇山背連比羅夫の家に住ませた。
	643	11	1日、蝦夷の子入鹿、斑鳩宮の山背大兄王を襲撃。 11日、王は自害。
孝徳	645	6	12日、中大兄皇子・中臣鎌子、入鹿を暗殺。
			13日、蘇我蝦夷自殺、死に臨み「天皇記」「国記」等を焼く。 船恵尺、火中より「国記」を取り出す。
			14日、孝徳天皇即位。中大兄皇子を皇太子とし、鎌足、内臣となる。
			19日、はじめて年号を「大化」と定める（大化の改新）。
		9	古人大兄皇子、謀反のかどで討たれる。
	646	1	難波に遷都（長柄豊崎宮）。
		2	改新の詔を宣布。薄葬の制を定める。
		3	高句麗・百濟・任那・新羅使、朝貢。 東国の国司・国造の功過を評定。
	647	1	高句麗・百濟・新羅使、朝貢。
			この年、七色十三階の冠位を制定。淳足柵を設ける。
	648	2	高句麗・百濟・新羅に学問僧を派遣。磐舟柵を設ける。
	649	3	蘇我日向、蘇我石川麿呂に叛意あると讒言。翌日、石川麻呂は山田寺で自殺。
		5	新羅に使いを遣わす。
	650	4	新羅使、朝貢。
	651	2	百濟・新羅使、朝貢。
		この年、新羅使の唐服着用を責め、筑紫より追い返す。	
652	1	班田収受完了。	
	4	戸籍を造らせる。百濟・新羅使、朝貢。	
653		中大兄皇子、孝徳天皇と不和になり、皇祖母（皇極）、皇后、群臣らと飛鳥河部宮に遷る。	
齐明	655	1	齐明天皇即位（皇極天皇重祚）この年、高句麗・百濟・新羅使、朝貢。
	656	8	高句麗使、朝貢。この年、高句麗・百濟・新羅使、朝貢。
	657	9	西海使の小花下阿曇連頼垂らが百濟から帰って、駱駝1匹・驢馬2匹を奉った。
	658	4	阿倍比羅夫、蝦夷を討つ。
		11	有間皇子、謀反のかどで処刑。西海使の小花下阿曇連頼垂が百濟の情勢を報告した。
	659	3	阿部比羅夫、蝦夷を攻め、後方羊蹄に政所を置く。
	660	4	阿倍比羅夫、肅慎を攻める
		10	百濟、唐・新羅軍に破れ、大和へ救いを求める。中大兄皇子、漏剋（水時計）を作る。 この年、百濟救援のため、駿河国に船を造らせる。
		661	1
	天智 称制	661	7
8			阿曇比羅夫・阿部比羅夫らを将軍とし、百濟救済に遣わす。
662		5	百濟王子豊璋を兵5千余とともに百濟に遣わす。
662		5	阿曇比羅夫、百濟王子豊璋を王位に就かせる。
		663	3
663		8	日本・百濟軍、唐・新羅軍と白村江で戦い大敗。

[年表三] 安曇 (阿曇) 氏に関する記述を一纏めにした。

天皇	西暦	日本書紀の記述	姓	職	任務	移住の可能性
神后摂政元年		磯鹿 (志賀島) の海人名草は海原の遠くに山が見えることを皇后に報告した。		海人	水先案内人	
應神天皇三年		阿曇連の先祖大浜宿彌が漁民の統率者とされた。	宿彌	中央官僚	海人の宰	
應神天皇五年		海人部・山守部を定めた				
履中天皇元年		阿曇連浜子、仲皇子の謀議に加わった。死罪を免れ額に入墨の刑を受けた。(安曇目)	連	中央官僚		あり
継体天皇	528	磐井の子筑紫葛子、糟屋屯倉 (安曇郷?) を献上し死罪を免れることを請う。		海人	磐井の配下?	あり
推古天皇	624	阿曇連を法頭とした。	連	中央官僚	僧尼の監督役	
		蘇我馬子、阿曇連と阿部臣麻呂の二人に、葛城県を馬子に賜うよう、天皇に奏上させた。				
皇極天皇	642	百済に遣わされた大仁阿曇連比羅夫が帰国した。	連	中央官僚	百済への使者	
		阿曇連比羅夫らを、百済の弔使のもとに遣わした。				
		百済の王子翹岐を阿曇山背連比羅夫の家に住まわせた				
齐明天皇	657	西海使の小花下阿曇連頼垂らが百済から帰って、駱駝1匹・驢馬2匹を奉った。	連	中央官僚	百済への使者	
	658	西海使の小花下阿曇連頼垂が百済の情勢を報告した。				
天智称制	661	阿曇比羅夫・阿部比羅夫らを将軍とし、百済救済に遣わす。	連	中央官僚	征討将軍	
	662	阿曇比羅夫、百済王子豊璋を王位に就かせる。				
	663	日本・百済軍、唐・新羅軍と白村江で戦い大敗。				

日本書紀⑥ 「近江商人」

ここでまた「御小休」を。

一九九七年七月二十日、湖北・敦賀・三方五湖・小浜へ三泊四日の旅行へ出かけた。琵琶湖は二度目だったので、前回廻れなかった湖北に絞った。最初の訪問地は琵琶湖に浮かぶ竹生島。安芸の厳島神社、相模の江島神社と並び称される日本三大弁天の一つ竹生島神社がある。(正式名称は都久夫須麻神社) ここで妖艶な弁天様の話題はスルーして、その前の道中について一席。

その日は、午前十時十五分長浜発・竹生島行の連絡船に乗るため、朝四時三十分車(オデッセイ)で出発した(家人と)。曇り空の中ひたすら東名を行く。浜松を過ぎ三ヶ日辺りから雨が降り出した。高速道路の上では少しの雨でも要注意、速度を落として安全運転を、と思ったら追い越して行った大型トラックの荷台から何やら光る物が転がり落ちた。ハンドルを切る間もなくドスン。一瞬見た限りでは円筒形のアルミカステレンスの物体(直径数センチ長さ十センチくらい?)。不味いとは思ったが、それほど強い衝撃ではなかったたので、そのまま進み次のSAに入った。

ラジエーターグリルが少し傷んでいた。この程度なら運転に支障は無さそう・・・と本線に戻って間もなく、エアコンが効かない。スイッチ類をあれこれ弄つても駄目。エアコンのラジエーターがやられたようだ。七月の雨、窓は開けられず車中はムシムシ、ガラスが曇るので止む無くヒーターを付けた。思案の末、長浜に着いたら修理をすることにして、

サウナ状態で二時間ほど走り、ホンダ長浜店に飛び込んだ。

ここで、またまた問題発生。七月二十日は火曜日。ところが「海の日」で修理担当者は休み。翌日はホンダの定休日。ディーラーに代車なし。夏休みの初日でレンタカーは何処も空きなし。引き返すのは難行、進むのは苦行。さてどうしたものか。結局、試乗用の車（ライフ）を借りることにした。まだ数百kmしか走っていない新車を。それも無料で。連絡船は一便遅れて午前十一時三十分発になった。

七月二十三日、無事三泊四日のドライブ旅行を終え、ホンダ長浜店に車を返し、修理上りのオデッセイを受け取った。「近江商人の歩いた後には草木も生えない」と聞いていたのは、何かの間違いだったようだ。

若狭彦神社①「御食国」

未だ安曇氏と信濃国との接点は見えない。このまま手ぶらでは安曇野に帰れない。ならば回り道をして少しでも糸口を見つけることにしよう。

小浜は「オバマ次期米大統領」で大層フィーバーしているとか。何も同音のよしみで騒がなくとも十分に魅力のある町と思うのだが、地元商工会にお祭り好きがいるのだろうか。「世界遺産を目指す若狭小浜」なるスローガンもチラホラ聞こえてくる。

小浜は一言で言えば文化財の町。「犬も歩けば国宝に、石を投げれば重文に当たる」とも。決して大きな町ではないが、一日二日ではとても廻りきれないほどの文化財がある。

数ある国宝や重文の中から、津軽の十三湖を支配したとされる安藤氏に所縁の深い「羽賀寺」を取り上げたいところではあるが、余りにも廻り道が過ぎるので、別の機会に・・・

では、若狭国一宮「若狭彦神社」にお詣りしよう。例によって、先ず「御由緒」を神道辞典から転載する。

若狭彦神社（神道辞典より）

福井県小浜市に鎮座する元国幣中社。上下の二宮に分れ、上宮は同市の竜前にあつて彦火々出見尊を若狭彦大神として奉祀、下宮は若狭姫とも称し同市の遠敷にあつて豊玉姫命を若狭姫大神として奉祀。延喜の制では二座とも名神大社。若狭国の一宮。また上宮を若狭一宮、下宮を二宮と称し、両宮を合せて若狭一宮ともいう。上宮は靈龜元年、下宮は養老五年の創建とする。淳和天皇天長六年、祭神の後裔大和朝臣宅継を神主とされた。大和朝臣は大倭国造の後で、彦火々出見尊を祖とする。当社にある鶴の瀬は奈良東大寺二月堂の若狭井に通ずるとの信仰があつて、例年送水神事が行われている。

由緒書に、上宮の祭神は彦火々出見尊、下宮の祭神は豊玉姫命とある。対馬の和多都美神社の祭神と全く同じである。少々色めき立つが、この祭神には疑問がある。延宝三年に書き上げられた「若洲管内社寺由緒記」に、「元正天皇の御宇、靈龜元年九月十日、当国遠敷郡西郷の内、靈河の源白石の上に始めて跡を垂れ、その形は俗体にして唐人の如し。白馬に乗り白雲に居す。今の若狭彦大明神は是なり。（以下略）」とある。

彦火々出見尊と「その形は俗体にして唐人の如し。白馬に乗り白雲に居す」とは結び付くだろうか。【若洲管内社寺由緒記】の信憑性については、俄には判断できないが、若狭彦神社が奈良時代に存在していたことは確かである。

【続日本紀】宝亀元年八月の条に「(前略)若狭国の目・從七位下の伊勢朝臣諸人と内舍人大初位下の佐伯宿彌老を遣わして、鹿毛の馬を若狭彦神と宇佐八幡神宮に、それぞれ一匹宛奉納させた」とある。

一般的に古社の祭神探しは困難を極める。例えば、寒川神社・氷川神社・杉山神社等々の場合、実は祭神に関しては諸説があつて未だに定説が無い。それぞれの神社では、記紀に照らして祭神を比定しているが、その根拠は心許ない。若狭彦神社の場合「若狭に坐す彦神と姫神」で良いと思うのだが、それでは収まりが悪いのだろうか。しかしながら、若狭彦神社が海の民の守護神として崇められてきたことは確かである。

藤原京や平城京跡の発掘によつて出土した木簡の中には、若狭から送られてきた調の塩をはじめ、御贄としての鯛や貽貝など魚や貝の荷札が数多く含まれていることから、若狭は神や朝廷に奉る食物を供給する「御食国」であつたとされる。このことは平安時代に編纂された【延喜式】の記述からも確認できる。

さて、塩・魚・貝などは誰が産するか。もちろん海の民である。つまり若狭は海の民の住む重要な拠点の一つであつたと考えられる。そして、その海の幸を運んだとされる道が、後世「鯖街道」と呼ばれ、日本海側諸国の物資を若狭で陸揚げし京へ運ぶ重要な道となつた。では、若狭と安曇はどう結びつくのか……

若狭彦神社② 「内膳司」

【続日本紀】神護景雲二年六月の条に「從五位下安曇宿彌石成を若狭守に任ず」とある。前の若狭国司は高橋氏であつた。

さて、この高橋氏と安曇氏は、靈龜二年、「神今食」(かむいまけ・じんこんじき 宮中の重要な行事の一つで、年二回、六月と十二月に行われる)に際して、内膳司奉膳正六位上安曇宿彌刀と從七位上高橋乎具須比との間で争いがあった。事の発端は些細だが、その後安曇氏滅亡に発展する重要な事件である。

そこで、その経緯を【高橋氏文】から引用する。(群書類従収蔵)

安曇宿彌刀は高橋乎具須比に対して「私の方が官位・官職が上であり、また年も上である。だからあなたより先に立つて供奉を行いたい」と言った。これに対して乎具須比は「神今食の日に御膳を供奉するのは、膳臣の役目と決まっています。それは他の氏の者がすることではありません」と言つて拒否した。しかし、刀はあくまでも先に立つことを主張したが、乎具須比も頑として譲らなかつた。この争いが内裏に聞こえたので、天皇が判定を下した。それによると、「昔から執り行われてきた神事では供奉の順序など今更変更は許されない。宜しく先例に従つて、これを行うべし」と。しかし、その後も両者の争いは繰り返された。

【続日本紀】神護景雲二年二月の条に「天皇は勅して、職員令に準拠し、高橋・安曇二氏の者を内膳司の長官に任ずる時は、それを奉膳と称し、

他氏の者を任ずる時は、その呼名を正とせよ」とある。

【高橋氏文】によると「高橋・安曇二氏の争いは宝亀六年の神今食の時に、安曇宿彌廣吉と高橋波麻呂との間で再燃した。この時、神今食の行立の先後について、広吉は強進前立（無理矢理進んで前に立った）したため、波麻呂は挽却方吉（広吉を無理に引つ張って後ろに退けた）した」とある。

一見子供の喧嘩のように思えるが、果たしてそうであろうか。今日、名簿を作成したり会議や式典の席順を決めたりする時、担当者は細心の注意を払っている。また、誰が先に立つか、「どうぞお先に」「いえ、あなた様こそお先にどうぞ」は良く見かける光景である。かと思えば「我先に」と列順を乱す者もいる。

さて、今回もまた出し惜しみをして、安曇氏滅亡の件は後述する。話を安曇宿彌石成が若狭国司に任せられた件に戻す。

つまり、奉膳を承る安曇氏一族の者が、御食国である若狭の国司に補任されたことになる。奉膳は、朝廷や神に奉る御贄の調理・調達・配膳の総括責任者であり、当然その産地について強い影響力を持っていたものと考えられる。高橋氏にとって、若狭国司の役を退くことは痛手ではなかったか。更に話を戻す。

白村江の戦いで活躍した阿曇連比羅夫が（戦死とも帰国とも伝えられる）、征討將軍の一人として敗戦の責任を問われた可能性は十分有り得るのだが、そうした記述はどこにも見えない。

【日本書紀】天智天皇九年九月の条に「阿曇連頼垂を新羅に遣わした」、

【日本書紀】天武天皇元年三月の条に「朝廷は内小七位阿曇連稲敷を筑紫に遣わし・・」とあることから、白村江での敗戦後、阿曇氏が断絶することなく、「連」としての姓を引き継いでいることが判る。その次に登場する上記靈龜二年の記述には、姓は「宿彌」となっている。これは大宝令で氏姓制度が改訂されたことによるものか、或いは、別の安曇氏かは定かでない。古来海神族は、漁労・製塩・廻船・交易を担い、阿曇族はその統率者として活躍してきたが、藤原京の時代からは、専ら内膳司の長官である奉膳の役を拝命することになった、と考えられる。或いは、更に古い時代から高橋氏と共に膳職を務めていたかも知れない。どうやら安曇（阿曇）氏は、筑紫の安曇氏とは別に、畿内にも根拠地があったようだ。

そこで、若狭から京への道筋を訪ねてみることにしよう・・・

若狭彦神社③ 「鵜の瀬」

小浜の町は、若狭湾内の入江の一つである小浜湾に面している。小浜湾は波静かな天然の良港で、海神族の拠点として申分のない立地である。琵琶湖へは標高九〇〇m級の山並を越えて約三〇km、奈良の京までは一二〇kmほどである。若狭彦神社は、海岸から東へ凡そ六km入った処に鎮座し、近くに遠敷川が流れている。更に川を三kmほど遡ると「鵜の瀬」がある。

一九九七年七月二二日午後二時、鵜の瀬に到着した。「若狭国一宮降臨の地 靈域 鵜の瀬 若狭彦神社 若狭姫神社 飛地境内」の立札があった。その付近は遠敷川の流れが少し広がっている。

「その広がった部分の向こう岸の左端に小さな渦ができていて、そこから水が吸い込まれていく」

と地元の人に話を聞いた。渦は確認できなかったが、太い注連縄が張ってある辺りに渦ができるのだろう。渦の代わりに子供達を確認した。川遊びにはしゃぐ男女小中学生合わせて八人。その一人に声をかけた。

「写真撮ってもいいかな」OKの返事を受けて何枚か撮った。川から上がってきた男の子に「オジサンたちどこから来たの」と聞かれたので、「横浜から」と答えたら、「横浜は遠いなあ」とたわいもない会話の後、撮った写真を送る約束をした。帰浜後写真を送ったら、

「写真をありがとう。ボクは* * 高校の野球部に入って絶対甲子園に行きます。出場が決まったら手紙を出します。きつとテレビで見て下さい」と返事がきた。二通目の手紙はなかった。

では、鵜の瀬について、小浜市が立てた由緒記を転載する。

史蹟「鵜の瀬」由緒記 (小浜市)

天平の昔、若狭の神願寺(現在の神宮寺)から奈良の東大寺に行かれた印度僧・実忠和尚(おしよ)ではなく「かしょう」が大仏開眼供養を指導の後、天平勝宝四年(七五三)

二月初日に全国の神々を招待され、すべての神々が参列されたのに、若狭の遠敷明神(彦姫神)のみは見えず、ようやく二月十二日(旧暦)

夜中一時過ぎに参列された。それは川漁に時を忘れて遅参されたので、そのお詫びもかねて若狭より二月堂の本尊へお香水の闕伽水を送る約束をされ、そのとき二月堂の下の地中から白と黒の鵜がとび出てその穴から泉が湧き出たのを若狭井と名付け、その水を汲む行事が始まり、それが有名な「お水取り」である。その若狭井の水源がこの鵜の瀬の水中洞穴で、その穴から鵜が奈良までもぐっていったと伝える。この伝説信仰から地元では毎年三月二日(新暦)夜この淵へ根来八幡宮の神人と神宮寺僧が神仏混淆の「お水送り」行事を行う習いがある。

鵜の瀬から遠敷川を更に遡り、峠を越えれば近江の国、峠付近を源に琵琶湖へ注ぐ川・何と「安曇川」なのだ。けれども「あずみがわ」とは呼ばず「あどがわ」と名付く。「安曇」の「曇」は「曇天」の「曇」で、「安曇」を素直に発音すれば「あんどん」だ。古代は「ん」はあまり発音されなかったそうだから「安曇・あど」で全く問題ないではないか。それだけではない。承平年間(九三二―九三八)に近江国伊香郡「安曇」郷が見える。現在の何処に相当するかは不明だが、湖北にあって「安曇川」に近い地域であったことは確かである。更にまた、伊香郡の西隣には高島郡があり。継体天皇の生誕地と伝えられる。何やら立て込んできた。核心に近づいてきたのだろうか・・・

安曇氏の足跡① 「暫定仮々説」

かなり話が込み入ってきた。一度整理してみよう。「ではないだろうか」「と思われる」「かも知れない」に飽き飽きしたので、仮説の前々段階である「暫定仮々説」に纏めてみた。(以下、ゴシック表示文は今後の証明待ち)

縄文弥生の頃から海の民が活躍していた。内海や沿岸だけではなく、朝鮮半島や中国大陸、そして南の島々まで往き来していた。

その中に、綿津見の神・宗像の神・住吉の神を奉斎する三系統の海神族がいた。綿津見の神を奉斎する一族は筑前国糟屋郡安曇郷を、宗像の神を奉斎する一族は筑前国宗像郡を、住吉の神を奉斎する一族は摂津国住吉郡(及び長門国豊浦郡筑前国那珂郡)をそれぞれ本拠地とした。

神功皇后朝鮮出兵の砌(四世紀後半?)、その海神族が大いに活躍した。綿津見神を奉斎する志賀島の海人名草なる安曇族の者が、水先案内人として功を上げたことから、中央官僚に抜擢され、安曇族の一部が畿内に移住して宿彌の姓を賜り、近江国の琵琶湖北岸付近(伊香郡・高島郡)を封地とした。

応神天皇の時代(四世紀末)、安曇連の祖・大浜宿彌が海人の統率者となった。

男大迹王は、安曇氏所縁の近江国高島郡三尾郷に生まれ、越前国で育ち、後に継体天皇として即位した(五〇七)。

「信濃の安曇氏」

・継体天皇の時代、磐井の乱が起こった(五二七)。

・磐井は物部鹿鹿火に討たれた(五二八)。

・磐井の子・葛子は、糟屋屯倉を献上して死罪を免れようとした。

・磐井の本拠地であった筑後国上妻・下妻郡(八女)は、朝廷軍によつて壊滅的な仕打ちを受けた。

・恐れをなした葛子は、糟屋の安曇族と共に海に逃れた。やがて、昔からヒスイ等の取引で馴染みのある糸魚川に達した。これより北方は蝦夷の勢力が強く居住地とするのは困難であり、西方は追つ手に攻められる危険があった。止む無く糸魚川から姫川を遡り、後に安曇郷と呼ばれる地に着いた。そこは不毛の地で住人も少なかった。更に南下すれば、松本や諏訪の肥沃な土地はあるのだが、そこは既に諏訪一族の支配する所であり、安曇族が入り込む余地はなかった。安曇族はその地に留まり綿津見の神を祀ると共に開拓を進め、入植後凡そ百年、大化の改新の頃(六四五)には、安曇郡として確たる地名を得るまでになった。

「畿内の安曇氏」

・一方、朝廷に仕えた安曇族は、専ら朝鮮半島との往来に功績があった。

・白村江の戦いでは、一族の安曇連比羅夫が征討將軍となり大敗したが、その責めを負うことなく連の姓を安堵された。

・いつの頃は不明だが、安曇氏は高橋氏と共に奉膳を承ることになった。奉膳は、宮中の恒例祭事に奉る饌や、天皇の日常的な食事の調理と配膳及び食料の調達を担当する内膳司の長官である。当然、御食国と呼ばれる志摩国・若狭国・淡路国との関係は深い。昔から、志摩国と若狭国は高橋氏、淡路国は安曇氏との繋がりが強く、同じ奉膳としての序列や御食国の支配を巡って何かと対立するようになった。

・神護景雲二年、それまで若狭の国司を務めていた高橋氏に替わって、安曇宿禰石成が補任された。このことから両者の対立は決定的となった。

以上の「暫定仮々説」を「仮々説」に昇格させるためには、安曇族の逃亡先が信濃の山奥で間違いないかどうかを証明しなくてはならない。全国に安曇氏所縁の地は少なくない・・・

安曇氏の足跡② 「ねずみ算」

では、安曇氏の足跡を地名から訪ねてみよう。

承平年間（しやうへいねん）に成立した『倭名類聚鈔』に、安曇郡一・安曇郷三、の四個所、似た音の地名として、渥美一・厚見一・飽海一、の三個所が見える。

その他、安曇氏に所縁があると思われる地名を角川地名大辞典から探すと下表の通りとなる。（信濃国安曇郡と筑前国糟屋郡安曇郷を除く）

もし平時ならば、安曇氏の活動拠点を各地に設けることは十分あり得ることで、現地との折合いさえ付けば少しの問題もない。しかしながら、磐井の乱（五二八）の後「糟屋の安曇族は磐井の子・葛子と共に海へ逃れた」とすると、話は全く違う。

信濃の山奥に移住した安曇族が、その後百年余りで「安曇郡」なる地名を獲得するためには。相当数の一族が入植したことになる。少し時代は下がるが、平安時代の日本の総人口は凡そ五百万人。郷の数は四千余りとされる。単純に計算すると一郷あたり千二百五十人。安曇郡は四郷からなっていたので、千二百五十×四＝五千人。少なく見積もって

	国名	郡名	郷名	その他地名	読み	奉斎神	立地	和名抄記載
①	出羽	飽海郡	飽海郷		あくみ		海近	○
②	越後	蒲原郡	安角郷		あずみ	住吉	内陸	
③	越中			安住	あずみ		海近	
④	能登	羽咋郡		安津見	あづみ	綿津見	海近	
⑤	美濃	厚見郡	厚見郷		あつみ		内陸	○
⑥	三河	渥美郡	渥美郷		あつみ		海近	○
⑦	近江	高島郡		安曇川	あどがわ	綿津見・宗像	内陸	
⑧	近江	伊香郡	安曇郷		あど	綿津見	内陸	○
⑨	大和	添上郡		安曇田	あずみだ		内陸	
⑩	摂津	西成郡		安曇江	あずみえ		海近	
⑪	河内	古市郡		厚見荘	あつみのしょう		内陸	
⑫	播磨	加東郡	阿住郷		あすみ		不明	
⑬	播磨	宍粟郡	安積郷		あづみ		内陸	
⑭	伯耆	会見郡	安曇郷		あづみ	宗像	海近	○

「表四」

三千人。地名に一族の名を冠するならば、少なくともその三割以上は安曇族が占めていたものと考えられる。つまり入植百年後の安曇族は八百〜千人程度か。

では、百年間およそ三四世代で九百人になるための初期値⇨入植者数は何人か。当時の平均寿命を* * 歳、出生率を* *、飢饉・災害・疫病による・細かい計算は省略して。入植時の人口は、少なくとも七十〜八十人。多ければ二百〜三百人程度と考えられる。何れにしても大所帯である。(ねずみ算を応用した)

とするならば、逃亡可能な地域は、朝廷の支配が手薄で、かつ蝦夷の勢力が弱いところ限定される。記紀の記述や古墳の分布状況から、六世紀中葉に大和朝廷の支配が及んでいた地域は、北陸道方面は継体天皇が育ったと伝えられる越前国坂井(東尋坊の近く)から能登半島を越えて越中国辺りまで、東海道方面は蝦夷地対策の前線基地とされる鹿島神宮辺りまでか。

- では、順に見てみよう。
- ①②は、当時蝦夷の勢力圏にあり、安曇氏の逃亡先として不適。
 - ③④は、朝廷の支配が及んでいたとされる地域。
 - ⑤は、現在の岐阜市付近にあつて、東山道のとば口。
 - ⑦⑧⑩は、畿内にあつて朝廷のお膝元。
 - ⑫⑬も、朝廷の支配が強い地域。
 - ⑭は、現在の米子付近にあつて、美保神社系海人族の勢力圏。
- 残るは⑥の渥美。渥美半島は伊勢の対岸に位置し、朝廷の勢力圏内にある。だが、なぜか気になる。念のために行ってみよう。

安曇氏の足跡③ 「渥美」

渥美半島の先端にある伊良湖岬は、鳥羽から伊勢湾を隔てて北東へ凡そ十四kmに位置する。伊勢湾に浮かぶ「神島」(三島由紀夫の小説「潮騒」で有名になった)からは四kmほどである。神島は、その昔「流人の島」と呼ばれていたと伝えられる。流人の島に近い半島ならば、朝廷の支配が手薄であるか嚴重であるか、そのどちらかではなかったか。

これまでに渥美半島は上り下り合わせて六回ほど訪れた。ハッキリ言つて、歴史的な観点からすれば、極めて印象の薄い地域である。豊橋方面から車で進むと、しばらく工場地帯が続き、やがてビニールハウスの大規模団地(全国でも有数の野菜生産地)となる。伊良湖岬は鳥羽や知多半島へフェリーが通う海上交通の要衝ではあるが、それ以外に見るべきものがない。近年売り出し中の「恋路が浜」なる観光スポットは、全国どこにでもありそうなアプローチで魅力がない。否。あつたのだ。国道二五九号線に沿つて立ち並ぶビニールハウスの合間を縫つて、広大な駐車場を持つ喫茶店が彼方此方にいつ通つても結構車が止まつていて、程々に繁昌している様子が窺える。「名古屋は喫茶店のメッカ」が渥美半島まで及んでいるようだ。ゴメン、また脱線してしまった。つまり訪問者にとつて、渥美半島の思い出⇨喫茶店、となる程に特徴の少ない地域で、もし安曇氏との縁がなければ忘れていたかもしれない、と言いたかつたのだ。(渥美出身の方にはゴメンなさい。でも渥美マリの隠れファンだったのでお許を)

さて、角川地名大辞典を始め多くの地誌は、渥美の地名の由来を安曇氏に結び付けている。六世紀から七世紀にかけての古墳も少なくない。

【渥美郡】古代、現在の三河国・愛知県郡名。三河国の最南端に位置し、渥美半島の全域と豊川河口部の沖積平野に立地する。(中略) 郡名は、天平年間(七一九～七四九)に当地の豪族だった渥美氏の先祖阿曇連(あずみのむらじ)に由来すると伝える。阿曇連は主に漁労に従事する海部と呼ばれる部族を統率する長で、^{おさ}記紀にも記載されている。渥美半島の先端地方に住みついた有力な海部^{あま}の長が阿曇と称し、豊川流域地方まで勢力を拡大するようになり、これが郡名として呼ばれるようになったと推定される。(以下略)。(角川地名大辞典)

渥美半島の地形を見ると。東西凡そ三五km。南北は広い所で一〇km、狭い所で五km、半島内最高所は標高二七八m、決して狭い地域ではない。ところが、前に述べた通り、平時ならば安曇氏が入植した可能性は十分にあり得るのだが、逃亡先となると疑問符が付く。地形図を眺め、ジオラマで立体化して入念に見たが、どこにも隠れ潜む所がない。更には、渥美地域に綿津見の神を祀った痕跡が見当たらない。僅かに琴平の神を祀った神社や、隣郡に弁天社はあるが、それは後世に勧請したものと思われる。つまり「糟屋の安曇族は磐井の子・葛子と共に海に逃れた」を前提とする限り、渥美は除外せざるを得ない。とすると、安曇氏の逃亡先は信濃の山奥以外に適地がなかったことになる。けれども、そう簡単に結論づけて良いはずはない。

そこで、本論の前提条件である「逃亡」について、もう一度確認してみよう。逃亡・流刑・移住・進出では、それぞれ全く異なった答えが導き出される……

安曇氏の足跡④ 「筑紫君葛子」

逃亡・流刑・移住・進出の違いはどこにあるか、或いはどのように異なった結果をもたらすか。

・安曇族が糟屋の地から「逃亡」した場合、前に述べた通り、一族の守護神奉祀はごく自然の成り行きである。

・「流刑」の場合、流刑先に一族の守護神を祀る可能性はある。六世紀ではなく七世紀の律ではあるが、流刑者は流徒と呼ばれる服役を課せられた後、現地の戸籍に編入され平民として口分田が与えられたとされる。

・「移住」の場合。その規模によっては守護神を祀る可能性はある。

・「進出」の場合。本拠地をそのままに出張的進出であったとするならば、守護神を祀るまでには至らなかったであろう。

・「流刑」や「進出」の場合、後に郡名を得るほどの一族移動は考えにくい。安曇族は海神族であることから、敢えて山奥の不毛の地に「移住」する理由は見当たらない。やはり「逃亡」が第一候補となる。

では、磐井の乱に話を戻そう。

前に、書紀の現代語訳を載せたが、ここで原文を確認する。

「筑紫君葛子恐坐父誅 献糟屋屯倉求贖死罪」

直訳すると

「筑紫君葛子、父(の罪)により誅せらむことを恐れ、糟屋の屯倉を献り、死罪を贖はむことを求む」となる。

更に読み下せば、

「筑紫君葛子は、父に連座して罪を責められることを恐れ、糟屋の屯倉を献上し、死罪を免れるよう求めた」

ここに二つの疑問がある。一つは「父により父に連座して」、もう一つは「〜求む」である。

「父に連座して」から、葛子は筑紫君一族存亡の危機にも拘わらず、父とは別行動を取っていたのだろうか、或いは年若く戦闘には参加していなかったのだろうか、との疑問が湧く。そして「〜求む」の答えがどこにも見えない。

そこで【筑後国風土記】を見てみよう。

筑後国の風土記に言う。上妻の県(八女)、県の南二里に筑紫君磐井の墓墳がある。高さは七丈、周囲は十丈である。墓域は南北は各々十六丈、東西は各々四十丈である。石人・石盾各々六十枚あり、交互に並んで列をつくって四方にめぐらされている。東北の隅に一つ別の区画がある。名づけて衙頭(衙頭は政を致す所なり)という。その中に一人の石人があって、縦容として地上に立っている。名づけて解部という。その前に一人の人がいて。裸で地に伏している。号けて偷人という。(生きていたときに猪を盗んだ為、罪の決定を受けようとしている)側に石猪が四頭いる。臧物と号る。(臧物とは盗んだ物のことである)その処にまた石馬が三疋。石の殿が三間、石の倉が二間ある。古老の言い伝えにいう。雄大迹天皇(継体天皇)の御世、筑紫君磐井は豪強く暴虐く皇風に従わず。生前にこの墓を造った。

俄に官軍が動員されこれを襲とうとした時。磐井はその勢力に勝てそうもないことを知って。単身豊前国の上膳の県に逃れて、南の山の嶮しい峰の曲で生命を終えた。そこで官軍は磐井を追い求めたが、その跡を見失った。兵士たちの怒りは止まず。石人の手を撃ち折り。石馬の頭を打ち墮とした。古老は言い伝えて、上妻の県に重病人が多いのは恐らくはそのせいではあるまいか、と言っている。(釈日本紀筑後国風土記・逸文より)

筑後国風土記によれば、磐井の乱の後、八女地方には五体満足な者はいなかったと言う。現在、福岡県八女市にある「岩戸山古墳」が磐井の墓とされ、風土記の伝承通り、手を切られた石人や頭を墮とされた石馬がその廻を取り囲んでいる。

つまり、葛子は父磐井の死を聞かされた時、一度は糟屋の屯倉を献上することで死罪を免れようとしたが、続報を聞いて余りの惨状に恐れ戦き「やはり逃げるしかない」と決心したのではないだろうか。書紀の記述が「〜求む」で終わっているのは。その答えを得ぬ間に逃亡したことを暗示してはいないだろうか。

では、葛子はなぜ父とは別の場所にいたのか、その時、安曇一族はどうしたか。

安曇氏の足跡⑤ 「筑紫海軍」

日本書紀に「磐井は肥前・肥後・豊前・豊後などをおさえて職務を果せぬようにし、外は海路を遮断して高麗・百濟・新羅・任那などの国が貢物を運ぶ船を欺き奪い、内は任那に遣わされた毛野臣の軍をさえぎり・・」とあることから、磐井は筑紫の内陸部で戦い、葛子は糟屋の地で安曇族と共に海の固めに当たっていたものと考えられる。つまり、安曇族は筑紫海軍、葛子はその司令官ではなかったか。

とするならば、いかに磐井の命令とは言え、実際に海賊行為を働いた安曇族にも当然処分は及ぶはずである。磐井が討たれた後、八女の地の惨状を聞くに及び、安曇一族は葛子と共に逃亡する決心をしたのではないだろうか。高麗・百濟・新羅・任那などの国から奪った貢物は、当座の路銀には余りある。奪った船と自前の船を合わせれば、一族郎党で糟屋の地を離れるには十分な船数である。

さて、ここで疑問が生じる。逃亡する際、全員同じ方角に向かうだろうか。もし葛子が討たれたとすれば、各自思い思いの方角に向かったかも知れない。けれども葛子が健在で、奪った貢物や宝物類を一括管理していたとすれば、家臣である安曇族は主君葛子を護り一致団結した可能性は十分にある。

前述の安曇氏所縁の地をもう一度訪ねてみよう。合計十六個所の内、現在その所在が明らかではない地が三個所ある。その内、所在が全く不明な⑫の播磨国加東郡阿住郷を除くと、残る二個所は。近江国伊香郡安曇郷と筑前国糟屋郡安曇郷である。どちらも大凡の見当は付くものの

場所を特定できない。

ここでは糟屋の安曇郷について見てみよう。安曇郷の候補地は二個所あって、一つは現在の福岡県福岡市東区、もう一つは隣の福岡県糟屋郡新宮町である。どちらも昔は糟屋郡に属していたと言われ、地形的にも山や川など際立った境目はなく、人為的に境界を決めた感がある。その中で「新宮」は気になる。平安期から記録に見える決して新しい地名ではない。新宮とは、新たな宮を勧請したり、熊野速玉神社の分社を祀つたりした時によく命名される。抑も「神々の銀座通り」とも呼ばれる博多周辺に、新たな神社を祀ること自体不可思議である。敢えてその理由を推理すれば、安曇族が逃亡した後、綿津見の社は衰廃し、新たな住人が別の神を祀った、と考えられる。現在新宮町には住吉系の神社が鎮座する。更に、二〇〇〇年七月に発掘された福岡県古賀市の田淵遺跡は、糟屋屯倉の遺構と推定される。その場所は新宮町の直ぐ東隣である。古い地名の所在不明にそこに住んでいた一族の衰亡、とは言えないだろうか。

さて、和名抄によれば、筑前国糟屋郡内には「安曇郷」の他に「志阿郷」が見える。写本によっては「志珂」とあることから「志阿」は「志珂」の誤記とも考えられる。とするならば「志珂」は「志賀」、即ち「志賀島」となる。

万葉集に「志賀の海人は軍布刈り塩焼き暇なみ櫛笥の小櫛取りも見なくに」、つまり「志賀の海女は海藻の刈り取りや製塩の仕事に忙しくて、化粧箱の櫛を手にとってみることはありません」とある。

同じ安曇族と言っても、安曇郷と志珂郷とは、漁労・製塩・廻船・交易等々、役割分担があったのだろうか。廻船や交易を担当していた

一族は逃亡し、磯や沿岸で営んでいた一族はそのまま残ったのだろうか。因みに、志賀海神社の宮司家は代々安曇姓で、現在の宮司は安曇磯和氏である。

一、磐井の乱の後、糟屋の屯倉が設けられ、

その地にいた安曇族はどこかへ消えた。

二、同時期、信濃の山奥に大勢の安曇族が入植した。

この二つが完全に結び付けば本論は一気に完結するのだが、まだまだ証拠不十分である。一も二も推論に過ぎない。推論を二階建てにすれば空論になりかねない。

そこで、今回は「地固め」ならぬ「八文字固め」をしよう・・・

安曇氏の足跡⑥ 「八づくし」

安曇氏の足跡を訪ねていると。何故か「八」の字によく巡り合う。

先ず、磐井の本拠地「八女縣」、安曇野の「八面大王」、そして志賀海神社の枕詞「八つの耳」。

志賀海神社はそればかりではない。老女八名の「八乙女」、祭事に使う藁は八束、矢の的が八寸、的の飾りが八つ、射手が八人、射手の助手が八人、祭りの世話役が八人、矢篠を切る日が正月八日、禊の後に供えるダイダイが八個、志賀の水先案内人は「浦君八軒」とも「中西八軒」とも呼ばれ、神功皇后が朝鮮に渡る時に船を出した事がその由来と伝えられる。先代宮司の阿曇磯興氏曰く「祭り事で数を合わせる時は、八か

八の倍数にしておけば、仕来りを間違えることはない」と。

では、筑紫国の八女縣の由来を【日本書紀】から引用する。

景行天皇十八年七月七日、天皇は八女縣に着いた。藤山を越え、南方の栗崎を望まれた。詔して「その山の峯は幾重にも重なって大変麗しい。きつと神は。その山におられるだろう」と言われた。時の水沼縣主猿大海は「女神がおられます。名を八女津媛と言います。常に山の中においでです」と申し上げた。八女國の名はこれから起こった。

さて、八面大王は「はちめんだいおう」と呼ばれるが、実は「やめのおおきみ」とも読める。ここに、

「筑紫の君」Ⅱ「八女大王」↓「八面大王」

との説が浮上する。八面大王については後述する。

もう一つ「文字合せ」を試してみよう。八女縣は「有明海」にほど近い。安曇野には「有明山」がある。有明という名前は結構馴染みがある。「有明産の海苔」「有明埠頭」「有明コロシウム」「ありあけのハーバー」等々。また、万葉集・源氏物語・近松門左衛門を始め多くの古典文学にも登場する。では地名はどうか、これが以外に多くないのである。全国の有明地名を拾うと、

有明浦…新潟県・大分県

有明海…福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県

有明浜…香川県

有明山…長野県・長崎県対馬

有明村・福岡県・熊本県

(北海道や東京等の明らかに新しい地名は除いた)

対馬の有明山は、綿津見神を祀る神社の背後にある。

海に面していない「有明」は、安曇野の「有明山」だけである。

(その後の調べにより、長野県千曲市にも有明山のあることが判った)

「お断り」

二〇〇八年十一月十日に始まった。朝の連ドラ風歴史紀行文「安曇野物語」は、ほぼ毎日一回、前節で二十七回目となった。ここまでの記述は、古事記・日本書紀・続日本紀・日本後紀・万葉集・風土記・和名類從抄・延喜式、群書類從・神道辞典・神社名鑑・式内社調査報告・国史大事典・古語大辞典・地名大辞典等、歴史文献として評価の定まった史料や辞典類に基づいて論証を進めてきた。

大凡の輪郭は見えてきたのだが、安曇氏の足跡を確認するまでには至らない。はつきり言って手詰まり状態である。このままでは単なる推理物に堕しかねない。やはり地方の文献を当たらなくてはならないようだ。既に数種の資料を入手し、思いがけないヒントを得ている。しかしながら、まだまだ十分ではない。かと言って安曇野や北九州地方の図書館へ通うこともできない。ネット上の情報は大いに参考になり、一部取り入れてはいるが、原本を確認するまでは引用を憚られる。そこで、現在各地の古書店を漁っている。揃うまでには少し時間がかかるかもしれない。拠って、今後は連載のペースをダウンせざるを得ない。

信府統記① 「八面大王」

安曇野に伝わる数ある民話の中から「八面大王」を紹介しよう。この民話には「鬼としての八面大王」と「英雄としての八面大王」の全く異なった二つの伝承がある。先ずその要旨を述べる。

【鬼としての八面大王】桓武天皇の時代、有明山には八面大王という鬼が住み、徒党を組んで村々を荒らしていた。それを、大和朝廷から派遣された坂上田村麻呂さかのうえのむらまろという将軍が、鬼たちの力に苦しみながらも、最後には山鳥の尾羽おぼねで作った矢で退治した。そして、鬼たちが生き返るのを恐れた田村麻呂は、鬼の死体をバラバラにして埋めたという・・・

【英雄としての八面大王】全国统一をめざす大和朝廷が蝦夷えみしを平定するにあたり、信濃の国を足がかりに沢山の貢物や無理難題を押し付け、住民を苦しめていた。そんな住民を見るにみかねて、安曇野の里に住んでいた魏石鬼八面大王きしき はちめんたいおうは立ち上がり、坂上田村麻呂さかのうえのむらまろの率いる軍と一歩もひけをとることなく戦いつづけたが、ついに山鳥の尾羽おぼねでつくった矢に当たり倒れてしまった。しかし、あまりにも強かったため、再び生きかえらぬように大王の遺体はバラバラにされ埋められた・・・

さて、この民話は江戸中期きょうほう(一七二四)の享保九年松本藩主水野忠恒の家臣鈴木重武と三井弘篤が命を受けて編述した【信府統記しんぶとうき】に収められている。

この書は藩内の歴史・地理・交通・産業・社寺・伝承などを百科事典風に纏めたもので、幕府が直接編纂した【新編武蔵風土記稿】や【新編相模国風土記稿】に先立つこと百年、松本藩の面目躍如たる極めて貴重な史料である。では【信府統記】巻十七「旧俗伝」から八面大王に関する条を全文掲載する。但し。原文は旧字・片仮名・旧仮名遣いの上、句読点が一切なく、そのままでは読みにくい。新字・平仮名・現代仮名遣いに改め、適宜句読点及び振り仮名を付した。

【信府統記】巻十七「旧俗伝」より

往昔、中房山と云う所に鬼賊ありて国人の仇となり、神社仏閣を破壊し民家を焼亡し、乱暴年久し。その名を魏石鬼或は義死鬼とも云い、又八面大王と称う。坂上田村麻呂これを征伐すと云々。〔田村利仁將軍は桓武天皇の御宇の人にて、延暦年中東夷を征せられしこと数度あり。この時の内なるべし。但し、信濃国に於て夷賊を平げられしこと慥なる説は見えずれども、当所旧俗の云い伝うるに任せて爰に載す。松川與の宮城と云う所に、彼の魏石鬼が窟として今にあり。四五間四方の磐石にて畳み天井も大石なり。その上は山にして草木生せり。このほか彼の辺りの山々に窟あり。また矢沢入の山中谷間に大石の角に切りたるあり。長さ二間厚さ一尺四五寸、或いは一尺ばかりの石を数多積み重ねたり。この谷は狭き地にして大勢の人夫働くべき所にあらず。彼の石は一個を二三百人にても持ち難き程なり。然れば人力の及ぶ所にあらず。鬼賊の事跡と云い伝う〕

延暦二十四年、田村將軍当国に発向し谷原の庄に下着。中界と云う所の城に入る。〔今の長尾與の中萱の事にや。穂高の縁起に曰く、人皇四十九代光仁天皇の御宇、義死鬼と云う東夷、神領を掠め宮社を焼亡し万民を悩亂せしむるに依りて、桓武天皇の勅命にて延暦年中田村利仁、東夷を追討すと云々〕

吉祥の地なればとて。川会〔昔、泉小次郎居住の地なり〕にて軍兵を揃え、翌大同元年、鬼賊退治〔この時、鹿島明神に祈誓ありし故、明神示現し、直ちに神託あり。山中の騎戦は叶うべからず。馬は悉く麓に置くべき由を命せらるゝに依り、馬の鞆を繋ぎ置ける所、今の駒沢なりと云う〕ありて矢沢と云う山の奥まで攻め登らる。鬼賊所々に防ぎ戦うと雖も終に叶わず。散々に逃げ落ちて爰かして皆討ち捕られける。今の松川與耳塚と云う所は、彼の夷賊等の耳を埋めたる塚ある故、村の名に称え来れり。また鬼類の中に野狐の変化したる物などもありけるが、悉く追い詰められて本体を現し、狐となれるを討ち取りし所とて、今狐島と云うは是なり。

八面大王の社として祠もありしと云う。一説に鬼王の首は庄内地に埋めて塚魔と号し、その上に権現を勧請あり。今の筑摩の八幡宮これなりとかや。鬼賊の剣は戸放権現に納めらる〔何れの所の社にや知れず〕。また一説に鬼賊の剣は三つに折れて、その柄は五龍山の滝坪に沈みて失せ〔五龍の滝は宮城に在り〕鋒は水沢の若沢寺にありしが焼失せり。央の折れた五寸ばかりは粟尾山

満願寺に今なおあり。鉄に非ず石の如くなる物にて鎬あり両刃形の如し。このほか鬼賊の事跡なりと云い伝うる所数多あり。

有明の里を仁科と号せしもこの時よりの名なり。鬼賊、仁の科となりたる義を以て、田村麿の名付けられしとかや。大町組借馬の内、鹿島村と云う所の山に大明神を祭られ、宮柱太敷き立てしとなり。社人鹿島大夫と云いしとかや、神領の山として天狗沢の岸より平川の辺り迄の中にて、木を伐り社鳥居等建立と云々。また放光寺観音堂若沢寺観音堂、何れも田村麿の建立なり。これ東夷征伐の祈願に依りてなり。

將軍逗留の間に当郡三年の貢を赦さる。これ人民、彼の賊の為に悩まされて困窮せる故なり。この厚恩に国人等將軍の武運長久の祈祷として神社仏閣を所々に建立して田村將軍の建立と札を書き納めける。今に至りて田村の建立にて開基せりと云い伝える寺社多き事はこの故なり。將軍京に上り給う時、跡に等々力玄蕃允と云う者を残し置かれける。凡そ高根伊勢守より十七代、その内都より下向の国司清原氏の人、二代六年治められ、これより後百二十年余り国司の交替知れず。(八面大王の条おわり)

信府統記② 「泉小太郎」

安曇野に伝わる民話から「泉小太郎」を紹介しよう。先ず、長野県公式ホームページ・キッズチャンネルから現代語版を転載する。

むかしむかし、松本、安曇の平は山々の沢から落ちる水をたたえた湖でした。そして、ここに犀龍という者が住んでいました。また、ここから東の高梨(今の須坂市高梨あたり)というところの池には、白竜王という者が住んでおり、やがて鉢伏山というところで、二人の間に男の子が生まれました。日光泉小太郎と名づけられた男の子は、放光寺山(今の松本市城山)あたりでりっぱに成長しました。泉小太郎が大きくなるにつれて、母の犀龍は自分のすがたをはずかしく思い、湖のそこにかくれてしまいました。小太郎は、こいしい母のゆくえをたずね回り。熊倉下田の奥の尾入沢(今の松本市島内平瀬と田沢のさかいのあたり)で、やっとめぐりあうことができたのです。

母の犀龍は、小太郎にじずかに語ってきかせました。「私は、本当は諏訪大明神の化身なんですよ。氏子を栄えさせようとすがたを変えているのです。おまえは、この湖をつきやぶって水を落とし、人のすめる平地をつくるのです。さあ、わたしのせなかに乗りなさい」言われて小太郎は、母犀龍の背中に乗りました。この地は今も犀乗沢とよばれています。二人は、山清路(今の東筑摩郡生坂村山清路)の巨岩をつきやぶり、さらに下流の水内の橋の下(今の上水内郡信州新町久米路橋あたり)の岩山をつきやぶり。千曲川の

川すじから越後（新潟県）の海まで乗りこんで行きました。こうして、安曇平の広大な土地ができたのです。そして、小太郎と母犀龍が通った犀乗沢から千曲川と落ち合うところまでを、犀川とよぶようになりました。その後、小太郎は有明の里（今の北安曇郡池田町十日市場）でくらし、子孫は大いに栄えたといひます。

次に【信府統記】卷十七「旧俗伝」より転載する。

「有明山の由来」

往古、郡の号も定まらず。況や郷村も開けざりしとき、適ある所の人家は山にのみ住せり。その頃、有明の里と云うは有明山と云える大山の麓なるが故なり（今の松川與なり）。山の名を戸放ヶ嶽とも云う。その子細は、むかし日神（天照大御神）が岩戸に籠もらせ給いしとき、天の下暗闇となりたるが故、手力雄命、岩戸を取つて投げ給いしかば、この所に落ち止まれり。それより天の下明らかに成りける故に、この山を有明山とも戸放ヶ嶽とも云うとなり。また鳥放ヶ嶽とも云う。子細はこの山に雉に似たる鳥ありて時を告ぐる故とかや。一説にこの山、月の頃はいつも陰なく照らすに依りて有明山と云うとも見えたり。

「泉小太郎伝説一」

人皇十二代景行天皇十二年迄は、この辺りの平地は皆山々の沢より落つる水湛えて湖なり。この所に犀龍と云うあり。また、これより東、高梨と云う所の池に白龍王と云える者ありしが、犀龍と交て一子を生す。八峯瀬山にて誕生。日光泉小太郎と

称す。放光寺山の辺りにて成長す。その後、母の犀龍我が姿を恥じて湖水に入り隠れぬ。小太郎母の行方を尋る所、熊倉下田の奥、尾入沢と云う所に至りて逢うことを得たり。犀龍語りて曰く、我は諏訪大明神（武南方富之命）の変身なり。氏子の繁栄なさしめんと欲して化身せり。汝を我に乗せるべし。この湖を突き破り水を落して平陸となし、人里とせんと教えらるゝに任せ、小太郎尾入沢にて犀龍に乗りしより、今に犀龍沢と称せり。三清地と云う所の巨巖を突き破り、また水内の橋下の岩山をも破り開きて、千曲川の川筋を越後国大海まで乗り込みしとなり。これによりて、その所を沼乗と号すとかや。然るにより、この川に於いて犀龍沢より下、千曲川へ落ち合う所迄を犀川と称す。

その後、犀龍は白龍王を尋ねて坂木の横吹と云う所の岩穴に入る。小太郎は有明の里（今の池田與十日市場の川合と云う所なり）に帰り、居住して子孫繁昌す。年を経て白龍王、犀龍と共に川会に来たりて対面あり。白龍王曰く、我は日輪の精霊、即ち大日如来の化身なりとて、犀龍と同じく仏崎（今の松川與一本木村西の山なり）と云う所の岩穴に入りて隠れ給う。

これより年月久しくして後、小太郎曰く、我は八峯瀬権現の再誕なり。この里の繁栄を守護すべしとて、また仏崎の岩穴に入りて隠れ給う。後に彼の所に川会大明神の社を建てしは、この霊神を祭れりと云う。湖水落ちて平陸となりしより田地を開き人民居住して次第に郷村出来にけり。（湖水湛えしとき山より山へ船にて往来せし故、今に山家與船着と云う所に船を繋ぎし石などもあり）

「泉小太郎伝説二」

一説に、当国信濃十二郡の中にも筑摩安曇の両郡は漫々たる海原なり。中山の崎より碧海の水さし入りしに依りて塩崎と称し、その潮伊那郡へ流る。塩尻の号もこゝに始まれり。深瀬と云うは、その中に川筋の深き瀬ありし所とかや。山家の号は人皆山上に住せる故、久しき在名なり、この所に船を寄せけるを今に船着と云い伝う。里人等、皆釣を業として世を営めり。諸神達憐れみ給う中にも鉢伏山（今は八峯瀬山と云う）の権現、人倫と現れ傍らの丸山に居住し給う。その所に不思議の泉湧出す。味も酒の如くにて人の餓を助け、疲れを養えり。誠に不老不死の泉とも云うべし。国人悦ぶ事限りなし。彼の権現の御子を泉小次郎と号す。生まれながら常の人に非ず。岩壁をかけり水中に入れども、自在無碍なり。この地を平陸となさんが為に海中に入りて点検するに、一つの山を攀かば、必ず水落ち下りて丘となるべし。然れども人力の及ぶ所ならねば、天地神祇に祈られける程に大雨降り満水して彼の山の上を越ゆる程に水溢れたり。その時、犀一匹出現せり。小次郎これに乗り彼の山を乗り破りたり。異域の古へ巨霊と云いし神の山を攀きし例しもあれば、さもあらんにや。彼の犀を神に祝い、今の出川町の辺りにある水引大明神これなり。それより湛えたる海水越後へ落ちて平陸となれり。（泉小太郎の条おわり）

信府統記③ 「穗高嶽」「穗高大明神」

ものは序で【信府統記】から穗高嶽と穗高大明神の条を転載する。

【信府統記】卷六「安曇郡上野與長尾與」より

穗高嶽は梓川出口より大野川までの中程、西の方にある大山なり。この嶽は往古より穗高大明神の山と云い伝えてこの名あり。険山にて登ること能わず。麓に大明神の御手洗と手洗池と云うあり。広さ三四町四面程の池にて岩魚と云う魚多くあり。柚人筏に乗りてこれを釣る。この外梓川西の方に山嶽多しと雖も、深山にて往来なければ山名も知れず。

【信府統記】卷十九「松本領諸社記」より

穗高大明神 保高村

当社三所本殿は、天津彦火々瓊々杵尊なり。また皇御孫命とも号し奉る。左右の殿は、天兒屋根命・天太玉命・天細女命・石凝姥命・天玉屋命なり。

古伝に経津主命・武甕槌命の両神の螢火光邪神・蠅声邪神を東へ追ひ給ひしとき、皇御孫命、穗高嶽に鎮座ましませしと云えり。この嶽清浄にしてその形幣帛の如く。麓に鏡山宮川御手洗河水ある所を神合地と云う。人皇四十九代光仁天皇の御宇に、義死鬼と云う東夷この辺りを暴乱し、神領を掠め宮社を焼き亡ぼし、かば、桓武天皇の御宇に至りて、延暦年中田村利仁尊を蒙り、東夷を退治せられしなり。五十五代文徳天皇の御宇、

信濃中將と云いし人に勅して当社を造営せしめられ、これより後、七年に一度づつ本殿を新たに建てるの例となれり。この中將は仁明天皇三代の孫なり。俗に物苦太郎と称す。今当社の内に若宮大明神の宮あり。この中將を祝いしとなり。(信濃中將はその頃当国の国司にや)

信府統記④ 「安曇湖」

その昔、安曇族が入植する以前の安曇平には大きな湖が広がっていた、と種々の伝承に見える。ところが遺跡の分布や地質調査の結果から、そうした湖が存在した事実は確認できない、とされている。ならば「泉小太郎伝説」は全くの作り話なのか、湖沼や舟運に因んだ地名も後世のでっち上げなのか。

安曇野はフォッサマグナの西端に位置する糸魚川静岡構造線上にあり地滑りの多発地帯である。安曇野の北方約四十五kmにある稗田山(梅池高原付近)の崩落は。我が国に於ける二十世紀最大の山岳崩壊と云われ、富山県の鳶山崩れ、静岡県の大谷崩れと共に日本三大崩れの一つとされる。さて、梓川・高瀬川・穂高川・万水川など安曇野を流れる川は、明科付近(穂高神社の東約3km)で犀川一筋となり、善光寺平(長野市一帯)で千曲川に合っし、やがて信濃川となって越後国を経て日本海に注ぐ。現在、犀川に沿って国道十九号が通っているが、明科から善光寺平までは急峻な溪谷が続く。中でも山清路(長野県東筑摩郡生坂村)付近は特に狭い。

一度でも車で通れば直ぐに気付く。大型トラックの隊列に挿まれた時など強い閉塞感に襲われる。その明科から山清路まで凡そ二十一kmの区間の高低差は僅か三十七mである。

地震による山岳崩壊によって巨大な湖ができる経緯は、先の中越地震や中国西部大地震の際、世界中の注目を集めた。では、狭い溪谷、極めて緩やかな川の流れ、そして山岳崩壊多発地帯である犀川流域で何か事があつたらどうなるか。

その疑問に答えてくれる史料として【仁科濫觴記】を紹介する。この書は、仁科氏の来歴を記したものではあるが、作者作年代とも不明とされ、その真偽の程も定かではない。ところが安曇野を開拓した時代の治水に関して是最も合理的に述べられ、決して等閑にはできない。そこで【安曇の古代・仁科濫觴記考】仁科宗一郎著(一九七二)から冒頭の一節を掲載する。この書も【信府統記】と同じく、旧字・片仮名・旧仮名遣・句読点無し of 文章である。多少読み易く改めた。

【仁科濫觴記】から

爰に仁科の開礎を尋ねるに、人皇十代崇神天皇の末の太子に仁品王と申し奉る有り。十一代垂仁天皇には弟王子なり。長の臣には保高見熱躬、武内山雄を両翼となし、数々の臣下を引き連れ降臨しまして土地の形容を窺い賜うに、山川数多流れ雲霧深く蔽いて村里も定かならず。大雨降り続く時、水勢は倍々し湖の如く成れり。蒼生等、この難に及ぶ事甚だし。親王(臣下を始めとして仁品親王と称え奉るなり)これを歎かせ賜い、諸臣と考語ましまして

九頭子と云う臣に河伯司を命じ、山を伐り岩を伐り除いて水路の
広開を命じ賜うに、即ち九頭子蒼生の健男を集め、水に馴れたる
者数多有る中に日光という者水中の働き尋常の人に勝れたりと
云えり。この日光を白水郎の長となし河底の岩を除き、砂岩を排い
流して水路を広開せん事を成さしめ賜う。河伯司と白水郎日光、
山征の矩規を談話し健男を集め、その矩規に掟め教えし。ここを
号て征矩規峽と云えり。また山征を成せし所を山征場と云えり。
また山征地と号す。(中略)

それ山征とは山を伐る故に征討の意にて山征と号し賜うとかや。
春三月下旬に始め秋の末迄、河底の石を穿ち取り土砂を浚い流し
川幅狭き所は山野を伐りて水路を広開せり。これ日光白水郎が
武勇に出にしとなり。斯くの如くする事数年なり。この間にも
満水数度ありて、作毛の水難に及ぶ事少なからず。よつて遠音太川
(高瀬川の古名)の両辺の高峽に小舎を建て上総の道臣、丹生子と
云える両臣に命じ、遠見して蒼生の難を救わしめ賜う。(上総の
舎の地は川西にて神戸と名付く。丹生子の舎の地は川東にて難期と名付く)
この難期に山征場より沢道の間道あり。この道は日光が母往来し
て山征場の事を折々奏上する故に。この沢に婦人沢と名付け賜う
なり。また難期を丹生子之邑とも云えり。(以下略)

信府統記⑤ 「シナリオ」

仁科氏の出自は、平貞盛の後裔で仁科盛遠の時に仁科を姓としたのが
始まりとも、奈良時代に古代豪族阿倍氏が信濃国安曇郡に定住し、その
支族が伊勢神宮の御領「仁科御厨」を本拠としたことを起源とするとも
云われるが、未だ定説はない。前節の【仁科濫觴記】に「仁科の開礎を
尋ねるに、人皇十代崇神天皇の末の太子に仁品王と申し奉る有り云々」
とあるが、俄には信じがたい。

六国史等の記述から総合的に判断すれば、仁科氏が安曇の地にやつて
きたのは、七世紀の中頃。阿部比羅夫が越の蝦夷征討の頃か、或いは
八世紀の末、坂上田村麿が陸奥の蝦夷征討の頃、つまり、安曇氏の入植
から早くて百年後、遅ければ二百五十年後と考えられる。

その八世紀の末、有明の里で八面大王が坂上田村麿に討たれ、同時に
安曇氏は没落の一途を辿り、やがて仁科氏が安曇野地方の支配者となつて
行くのだが、同濫觴記に「長の臣には保高見熱躬云々」とあるのは時代
的に整合せず。仁科氏が安曇氏の伝承を奪い取ったことを窺わせる。

更に、同濫觴記には幾つか気になる固有名詞が登場する。

保高見⇨穂高見 熱躬⇨安曇 白水郎⇨海人⇨泉小太郎
九頭子⇨河伯⇨川の宰・葛子⇨八面大王?

そこで「六世紀の中葉、磐井の乱の後、糟屋の安曇族は葛子と共に安
曇野の地に逃亡してきた」と仮定し、安曇一族が入植した当時の様子を
再現してみよう。

糟屋にて

葛子 父が討たれ八女の民も酷い仕打ちを受けた。もはやこのまま

糟屋の地に留まることはできまい。皆と共に良き地を求めて

船出しようではないか。

海人1 大君様の御心に従います。

海人2 私も従います。けれども何処を目指せば良いのでしょうか。

海人3 皆同じ方に向かつては危ういのではないのでしょうか。

海人1 何を言うか。大君様をお護りすることは我々の務めではないか。

離れることは許されぬ。

海人2 そうだ。筑紫こそ我が国の元である。今の朝廷はこの地から

出て行った裔ではないか。

海人3 では、確かな海路を探そう。

海人1 長門の国から瀬戸の海へ入ることはできぬ。朝廷の兵士等が

待ちかまえているに違いない。

海人2 ならば、壱岐を目指して北に上り、潮の流れに乗って越の国へ

向かつてはどうだろうか。

海人1 越の蝦夷とは年久しく深い繋がりがある。

海人3 否、取引と居住とでは話が違う。受け入れを拒まれるかも

知れぬ。

葛子 その時は、例の貢の物を遣わしてはどうだろうか。

海人1 大君様のお許しがあれば、そういたしましたしょう。

葛子 止むを得まい。

海人1 心強いお言葉です。必ずや彼等の許しを得られましょう。

海原にて

葛子 冬の海は厳しいのう。

海人3 間もなく馴染みの湊に着きます。陸に上がれば暖かき所も

ございます。

葛子 それは有り難い。ところで馴染みの湊はそこかしこにあるのか。

海人3 ございます。既に輩が移り住んだ地もあります。

葛子 いつ頃移り住んだのか。

海人3 往昔からです。我等の営みは諸々の国に製れる物を運ぶことに

あります。扱いの多なる地には輩を送り込んでまいりました。

葛子 それを聞いて安堵した。例の物を使って湊の衆に心付けよ。

海人3 内々の件、確かに承りました。輩等も悦びましょう。

能登を過ぎて

海人1 立山が見えてまいりました。目指す地はもう間もなくです。

葛子 お前は山に詳しいのう。

海人1 お言葉有り難く存じます。私の務めは船を操るばかりではあり

ませぬ。行く先を見定めることも重き役です。そのために日頃

から心がけております。

葛子 我には何処の山も同じように見えるのだが。

海人1 心して見れば山の形はみな違います。高さ、裾の拡がり、頂き

の形など様々です。

葛子 そう云えば、往昔海人の名草が神功皇后の水先を案内して功を

上げたと言う話を聞いたことがあるな。

海人1 はい、その功があつて一族の者が朝廷に仕えることになりました。

葛子 その者等の裔はどうしているか。

海人1 近頃、あまり噂を聞きませぬ。

糸魚川にて

海人2 糸魚川の里に着きました。如何いたしましょうか。

葛子 ここはお前等の馴染みの所か。

海人2 はい、仰せの通りでございます。この地との交わりは遠い往昔

から続いていると聞いております。

葛子 別きたる物でもあるのか。

海人2 はい、ございます。主にヒスイを扱ってまいりました。

葛子 彼のヒスイか。ところで、蝦夷等は我々を迎えてくれるだろうか。

争いは起こらぬだろうか。

海人1 私が確かめにまいります。

葛子 念のためにこれを持て。

海人1 このような尊い品を宜しいのでしょうか。

葛子 よい。

海人1 これを遣わせば穏やかに話を進めることができますしう。

蝦夷の長の館にて

海人1 お久しゅうございます。

蝦夷長 おう、そちも達者で何よりだな。

海人1 先ずは、土産の品をお受け戴きたく存じます。

蝦夷 これはまた珍しい物だな。まあ、出所は聞くまい。

海人1 お喜び頂き有り難く存じます。

蝦夷長 所で此度はまた大勢でやつて来たそうだな。見張りの者から

知らせがあつたぞ。

海人1 はい、訳あつて一族の者ばかりではなく、大君様もお連れしま

した。

蝦夷長 それは大儀であつたな。病める者や傷める者はいないか。

海人1 お心遣い有り難く存じます。軽い傷を負った者が数人おりますが、

大君様をお護りするするためにみな心を一つに力を合わせて

まいりました。病んではいられませぬ。

蝦夷長 それにしても、よくこの冬の荒海を渡ってきたな。

海人1 一族の者が住める地を探し求めています。未だ良き地は見つか

りませぬ。これより北の方は如何でしょうか。

蝦夷長 うゝん、難しいな。これより北は荒々しき者が多い。我々も

心している。と云つて、この里は既に手狭になった。やはり姫川

を上るが良いだろう。

海人1 姫川の上は我々の見知らぬ地です。如何なる所でしょうか。

蝦夷長 今は荒野だが、切り墾けば住める。荒野故に人も少ない。争いも

少なからう。

海人1 その地まで恙なく辿り着けますでしょうか。

蝦夷長 この時節は難しい。雪が深く降り積もり、行く手を阻むであろう。

暫くこの地に留まり、雪解けを待つ外はあるまい。

海人1 それでは、この地の人達わすらに煩いをお掛けすることになりましょう。

蝦夷長 我々は朝敵、そち等は追われる身、相身互いではないか。

海人1 有り難き幸せに存じます。

再び蝦夷の長の館にて

海人1 昨日は暖かきお言葉賜り心より御礼申し上げます。間もなく

大君様がまいります。

蝦夷長 このようなむさ苦しき所では面おもはゆいな。

海人1 実は折り入ってお願い申し上げます。暫くの間、

この地に留まるにあたり、私共にできることはないか皆で図りました。そして、船にある鉄の材を用い、親方様のお役に立つ物を製つくることにいたしました。どうぞお受け頂きたく存じます。

蝦夷長 それは願ってもないことだが、少し休んでからにしてはどうか。

皆も疲れ切っているだろう。

海人1 大君様がまいります。

葛子 この度は、親方様にはたいへんお世話になり有り難く存じます。

何卒宜しくお願い申し上げます。

蝦夷長 これはまた直々の口上を賜り恐れ入ります。既に過ぎたる品を賜り我等も喜んでおります。どうぞ雪解けまで身体をお休め下され。

葛子 有り難き幸せに存じます。鉄の品について何なりとお申し付け

くだされ。

海人1 つきましては、鉄を鍛きたえる為に炭が要ります。どうか山の木を

伐きる事をお許し下されたたくお願い申し上げます。

蝦夷長 判った、詳しい者を呼ぼう。

炭にする木を伐り終えて

海人3 すっかり世話になった。木も十分に伐り出せた。疾とくに炭作り

をしよう。ところで、姫川かみの上について伺いたい。如何なる所

なのだ。

蝦夷1 ここから十五里ほど川を遡さかのぼると湖がある。そこまではかなり険けわしい。更に進むと下りになり二つの湖がある。湖を越えて暫くすると原はらが広がる。こことは違って明るい所ではあるが水の患うれいがある。雪解けの頃や大雨降るときは、なかなか水が引かず湖のようになる。人は山沿いに住むが僅かである。水を引かせ

て田や畑を拓くか、川に住む魚を捕って糧かてにするか・・・

海人3 そこに住む魚とは如何なる物か。

蝦夷1 鮭いわなや岩魚がよく捕れる。我々には姫川の魚で事足りる故、希に

行くばかりではあるが、魚の量は計り知れぬ。秋の河原は卵を産み終えた鮭で埋め尽くされると云う。海人ならば直ぐに応じられよう。それから、鮭が捕れる時節は限られる。貯えるためには多くの塩が要る。山の中で塩は取れぬ。

海人3 海人と云っても、我々は船を操り種々の品を運ぶことが主な

務めだった。魚捕りが得手とは云えぬ。塩焼きは女等の役だった。よく考えよう。

蝦夷1 さしあたり船が要るだろう。運べるものならば運ぶ方がよい。

海人3 やはり、大君様が向かう前に下調をした方がよさそうだな。

信府統記⑥ 「シナリオ2」

葛子、海人の幹部を集めて

葛子 我は蝦夷の長の勧めに従って暫くこの地に留まり、雪解けを待つて姫川の上へ進むことにする。ついでには皆の思いを聞きたい。臆することなく申せ。

海人1 私は大君様の御心に従います。

海人2 私も従います。

海人3 私も従います。

海人4 我々は、生まれた時から海と共に生きてまいりました。海は営みの場であり、船は住処でもあります。海を棄てて陸へ上がることは気がかりでなりません。いったい何が出来ましようか。私と同じ思いの者は少なくありません。

海人1 その思いは我も同じだ。だが、我々に残された道は限られる。ここより西の方は朝廷の力が及ぶ地であり、いつ追手が来るか判らぬ。北の方は我々にとつて馴染みの薄い蝦夷が蔓延る地である。強いて進めば争いは避けられぬ。

海人4 大君様をお護りするためならば、何時でも戦います。糟屋の荒雄と呼ばれた我々が、そう容易く引き下がることはありません。

海人1 お前の力は誰もが認めるところではある。だが良く考えてみよう。我々が海に出て、船を操り種々の品を運び、時には兵士として戦つて来れたのも、陸を護る輩や家族等が居たればこそ為し得たのだ。船や兵具はだれが作ったか。糧や衣は誰が賄つてきたか。それも拠り所となる地があったからだ。今の我々には傷んだ船と僅かな兵具があるのみだ。

海人4 . . .

海人1 今は姫川の上を目指すが、再び海に帰る日も来よう。それまで身を隠す他はあるまい。

葛子 心得たであろうか。

海人4 恐れ入ります。

葛子 皆の思いが一つになって何よりだ。よし、新たな門出に望みを託し盃を上げよう。肴を支度せよ。

海人2 今は鰯が捕れます。それに糟屋で馴染みだった海藻もあります。酒は鰯と換えました。

葛子 お前は事が早いよう。

海人2 皆、大君様のお言葉を待ち望んでおりました、

葛子 今日雪だ。皆で集える所がない。酒と肴をそれぞれの洞に分ち与えよ。その前に知らせがある。これから先の役を海人長（海人1）と図つて決めた。

海人1 隊長は、我が承った。

糧や種々の料の長は海人2とし、副隊長と呼ぶ。

鉄の品の長は海人3とし、鍛冶長と呼ぶ。

下調べの長は海人4とし、調査長と呼ぶ。

船作りの長は海人5とし、大工長と呼ぶ。

塩焼の長は海女1とし、塩焼長と呼ぶ。

器作りの長は海女2とし、土師長と呼ぶ。

衣服の長は海女3とし、衣服長と呼ぶ。

それぞれの長は手の者を決め、皆に役を与えよ。

葛子 与えられた務めに励むよう申し渡す。

今宵は家族共々火床を囲み、酒を戴き肴を食せ。

これからの事についてよく知らしめよ。

葛子、隊長・副隊長・鍛冶長・調査長・大工長を集める

隊長 姫川の上について調べるよう調査長に申し渡す。先ず、蝦夷の者

から便りを聞け。

調査長 畏まりました。

隊長 蝦夷の長へ遣わす鉄の品についてだが、どのような物が作れるか。

鍛冶長 船にある鉄から、鋤・鋏・鎌・鉞は作れますが、かつて糸島の

鍛冶が大君様に贈られたような鋭い刀は難しいと存じます。

葛子 そう云えば、糸島産の刀は今いずこに。

隊長 その刀は大君様の守刀です。そちらの筥に宝の品と共にござい

ます。

葛子 どうして鉄の代を見ただけで判るのか。

鍛冶長 糸島の刀は砂の鉄から造られたものと聞いております。しかし

ながら、この地で良い砂の鉄は得られませぬ。仮に得られたと

しても砂の鉄を溶かす高い熱を得ることは難しく、そのための具

も知恵も足りませぬ。

隊長 ならば、鋤・鋏・鎌・鉞を製ろう。ここは和田の峠に近い。

黒曜石は手に入り易い所だ。蝦夷の里に鍬や石の刀は事足りて

いるであろう。

鍛冶長 確かに承りました。

隊長 とところで、姫川の上は水捌けが悪く、雪解けの頃や大雨降る時、

湖のようになると聞いた。船があると良いとも聞いた。しかるに、

この地から船を運べるだろうか。

大工長 我々の船は外海に行く大きな船ばかりだ。道幅二尺から四尺

ほどの険しい山路を運ぶことは極めて難しい。

副隊長 我々の輩が住む対馬では、船越と呼ばれる峠を越えて入海へ

船を運び込むと聞くが。

大工長 対馬の船越は存じておる。十丈ほどの極めて低い峠だ。この地

の峠は、見た所その二十倍はある。とても叶うまい。けれども、

船を解いて小さく造り替え、組み上げずに材のままならば、

櫓で運び上げることはできる。竹も事足りる。上の地の木を

伐って船を作ることはできるが、直ぐの間に合わない。それが

最も良いと思われる。唯一つ気がかりなことがある。水が引いて原になった時、船は丘に置かれることになる。長く捨て置かれれば、船は傷み必ずや水漏れする。

副隊長 姫川の上の直ぐ近くに麻績おみと云う里があり、麻をよく産する所と聞いた。船の水漏れには麻がよいそうだが確かか。

大工長 確かだ。ならば患いはない。

副隊長 麻は衣にも欠かせぬ。併せて調べよ。

隊長 姫川の上をいつ調べるかは、蝦夷の長と図つて決める。その備えを怠らぬようにせよ。

調査長 心得ました。

葛子・葛子の妻、隊長・塩焼長・土師長・衣服長を集める

隊長 今の時季、塩焼きはできるか。

塩焼長 できますが、寒さが厳しく日差しも弱く多くは望めませぬ。

隊長 できる限り試みよ。要る物は副の長に申し出よ。

塩焼長 畏まりました。

隊長 この地の土で器うつわは作れるか。

土師長 乾ほすために日数ひかずがかかり、多くは難しいと存じます。

隊長 差し当たり間に合えばよい。要る物は副の長に申し出よ。

土師長 畏まりました。

隊長 ここは糟屋の地より寒い。我々の持てる品と蝦夷が持てる獣の皮とを換える。皆に漏れなく与えよ。被り物と履物の中に

敷く皮かわも調えよ。

衣服長 畏まりました。

奥方 海女の衆にはこれまでにない骨折りを掛けるが、どうか堪え忍んで欲しい。そして、くれぐれも子供等こどもらを健やかに育てるよう願っている。

葛子 我も同じ思いだ。

衣服長 大君様そして奥方様から暖かきお言葉を賜り、海女等みな喜びに堪えませぬ。

信府統記⑦ 「シナリオ3」

如月の半ば（新暦の三月初旬）を過ぎた。

隊長の洞にて

隊長 雪の降る日も少なくなつた。海も凪いできた。蝦夷の長から山行きの許しがでた。未だ山の雪は深いが、蝦夷の者と共に進めば姫川の上へ行けるであろう。上の原は雪が少ないそうだ。調査の長は、録を取る者・土地の形を見る者・魚に詳しい者を選び、明日出立せよ。

調査長 畏まりました。

調査隊出立

隊長 今日の出立しゅつだつに相応ふさわしい日和ひよりだ。山の頂きまで見える。良いか、

雪の山に慣れぬ者ばかりだ。蝦夷えみしの案内あなが頼りだ。心して行け。

調査長 畏まりました。必ずや良い知らせを得てまいります。

・
・
・

蝦夷3 我が前に行く。足跡を頼りに歩め。だが、一足目は無事でも

二足目で崩れることがある。念を押してゆつくり進め。崖から
落つるとも助けられぬ。

調査長 相判った。

蝦夷3 これから急な上りになる。

調査2 何のこれしき。

蝦夷3 侮るな。更にきつくなる。

調査3 おう、海が見える。

調査4 海面がキラキラ輝いている。春は近い。

調査長 徒口あだぐちは慎め。

蝦夷3 ここで少し休む。

調査長 荷を下ろし肩を休めよ。

一日目の夕刻

蝦夷3 今日はこちらに泊まる。この近くに手頃な洞があるはずだ。雪を

除のけて探そう。

三日目の昼前

調査長 今日で三日目だが、湖までは如何ほどか。

蝦夷3 雪が降らねば夕暮には着く。大夫疲れたようだな。

調査長 ・
・
・

四日目の朝

蝦夷3 さあ、出立するぞ。これからは下りだ。

調査長 有り難い。

四日目の昼下り

蝦夷3 これまでの二つの湖は凍っていたが。この先の湖は凍らない。

調査長 近くに温かい湧き水があるのか。

蝦夷3 そうだ。

四日目の夕暮れ

蝦夷3 ここが原の外はずれだ。今日はここに雪の洞ほらを掘って泊まる。どう

も雲行きが怪しい。吹雪くかもしれないなぬ。

五日目の朝

蝦夷3 今日は吹雪だ。止むまでここに留まる。目指す地はもう直ぐそこだ。

調査長 五日目か。やはり毎日良い日和ひよりとは行かぬな。

蝦夷3 この時節に四日も晴れたのは希なことだ。

では、原について知る事を申す。ここから南は緩い下りが続く。五里ほど行くと原の水を集める大きな川がある。原は更に南へ続くが、深入りしてはならぬ。諏訪の一族の領る所となる。我が勧める地は、ここから四里ほど下った所だ。山の裾に洞が幾つもあり、差し当たりの住処すまかとなろう。川で魚を捕ることも、畑を開くこともできる地だ。夏から秋にかけては魚を求めて彼方此方から人がやって来るが、今の頃住む者は僅かだ。

六日目の昼前

蝦夷3 ようやく吹雪が止んだ。目指す地へ向かう。夕暮れには着けるであろう。

調査長 少しずつ雪が浅くなる。ここかしこに川面が見える。

調査2 有り難い。陽が差してきた。

調査3 右手に見える山はどこか見覚えがある。

調査長 姿の良い山だな。

蝦夷3 その山の裾を目指している。

調査2 雪の原を海に見立てれば、対馬の有明山に似ている。

蝦夷3 雪で洞は判りにくいだが、春になれば直ぐに見つかる。今日は馴染みの洞へ向かう。

六日目の夕暮れ

蝦夷3 ここだ。秋の頃まで誰か住んでいたようだ。薪まきの貯えもある。

調査長 思いの外、中は広いな。この洞一つで二十人は住めそうだ。

蝦夷3 洞ほちはまだまだある。糟屋の衆が皆入れるだけの数はある。

調査長 何故に洞が数多あまたあるのか。

蝦夷3 往昔は多くの人が住んでいたと云う。いつの頃か、川下の地の山が崩くえて流れが滞り、この地の川が事ある毎に溢れるようになった。やがて人々は余所よそへ行った。

調査3 その山崩くえたる地を調べてみたい。

蝦夷3 ここから五里ほど険しい山路やまじを行くことになる。その地は麻績おみの里の方にある。麻績へ向かう時に併せて調べてはどうか。

調査隊員2の記録（記憶）によれば、以下の通りである。

七日目八日目と原一帯を廻った後、原を流れる川の全てが集まる大川（後に犀川と名付く）の口へ向かった。その辺りは水が温ぬるく寒の頃でも氷らないと云う。鮭の姿は見えなかったが、川辺のそこかしこに鱮ひれの片割かたわれがあった。

九日目。麻績の里では労することなく話が纏もまった。やはり宝の品の力は計り知れない。思わぬ持成もてなしを受けた。

十日目。下の山崩えたる地は極めて険しい所であった。一筋縄では片付きそうにない。恐らく崩えたる岩を割り砕くことになるであろう。確か、先の大君様の墓を造り営む時、阿蘇の山から石を切り出す務めに従った輩ともがらが居たはずだ。

帰りの道は下りが多く楽であった。・否。そうではない。急な下りは上り以上に足に応えた。皆の足腰は潰つぶえ果てた。にも拘わらず、蝦夷の者は足取り軽く涼しげな顔をしていた。海人の山行きは甘くなかった。調べに十日と五日かかった。

信府統記⑧ 「村上・与板」

ここでまた「御小休」おこやすみを。

二〇〇二年七月八〜十日。新潟旅行へ出かけた。与板よいたの鍛冶師宅訪問が主な目的だった。

八日朝五時、車で出発した。関越自動車道〜北陸自動車道〜日本海東北自動車道〜国道一一三号〜国道三四五号を経て、昼頃笹川流れに到着した。高二の夏の東北旅行以来三十九年振りだった。当時は夕暮れ時、今回は昼時、大分印象が違った。抑も、重いバッグを携えてトボトボ向かうのと、車で横付けするのでは違って当然であろう。手軽に行けるようになって、その分感激も薄くなったようだ。けれども、前回は磯歩きだけだったが、今回は遊覧船に乗って朝日連峰が日本海に落ち込む姿を

じっくり眺めることができた。村上から鶴岡までの海岸線に平野部はほんの僅かである。往昔、義経一行が勧進帳を広げて大見得を切った鼠ヶ関ねずがせきまで二十km余りだ。

(安宅関あたかのかせきの場面が有名だが、鼠ヶ関でも同様であったと【義経記ぎけいき】に伝える)

さて、笹川流れの民宿兼レストハウスで海鮮定食を戴いた。窓から海辺を眺めると、漁師が魚介類の水揚げ中だった。愛想の良いウエイトレスに尋ねたら、岩蠣いわがきの季節であると教えてくれた。店内の張り紙に「岩蠣五〇〇円」とあったので早速注文した。出された岩蠣は巨大でグロテスク。食べるか否か、ほんの少しの間躊躇したら、家人が「私大好物」と云ってペロリと二皿平らげてしまった。(殻は持ち帰った)売店で「笹川流れの塩」を購入した。狭い海辺で製塩が行われているようだ。

(塩造りについては別途詳述)

笹川流れから村上まで戻った。凡そ十六km二十分。村上の町は三面川みおもてがわの河口に開けた城下町。見るべき所が少なくない。全国各地どこでもそうであるように、村上もまた町おこし中だった。時代劇に出てきそうな商家や民家を復元した白木かぐわも香しい建物が彼方此方にあつた。その内の荒物屋兼土産物屋に入った。都会では見られない農具や漁具が並べてあつて、つい財布の紐が緩んでしまった。

今日、村上と云えば、銘酒「メ張り鶴」と「塩引鮭」しほひきいけそして雅子様みやこさまの出生地として知られる。宮尾酒造で酒を、うおやで鮭を購入し、その日の宿である瀬波温泉大観荘へ向かった。

(塩引鮭については別途詳述)

九日朝、村上に戻り三面川の鮭の博物館である「イヨボヤ会館」を訪れた。イヨボヤとは村上地方の鮭の古名である。

(村上藩の鮭漁についても別途詳述)

その日は「新潟ふるさと村」に立ち寄った後、新潟市内のホテルオークラに泊まった。夕食は、新潟で一番人気と云われる寿司処「寿司清」で海の幸を、串揚げ「串の房」で山の幸を戴いた。結構な散財だった。両店とも大層繁昌していたところを見ると新潟は食通の町なのだろうか。

十日は土砂降りの雨だった。新潟亀田IC→北陸自動車道→中之島見附ICを経て信濃川を渡り与板へ入った。与板は兵庫県の三木や岐阜県の関と並ぶ刃物の名産地であり、中でも鑿のみや鉋かんなど大工道具を主体にした打刃物の産地として大きなシェアを誇っている。

メールのやり取りで知り合った鉋鍛冶小森氏のお宅にお邪魔した。同氏は五十代ではあるが、当地では若手の鍛冶師とされる。(先年伝統工芸士に認定された)大振りの鉋は長老達の顔を立て、専ら小型から中型の鉋造りに励んでいる。(小鉋は宮大工・建具師・指物師・桶職人・工芸家などに愛用されている)同氏の鉋は既に数十丁購入し。我が工房で大いに活躍している。ご子息も跡継ぎとして目下修行中とのこと。仕事場を拝見した後、与板の刃物商社を数軒廻り、おほか 槍鉋やりがんな・ちような 手斧まろのみ・丸鑿まるのみなど大量の刃物を購入した。これまた分不相応な散財だった。

昼食をご馳走になって帰路につく頃。雨脚は一段と激しくなった。信濃川に警戒警報が出され、何時通行止めになるか判らないとのこと、中之島見附ICに戻らず、長岡ICへ向かうように勧められた。ところがワイパーが追いつかない程の雨になったため、長岡ICまで先導して貰った。

感謝感激であった。そして関越トンネルを越える頃、新潟県内の関越自動車道は全線通行止めになった。

与板は二〇〇四年十月二十三日の中越地震、そして二〇〇七年七月十六日の中越沖地震の震源地に近く、大きな被害が心配された。液状化現象や墳砂現象ふんさが見られたとの情報も伝わった。一瞬、棚に置かれた鑿のみや鉋かんの飛び散る惨状を予想してしまった。幸い大きな揺れの割には建物への被害は少なく、仕事に差し支える程ではなかったそうである。

小森氏は毎年横浜高島屋で開かれる「伝統的工芸品展」に度々出展されている。奥様は新潟美人。

信府統記⑨ 「シナリオ4」

葛子、それぞれの長及び調査隊員を集める

葛子 録の者の報せを受けた。良くやった。大儀であった。

調査長 お言葉有り難き幸せに存じます。思いの外日数ひかずがかかりました。できる限り調べましたが、まだまだ足りませぬ。

葛子 足腰を痛めたそうだが。

調査長 大夫良くなりました。実は、調べが終わり帰り着く頃になり、足の運び方、身体の傾け方、息の仕方など、山を歩く術すべについて蝦夷の者に教えを受けました。すると嘘のように楽に歩ける

ようになりました。出立の前に習えば、足腰は痛めなかつたものと思われれます。

葛子 判った。皆にその方を知らしめよ。

隊長 ところで、上の原で使う船についてはどうか。

調査3 船は直ぐにも要ります。やはり今ある船を解いて小さく造り替え、材のまま運び上げる方が良いと思われれます。

隊長 櫓は使えそうか。

調査3 使えます。しかしながら上の原まで沢を渡る所が幾つかあります。

その手立てを考えなくてはなりません。

大工長 縄を多めに備え、皆で力を合わせて運ぶ外はあるまい。

隊長 船の作り替えは進んでいるか。

大工長 小さな船を二艘、それよりやや大きめの船を二艘造っています。

十日ほどで出来上がります。それまでに櫓も間に合わせます。

そこでお願いがございます。櫓で運び上げるためには数多の縄が要ります。どうか手を貸して欲しい。

隊長 どのような縄が要るか。

大工長 蔓や木の筋を解してから縋えば、強い縄が得られます。

隊長 判った。皆で力を合わせよう。ところで、残る船はどうすれば良いか。

大工長 船を浜辺に捨て置けば、やがて朽ち果てます。合わせて十二艘の内、四艘から三艘の船に造り替えています。残り八艘の内四艘は、何時でも使えるように蝦夷の者に世話を頼むのが良いと思います。後の四艘は、何時の日か海に戻る時まで、陸に穴を

掘り埋置くのが良いでしょう。

隊長 蝦夷の長に囂ろう。さて、山崩えたる地はどうか。

調査3 直ぐにも手当が望まれます。山間の険しく厳しい地で大きな岩を取り除かなければなりません。危うく難しい工事になります。ましよう。

隊長 何か良い手立てはあるか。

調査3 石割について心得のある者が我等の中にいると聞いております。

隊長 砕のことが。先年、磐井の大君様の墓を造りし時、阿蘇の山から石を切り出す務めに遣った。だが未だ年若く心許ないぞ。

調査3 何を言われますか。小太郎殿ならば既に一人前です。若者等の

中でも才が抜きんでています。小太郎様に従わぬ者は居りませぬ。

隊長 親の目には頼りない子供なのだが。

葛子 我も小太郎については気に掛けていた。良い折じや。

小太郎を呼べ。

隊長 畏まりました。

小太郎 お呼びでございませうか。

葛子 お前は阿蘇の山で石を切り出したそうだな。今その技が求められている。

小太郎 ほんの手伝いでした。大層な技は持ち合わせておりませぬ。

鍛冶長 口を挟んで申し訳なく存じます。大君様、小太郎殿の言葉を俄に信じてはなりません。既に多くの功を上げています。湊近くの海中の岩が海路の妨げになる時、小太郎殿の技によって取り除いて

まいりました。この度の船出前まで、船底の傷みが少なかったのはそのためです。小太郎殿の頼みにより、せり矢（石割に用いる鉄の楔）を幾本も拵えました。

隊長 知らぬは親ばかりとはこのことか。

葛子 よし、小太郎を石工の長に命ずる。要る物は副の長や鍛冶の長に申し出よ。

小太郎 及ばずながら力を尽くします。

隊長 さて、上の原の魚についてはどうか

調査4 鮭や岩魚が住むと聞きましたが、この度はよく確かめられませんでした。夏の頃に再び調べます。

隊長 判った。蝦夷の者からできるだけ聞き出すように。

調査4 少し聞き及んだ所によりますと、鮭は種々の方で貯えることができるそうです。生のままでは直ぐに傷みますが、腸を取り出し、塩を塗して風通しの良い所で乾せば、長い間食せるということです。この事に詳しい蝦夷が北の方に居ると聞きました。

隊長 折をみて調べよ。

突然海人6が駆け込んできた

海人6 申し上げます。海人7が家の者を引き連れ船を掠めて逃げました。

隊長 何時のことだ。

海人6 昨夜のことと思われまます。

隊長 幾人だ。

海人6 十六人です。

隊長 どの船を掠めたか。

海人6 新羅の船です。

大工長 それは不味い。底が傷んだ船だ。五日と持つまい。

隊長 何処を目指したのか。

海人6 判りませぬ。唯、縁の者が能登に居ると聞きました。

大工長 危ういな。無事に着ければ良いが。

海人6 追うべきでしょうか。

隊長 海人7の漕ぎは糟屋一だ。追いつける者は居まい。止むを得ぬ、捨て置け。

隊長 さあ、心を静めよ。話を続ける。塩焼の長、その後どうだ。

塩焼長 はかばかしくありません。塩焼きの器が直ぐに割れてしまいます。

隊長 どのくらい得られたか。

塩焼長 二三日分です。

隊長 何か良い手立てはないか。

塩焼長 俄に作った器では思うようになりませぬ。塩を焼く薪を持てば、出来上がった塩と換えられると聞き及びました。

隊長 そうか、ならば薪を集めよ。土師の長も同じか。

土師長 塩焼きの器は元々壊れやすいものです。他の器はどうか使います。差し当たり要る物は作り上げました。

隊長 良くやりました。では、衣服の長はどうだ。

衣服長 この地の蝦夷の持つ皮だけでは足りず、近くに住む他の蝦夷に

頼み要る分は得ました。

隊長 誰がその蝦夷の元へ行つたのだ。

副隊長 蝦夷の者（蝦夷2）に頼みました。彼はなかなかの者です。皮だけではなく他の品の取引にも詳しく、我等が要る物を何処からか次々と運んできます。姫川の上へ移つた後も世話になりましょう。

隊長 判つた。内々に心付けよ。

副隊長 畏まりました。

隊長 鍛冶の長よ、倅の小太郎が石工の長を任された上は、どうか力になつて欲しい。宜しく頼む。

鍛冶長 実は、既に進めております。せり矢作りは手の者に任せてあります。小太郎殿の頼みにより、川中で矢を失わぬよう繩を通す穴を開けることになりました。長殿おさどのご心配には及びませぬぞ。どうしたとか。事が早いな。糟屋の頃とは大違いだ。

鍛冶長 皆これから先のことですが気がかりなのです。手隙なく次々に務め果たせば心安まります。

葛子 良い手の者ばかりで我は幸せじゃ。必ずや心穏やかな日々がやつて来よう。

隊長 十日と二日の後。姫川の上へしゅつたつに立出する。それまでに事おん竟よ。

「安曇族 姫川の上へ入植の段」これにて一先ずお終い。

以上のシナリオは「六世紀の中葉、磐井の乱の後、糟屋の安曇族は葛子と共に安曇野の地に逃亡してきた」と仮定し、更に大化の改新の頃までに安曇郡が置かれたとの前提によるものである。元になった【日本書紀】の記述に稍問題があることから（書紀では本文の内容と矛盾する記述を【百濟本紀】から引用している）、決して十全な推論とは言えない。また、安曇郡の設置時期が大化の改新より後のことであつたとすれば、シナリオの土台は一気に崩れてしまう。

安曇野地方の古墳から出土した直刀の分析から、糸島の砂鉄を使ったのではないかとの説があり、また同じく出土した鉄製の農具や土器の仕様から北九州地方の影響が見られるとの説を振り所にシナリオを書き上げてみた。決して歴史的事実を反映したものではない。あくまでも「泉小太郎伝説」の合理化を図つたものである。「中あたらずと雖も遠からず」が狙い目である。

「鮭物語」へつづく・・・

鮭物語① 「鮭について」

安曇族が信州の山奥に入植した理由の一つに、しばしば「鮭」が上げられる。もし、安曇野の公的機関に「海人族である安曇氏が、なぜ安曇野の地にやってきたのか」と尋ねれば、「その昔、鮭を追い求めてやってきた」との答えが返ってくるかもしれない。

それには相当の理由がある。

・往昔、安曇野の地は鮭の宝庫だった。

・古代から平安時代にかけて、信濃国から皇室や朝廷に贄として鮭が献上された。生の鮭は越前・若狭・丹波・丹後・但馬・因幡などから京へ運ばれたが、信濃や隣の越後からは「楚割鮭」なる鮭の乾物と思われる品が献上された。このことは【延喜式】から確認できる。

その確認作業の前に、鮭の生態について【二面川の鮭の歴史】から冒頭の一節を転載する。(著者は村上市在住の鈴木鉦三氏。昭和五十二年刊)

「さけ」という魚 【三面川の鮭の歴史】から

さけは川で生まれ、海に下って遠く北太平洋まで長い旅をし、そこで成長し、普通四年後に再び長い旅をして生まれた川に帰り、産卵をしてその生涯を閉じます。こうした習性を回帰性といえます。さけが三面川に帰ってくる時期は、九月から一月頃にかけてです。さけがどうして生まれた川を探しあてるかは、詳しくはわかって

いませんが、渡り鳥と同じような方向を知る力と、生まれた川の水を識別する何かをもっているからだといわれています。

遠い北太平洋から長い旅をして故郷近くの海に戻り、生まれた川の水を含んだ海水から嘗って自分が下った川を探しあて、それを遡上します。そして水のきれいな砂礫の川床の所に達すると、雄雌で産卵の準備に入ります。雌は尾鰭で川床の砂利をあげるようにして大きな凹みを作ります。雄は雌の回りを遊泳しながら、他の雄の来るのを追い払うようにして雌の作業を守ります。雌が凹みを掘り終わると、雄は雌の身体に頭をつけるようにして盛んに刺激を与えます。やがて雌雄は凹みの上に並列し、雌が凹みに向かって放卵、そして雄がその上に精子を放出します。その事が終わると雌は再び尾鰭をふるって小砂利をその上に覆いかけます。こうして産卵の事を終って疲れ切ったさけは、やがてその生涯を閉じるのです。私はこの様子を「日本のさけ・ます」という映画で見ましたが、ほんとうに涙ぐましいものでした。

受精した卵は三十日で発眼し、そして六〇〜七〇日後には大きな臍囊をつけた稚魚となります。稚魚はこの臍囊から専ら栄養をとり、臍囊は段々に小さくなって三〇〜四〇日後にはなくなり、漸く魚らしい形になります。

此のさけの子は、春早く川を下って海に入り、親たちの住んでいた北の海まで遠い旅に出るわけです。途中いろいろな外敵に襲われ、どれくらいが目ざす北の海に到達するのでしょうか。そこで成長したさけは、四年目には成熟して、産卵する場所を求めて

再び長い旅をつづけて生まれた川に戻ってくるのです。生まれた川水を含んだ海に入った頃から、さけは餌をとらず、蓄積した体力で川を遡上し、産卵の事をするのです。海に居たときは鮮紅色せんこうをしていた肉は、脂肪分がぬけ、色も白っぽくなります。成熟したさけは4kgにもなり、時には10kgを超えるものがあります。体長も80cmから1m以上にもなる大きなものがあります。さけの類は、

さけ科	
さけ属	さけ (銀さけ・紅さけ・白さけ) さくらます (やまべ) からふとます べにます (ひめます) ぎんます ますのすけ
にじます属	にじます
いわな属	あめます おしよろこま (いわな) かわます
いとう属	いとう

ですから、さけもますも同じ属に入っているわけです。

さて、私たちは一般に鮭という字をサケと読んでいますが、漢和辞典ではケイ或はカイと発音しフグことだとし、我が国ではサケのこととしています。漢字を作った中国ではさけが獲れていないので、さけに当たる字は作られなかったのです。我が国に

漢字が入ってきてからさけに字をあてはめる時に、鮭の字を当てたようです。ところで、この鮭の字も辞典ではセイ或はシヨウと発音し、なまぐさしの鯉と同字とし、我が国ではさけのこととしています。和名類從鈔わみょうるいじゅう(九三七成立)には、「鮭、佐介」とし、「鮭訛為鮭」とありますように、字の形が似ていることから、鮭の字が用いられるようになったのでしょう。明治から昭和も戦後まで永い間三面川のさけの元締であった育養所は村上鮭産育養所と看板に書いていました。鮭と鮭のどちらが正しいかなどという議論などはせず、以下通例に従って、当用漢字には入っていませんが、鮭という字を使うことにします。

なお、さけという語源については諸説ありますが、アイヌ語のシャケンペから来ているとされる金田一京助先生の説が、私にはしっくりするような気がします。村上地方では昔はイヨまたはエヨといっていました。これはイヲ(魚)から転じたものとし、日本海側の地方では鮭のことを、イヨまたはヨオと称しているのと同じ類と考えます。(以上『三面川の鮭の歴史』より)

次に【角川古語大辞典】を見てみよう。()内の説明文は編者が加筆した。

さけ【鮭・鮭】

魚名。さけ科の魚。背部は暗青色、腹部は銀白色で、紡錘形(円柱形の両端のどがった形)をなし、体長は大きいものは90cmにも及ぶ。生後四、五年して、晩秋・初冬の候に、自分の生れた川に回帰湖上する習性がある。その際、銀白色の鱗は黒ずんで、ぶな色となり、

雄の口は突出して下向きに曲る。川の上流の砂利底を産卵床として産卵・受精し、やがて死ぬ。孵化した子は、越冬ののち、五、六cmになって海に下る。古代から、遡行の時期に捕獲され、食用とされた。

【常陸風土記】の久慈郡助川の条に「河に鮭を取るが為に改めて助川と名づく〈俗の語に、鮭の祖を謂ひて、須介と為す〉」という地名説話が見え、大きいものを「すけ」といつたらしい。

【主計寮式】には、越後の調・庸に鮭があり、越後・越中や内陸の信濃の中男ちゆうなんの作物に鮭の子籠こごもり・子・氷頭ひづ・背腸せわた・楚割すわやりの名が見え、苞苴あたまきのほかにさまざまの鮭製品があつたことが知られる。

【内膳司式】によれば、若狭・越前・丹波・丹後・因幡などからも生鮭なまざしを年料ねんりょう（諸司しよしで一年間に必要とする食料や物資）に奉つていて、北日本以北に限られる現在よりも、その分布範囲の広がつたことが知られる。

【新猿楽記】や【宇治拾遺・一・一六】によれば、現在も村上の三面川や直江津の荒川で行われている越後の鮭が、ことに有名であつたらしい。

中世にも北方の国々、さらには蝦夷えぞからも、塩鮭しほざけ・乾鮭からざけの類が都にもたらされたことが、【庭訓往来・四月】に「越後塩引…夷の鮭」の名が見えることから知られる。

【伽・精進魚類物語】では、「まぢかくは越後国瀬波せなみ、あら川、常陸国鹿島かしま、行方なめかた、凡北およそへ流る河を領知りやうちしける鮭の大介おおすけ・鱗長はたながが有様：又、我等が一門中には、北陸道ほくろく系けいぞが千島まで北へ流る、川をば我等がまゝに管領かんりやうすれば」とある。

近世の【本朝食鑑・七】には「凡そ東北の大河、之を采る：今、越後・越中・飛騨・出羽常陸・常の水戸・秋田、最も多し。下総の銚子、下野州の中川郡川上流、上野州利根もまた有り。夏末、秋初、之を采るものを初鮭と曰ふ」とあり、ことに江戸では、利根川の初鮭が、伊豆沖の初鯉に比せられるほど珍重された。また塩鮭は、江戸の年市としのいちにおける重要商品であつた。のちには「しやけ」ともいう。（以下略）

鮭物語② 「楚割鮭」

では、【延喜式】から「楚割鮭」なる鮭の乾物ひものと思われる品を確認しよう。楚割鮭は延喜式の各所に見えるが、その中から「卷三十一 宮内式 諸国例貢御贄 年料」及び「卷三十九 内膳式 諸国例貢御贄 年料」の条を転載する。原本は極めて難しい漢字が並んでいるため、読み易いようにルビを付した。しかしながら、読み不明の文字が幾つかあつた。（順次解説を進める）楚割鮭の位置づけを知るために、諸国から貢納される御贄の一覧表（次頁）を作つた。表から幾つかの特徴が判る。

延喜式 卷三十一 宮内式		延喜式 卷三十九 内膳式	
国	諸国例貢御費 年料	諸国例貢御費 年料	
山城	ひたிரり 平 栗子。ひうお 氷魚。すずき 鱸。	ひうお 氷魚。すずき 鱸魚。	
大和	ほしかわかめ 干 鱈 (干したスッポン)。はしほみ 榛子。		
摂津	ひらん 皮蘭。かさめ 擁釵。	かさめ 擁釵。ひらん 皮蘭。	
河内	いたび 木蓮子。		
和泉	たい 鯛。あじ 鰺。	たい 鯛。あじ 鰺。	
伊賀		すしあゆ 鮓年魚二担四壺。しおぬりあゆ 塩塗年魚二担。おりびつ 入折櫃。	
伊勢	しい 椎子。かき 蛎。あらかき 磯蛎。	たいつきずし 鯛春酢二担廿籠二度。すしあゆ 鮓年魚二担四壺二度。かき 蛎。あらかき 磯蛎。	
志摩	ふかみる 深海松。	ふかみる 深海松。	
尾張	きざし 雉。	=椎子? 為伊二担廿壺。=白貝? 白貝二担四壺。つば 蟹螯二担四壺。かうな きぎすのきたい 雉 腊納十八籠。こ 籠別六翼。こべつ	
参河		わかめ 稗海藻一担四籠。こ 籠様長一尺二寸。広八寸。深四寸。他皆同此。	
遠江	あまずらに 甘葛煮。あまご 甘子。わかめ 稗海藻。	わかめ 稗海藻。	
駿河	あまずらに 甘葛煮。あまご 甘子。		
下総		わかめ 稗海藻六籠。	
常陸	あまずらに 甘葛煎。	くさぐさめ 雑海藻二担廿籠。	
甲斐	あおなし 青梨子。		
相摸	あまご 甘子。たちばなのみ 橘子。		
近江	むべ 郁子。ひうお 氷魚。ふな 鮒。ます 鱒。あめのうお 阿米魚。	にしおあゆ 煮塩年魚二石。ふな 鮒。ます 鱒。あめのうお 阿米魚。ひうお 氷魚。	
美濃		すしふな 鮓鮒隔月三缶。ひぼしのあゆ 火干年魚一担八籠。すしあゆ 鮓年魚四担八壺。たん つば	
信濃	なし 梨子。ほしなつめ 干棗。ひめぐるみ 姫胡桃子。すわやりさげ 楚割鮭。	なし 梨子。ほしなつめ 干棗。ひめぐるみ 姫胡桃子。すわやりさげ 楚割鮭。そのかのかずは 其荷数者。なし 梨子。か 八こにおさむ 籠別七十顆。か おおなつめ 大棗一荷。か 八こにおさむ 籠別一斗。か おおなつめ 大棗一荷。か 八こにおさむ 籠別一斗。すわやりさげ 楚割鮭一荷。か 八こにおさむ 籠別六隻。か おおなつめ 大棗一荷。か 八こにおさむ 籠別一斗。ためしのみつぎは十月にこれをたてまつる 例貢十月進之。ためしのみつぎは十一月にこれをたてまつる 例貢十一月進之。	
陸奥	えびすめ 昆布。よりえびすめ 縹昆布。	さくえびすめ 索昆布四十二斤。ほろえびすめ 細昆布一百廿斤。ひろえびすめ 広昆布三十斤。	
若狭	もずく 毛都久。おご 於期。わかめ 稗海藻。なまさけ 生鮭。	なまさけ 生鮭三担十三隻三度。わかめ 山薑一斗五升三度。なまさけ 稗海藻。こ 二籠十二斤。もずく 毛都久。おご 於己。	
越前	あまずらに 甘葛煎。しい 椎子。わかめ 稗海藻。わさび 山薑。すじこ 鮭子。ひず 水頭。せわた 背腸。	わかめ 稗海藻二担十籠。こ 籠別一斗。又二捧別一斗。なまさけ 生鮭三担十二隻三度。わかめ 山薑一斗五升三度。すじこ 鮭兒。ひず 水頭。せわた 背腸。	
能登	あまずらに 甘葛煮。わかめ 稗海藻。	わかめ 稗海藻一輿六籠。	
越中		こ 一輿五籠。なまさけ 雉 楸一輿五籠。	
越後	あまずらに 甘葛煎。	すわやりさげ 楚割鮭八籠八十隻。すじこ 鮭兒。ひず 水頭。せわた 背腸各四麻笥。おけ 別一斗。	
佐渡		わかめ 稗海藻一担十二籠。	
丹波	あまずらに 甘葛煎。しい 椎子。ひらぐり 平栗子。かちぐり 搗栗子。	なまさけ 生鮭三担六隻三度。すしあゆ 鮓年魚二担四壺。しおぬりあゆ 塩塗年魚二担。おりびつ 入折櫃。	
丹後	あまずらに 甘葛煎。なまさけ 生鮭。	なまさけ 生鮭三担十二隻三隻。ひず 水頭一壺。せわた 背腸一壺。わかめ 山薑一斗五升三度。なまさけ 小鯛 楸一石二斗。こ 籠	
但馬	かちぐり 搗栗子。あまずらに 甘葛煎。すしあゆ 鮓年魚。なまさけ 生鮭。わかめ 稗海藻。	わかめ 稗海藻四担十六籠。なまさけ 生鮭三担十二隻三度。すしあゆ 鮓年魚二缶。わかめ 山薑一斗五升三度。	
因幡	あまずらに 甘葛煎。しい 椎子。あまご 甘子。なし 梨子。ほしなつめ 干棗。わかめ 稗海藻。	わかめ 稗海藻十二籠。なまさけ 生鮭三担十二隻三度。わかめ 山薑一斗五升三度。	
伯耆		わかめ 稗海藻一担十籠。なまさけ 海藻根一担十籠。	
播磨	しい 椎子。かちぐり 搗栗子。	すしあゆ 鮓年魚二担四壺。	

延喜式 卷三十一 宮内式		延喜式 卷三十九 内膳式	
国	諸国例貢御費 年料	諸国例貢御費 年料	
美作	あまぐらに かちぐり すしあゆ 甘葛煎。搗栗子。鮓年魚。	すしあゆ 鮓鮓。	
備前	あまぐらに くらげ 甘葛煎。水母。	ひず ほとき たび 氷頭十缶二度。	
備中	あまぐらに もろもろのなり 甘葛煎。諸成。	にしお あゆ ほとき 煮塩年魚八缶。	
長門		わか め 樺海藻一百四籠。	
阿波	あまぐらに あまご 甘葛煎。甘子。		
紀伊		すしあゆ たん 鮓年魚二担四壺。	
讃岐		たい しおづり せき しらぼし 鯛塩作廿隻。白干十二籠。	
土佐		おしあゆ せき にしおあゆ ほとき 押年魚一千隻。煮塩年魚五缶。	
太宰府	あまぐらに いたび 甘葛煎。木蓮子。	みとり あわび きん つつみ ひきあわび きん つつみ うすあわび 御取鮓四百五十九斤五裹。短鮓五百八十八斤十二裹。薄鮓八百五十五 斤十五裹。陰鮓八十六斤三裹。羽割鮓卅九斤一裹。火烧鮓三百卅 五斤四裹。已上調物鮓鮓一百七十八斤五缶。鮓鮓一百八斤三缶。 わたづけ あわび きん ほとき あまくち あわび きん ほとき いじょうちゆうなんさくもつ 腸漬鮓二百九十六斤九缶。甘腐鮓九十八斤二缶。已上中男作物。 すしあゆ きん ほとき にしおあゆ きん ほとき こもりすしあゆ 鮓年魚二百廿三斤六缶。煮塩年魚八百卅九斤廿缶。内子鮓年魚卅六斤 一缶。已上梁作。鯛醬四斗八升二缶。宍鮓二斗三升一缶。蒜房漬 一石五斗七升六缶。以上厨作。雉繻二輿六十籠。別三翼。腹赤魚 筑後肥後両国所進出。其数随得。已上別貢。	

(注) 表中のルビは、現在調査中であり大凡の理解を得るための暫定的なものです。そのまま他に転用されませぬように願います。

「御費の特長」

- ・ 山の幸より海の幸の方が多い。
- ・ 鮓の加工品と思われる品目が数種見える。
- ・ 御費の内容と数量から、信濃と越後の負担が大きい。

では、信濃と越後の部分を、数量が明記された「延喜式 卷三十九 内膳式」から抜き出してみよう。(読み下し文にした)

「信濃」

梨子。干棗。姫胡桃子。楚割鮓。

其の荷の数は、

梨子一荷。一荷につき八籠納めよ。一籠あたり七十顆とせよ。
干棗一荷。一荷につき八籠納めよ。一籠あたり一斗とせよ。
胡桃子一荷。一荷につき八籠納めよ。一籠あたり一斗とせよ。
楚割鮓一荷。一荷につき八籠納めよ。一籠あたり六隻とせよ。
以上の貢物は、毎年十月に進れ。

梨子三荷。一荷につき八籠納めよ。一籠あたり七十顆とせよ。
干棗一荷。一荷につき八籠納めよ。一籠あたり一斗とせよ。
以上の貢物は、毎年十一月に進れ。

「越後」

楚割鮓は、八籠八十隻。
鮓見、氷頭、背腸それぞれ四麻笥、一麻笥あたり一斗とせよ。

つまり、楚割鮭は、

信濃から八×六〇四十八尾（隻は尾を意味するものと考えられる）、越後から八十尾、献上されていた。

では、楚割鮭の「楚割」とは何か。【角川古語大辞典】を見てみよう。

すはやり【楚割・魚条】

「すはえ」と「わり」の複合形の転という。魚肉を細長くすはえ状に切り裂いて、塩引きし、干し固めたもの。薄く削って食べる。

（編者注）すわえ（すはえ）とは、木の枝や幹から細く長くのびた若い小枝のこと。

平城宮趾出土木簡に「宇波加楚割」「佐米楚割」「須須岐楚割」

「麻須楚割」などの名が見える。

【庭訓往来】の頭注に「楚割 背をわるとは非也。背の通り

ほそくきつて、其れをやくを包丁の道にくりからやきと云。料理

の上の珍物となり」とある。「そわり」とも。（以下略）

「魚肉を細長く切り裂いて、塩引きし、干し固めたもの。薄く削って食べる」ならば、村上の「塩引鮭」に似ていないだろうか。村上では鮭の腸を抜いて丸ごと干しているが、細く裂いて干せば同じ物が出来上がるのではないだろうか。

さて、ほんの軽い気持ちでスタートした「朝の連ドラ風歴史紀行文・安曇野物語」が、なんだか研究論文のような展開になってしまった。どこで道を間違えたのか、やはり社寺縁起の記述に疑問を抱いた時からだろうか。

安曇野の謎に深入りしてから気付いたが、初めから「邪馬台国の謎解き信州版」のような要素はあった。これまでに多くの研究者が取り組んできたことなど露知らずに飛び込んでみたら、さあ大変、推理小説を読むのとは違って自分自身が迷探偵に成らざるを得なくなった。「海人族である安曇氏が信州の山奥に入植した」という結末に向かつて、そのプロセスをどうやって解きほぐすか、問題はその一点に絞られるのだが、これが一筋縄では解明できない。可能性のある入植理由は、時期、人数、経路などを含めて幾通りもある。「推論＋推論Ⅱ仮説 ↓ 仮説Ⅱ推論Ⅱ空論」を避けるためには相応の裏付けが必要である。ところが、千五百年ほど前の話なので簡単には証拠は見つからず、状況証拠を数多く積み上げる外はない。そこで、やむなく古典の世界へ船出することになった。そうした航海に慣れた者ならば羅針盤を頼りに目指す方向へ苦もなく進めるであろうが、無免許で冬の荒海へ出た者にとっては、同じ所をぐるぐる廻るのが関の山であった。結局、六国史を始めとする古典や地方の文献を漁ることになった。主要な古典は現代語訳が出回る有り難い時代ではあるが、地方の文献は原本を直接解読しなくてはならない。これは結構時間もかかり面倒な作業である。つまるところ、そうした地道な作業を積み重ねなければ、少しも前に進むことができない、と判るまでに二月かかった。

ということ、今しばらく読みにくい和漢混淆文と付き合わなくてはならないのである。

鮭物語③ 「塩引鮭」しおひまけ

塩引鮭とは如何なる品か。村上の鮭店「うおや」のホームページからその製法を見てみよう。

塩引鮭は、鮭のまち村上が誇る最高の美味で、最高の秋鮭（雄鮭）を素材にしており、村上伝統の手作り製法で作られます。

- ・ 鮭の内臓とエラを取り除いて洗い、良くヌメリをとります。
- ・ 一本一本丁寧に塩をすり込み、一週間ほど塩漬にします。
- ・ その後、水出し、塩抜きをして丁度良い塩加減に調整します。
- ・ 皮まで磨きあげ、日本海の寒風に一週間陰干しにしてようやく完成します。

（鮭と塩のみを原料に、保存料・添加物を一切使用していません）

とある。では、保存期間（賞味期限）はどのくらいか。村上の塩引鮭を製造している各店の説明書を見ると、

冷蔵保存五度以下、冷凍保存マイナス十八度以下の時、

- ・ A店 冷蔵保存で七日、冷凍保存で二ヶ月
 - ・ B店 冷凍保存で三ヶ月
 - ・ C店 冷凍保存で三ヶ月、解凍後一週間
 - ・ D店 冷凍保存で六ヶ月
- などとあり、決して長期保存食品ではない。

さて、延喜式には諸国から京までの行程を陸路と海路で記されている。これは輸送にかかる経費を算出するための基準と考えられる。

楚割鮭を貢納する国の行程は、

- ・ 信濃→京 陸路上り二十一日 下り十日
- ・ 越後→京 陸路上り三十四日 下り十七日 海路三十六日
- ・ 越中→京 陸路上り 十七日 下り九日 海路二十七日

（越中は前出の諸国例貢御費一欄にないが、中男作物として民部省主計寮に納めている）

陸路で最短十七日、最長三十四日である。冷蔵庫や冷凍庫、ましてやクール宅急便のなかった時代、現在の塩引鮭と同様の品ならば、鮮度を保って京まで運ぶことは不可能であった。但し、各店の冷凍による賞味期限が、二ヶ月から六ヶ月と幅があることから、もし塩引時にすり込む塩を多くし、塩漬けや乾燥の期間を長くすれば、より長期の保存が可能になるのではないか。或いは、鰹節のように充分固まるまで乾燥させたらどうだろうか。とあれこれ想像を巡らしてしまふ。

さて、塩引鮭の食べ方は、

- ・ 焼いて食べる。皮や骨は茶碗に入れ、お湯を注いで頂く。
- とのこと。

以前、村上を訪問した時、「うおや」の店先で塩引鮭を試食し、その二日後、説明書通りに頂いた。当時の記憶をたどれば、包丁で普通に切れる状態で、多少歯ごたえはあるものの決して固い食材ではなかった。少なくとも【東鏡】に見える「削り食す」物ではなかった。

【東鏡】（一九〇） 建久元年 十月十三日 甲午

遠江の国菊河菊川の宿に於いて、佐々木三郎盛綱もりつな、小刀を鮭の

楚割すわやり（折敷かしまに居ゐ）に相副え、子息こむらの小童を以て御宿に送り進しんず。申して云く、只今これを削り食せしむのところ、氣味すこぶる懇切こんせつなり。早く聞きし食めすべきかと。殊に御自愛す。彼の折敷おしきに御自筆を染められて曰く、

まちゑえたる人の情もすはやりのわりなくみゆる心さしかな

また、

【宇治拾遺物語】卷一の十五「大童子鮭ぬすみたる事」

これも今は昔、越後國より鮭を馬うまに負おんせて二十駄ばかり粟田口より京へ追い入れけり。それに粟田口の鍛冶かじが居たるほどに、頂頭き禿かぶげたる大童子だいでうじのまみしぐれて、を重々らかに物物むつかしうも見えぬが、この鮭の馬の中に走入にけり。道は狭くて馬なにかとひしめきける間、この大童子走り沿よいて鮭を二つ引き抜いて懐へ引入てんけり。（中略）

【大童子】寺院で上級の僧に仕えて雑用に当る童子の一。中童子が概ね少年であるのに対して、大童子は、童形ではあるが年齢が高い。中には年齢七旬（七十歳）に及ぶとも。（筆者注）

さてこの男、大童子に噛みつきて、「わせんじやう、はや物脱おぎ給へ。」といへば、童は「さま悪みしとよ。さまであるべきことか」と云ふを、この男ただ脱がせに脱がせて前を引開けたるに、腰に鮭を二つ腹はらに添そえて差したり。（以下略）

などとあり、当時の鮭はかなり固い物であった様だ。現在の塩引鮭とは別物だろうか。

実は、楚割鮭作りすわやりさけに挑戦した人がいる。その人は今回の「安曇野の謎解き」で最も参考になった「信濃安曇族の謎を追う」の著者坂本博氏である。同氏は志賀島に近い現在の北九州市戸畑区に生まれ、京都大学で哲学を学び、その後安曇野に移り信州大学の教授を務め、現在同大学の名誉教授にあられる。奥様は志賀島出身。安曇族の謎解きにピッタリの御方である。

鮭物語④ 「楚割鮭をつくる」

では、「信濃安曇族の謎を追う」の著者坂本博氏が、楚割鮭づくりに挑戦した経緯を同書から抜き出してみよう。

試行 村上の塩引き鮭を一隻購入した。

切り身にして食べた。その一部を割いてみた。

結果 身は柔らかくとても割けない。結局グチャグチャになった。

このままでも結構美味だった。火であぶっても美味かった。

試行 再び村上の塩引き鮭を一隻購入し、廊下の鴨居からつり

下げた。「楚」とは「ばらばらに離れた紫や木の枝」と

いう意味にとらえ、鮭に木の枝の切れ目を入れてみた。

結果 どうもちがうようだ。

試行 鮭を鴨居から下ろし、まな板の上で切れ目通りに包丁を

入れた。全部ばらばらに離れた状態の切り身にしてしまった。

結果 …… （以上「信濃安曇族の謎を追う」より）

さて、楚割鮭については作り方だけではなく、姿形や大きさも不明である。前出の「佐々木三郎盛綱、小刀を鮭の楚割（折敷に居く）に相副え…」から、折敷に載る大きさであることは判るが、折敷の寸法は大小様々で、楚割の大きさを推し量ることはできない。宇治拾遺物語の「腰に鮭を二つ腹に添えて差したり…」から、下帯に差せる程度の大きさと思われるが、現代の万引き犯が相当大きな物まで隠し込むことを考えると、その大きさを判断することはなかなか難しい。少なくとも鮭を丸ごと二本ではなさそうに思えるのだが…

村上の塩引鮭には「酒びたし」なる製品がある。塩引き鮭を凡そ半年間、日本海の寒風にさらし乾し上げたものを酒に浸してから食べるそうである。村上地方では一般家庭でも塩引鮭を作るとのこと。この強干しの鮭は扱いが難しく、自宅で干した鮭を専門業者に持ち込んで加工して貰う人が多いという。

この「加工した強干しの鮭」こそ「楚割鮭」に近いのではないか。頭を取り皮を剥いで三枚に下し、更に細く切り割けば、すはえ状の鮭が出来上がるのではないか。鮭一尾分を縄や紐で一纏めにすれば、延喜式に見える楚割鮭の単位「隻」に相当するはずだ。

生の時に細い切り身にして干すことも考えられるが、長期間平並べにして干す場所の確保は難しく、かといっていきなり吊せば身がくずれ、とてもすはえ状には出来上がらないであろう。やはり乾燥後ある程度身が固まってから細く切り割いた方が、形良く仕上がるのではないだろうか。「楚割」について少し前進したようだが、太さや長さは不明である。悩める日々を過ごす内、「すわえ」には「小枝」を意味する外に、舞臺で

用いる小道具に「すわえ」なるものが見つかった。【楽家録三八】（二六九〇）舞人携器類に「曾利古持「白楚」木無「定法」去「皮」以「白」為「佳」長一尺六寸許「径」三分余乎。以下略」とある。古語辞典には「曾利古とは、舞臺の曲名。高麗楽、杵越調の四人舞。面をつけ、白「楚」を持って舞う」とある。

右の【楽家録】を読み下すと、

曾利古は白楚を持つ。木の種類には特に定めはないが、皮を取り去った白木を佳とする。長さは約四八cm許り、径は一cm余か。

もし「楚割鮭」の寸法が「白楚」に準ずる物とするならば、長さ四十〜六十cm、厚み一〜二cm、幅数cm程度と考えられる。これならば一般的な折敷にも載せられ、大童子の下帯にも差し込めるであろう。

村上の鮭漁

往昔、鮭をどのようにして捕ったか、どう処理されたか、村上地方の鮭漁について【食材魚貝大辞典 サケ・マス のすべて】を見てみよう。

村上を流れる三面川は朝日連山に源を発して越後平野を潤し、日本海へと流れ込む。そこに遡上するサケを獲るため、古くから居繰り網漁と呼ばれる漁業が、十月中旬頃から十二月中旬頃まで繰り広げられた。二艘の川船が並んで川面を下り、船尾に立つ漁師が居繰り網を両端にくくり付けた竹竿を握り、サケが網にかかると同時に網を手繰り寄せて魚をとる漁だ。

青砥武平次あおとぶへいじ

こんなサケ漁で村上藩は潤っていたが、江戸中期にサケ漁が何年も不漁続きとなり、深刻な問題をもたらした。そのとき、藩の下級武士、青砥武平次は、サケの生態もあまりわからず資料も満足にない時代に、世界に先駆けて、サケが自分の生まれた川に戻ってくるという回帰性を見抜いたのだ。

そこで武平次が提案したのが、「種川の制たねかわ」という世界で初めてのサケの増殖事業だった。種川とは、三面川の速い本流の脇に、遡上・産卵に適した水路を設けて、そこにサケを導き増殖につなげようというものだ。

サケがこの人工水路をたやすく安全に上がり、産卵できるように考案し、さらに、生まれてから川を降る稚魚を獲ることを禁止し、海へと降くだらせれば、それだけ多くのサケが成長して帰ってくる、との考え方だ。

この提案を受け入れた村上藩は資金を出し、武平次の指揮で宝暦十三年ほうれき(一七六三)から種川工事に取り組み、三十一年間の歳月を費やし、武平次の死後になってようやく種川が完成した。このサケの遡上・産卵・ふ化を手助けする自然ふ化増殖システムこそ、世界初の試みであった。

この種川の完成により、より多くのサケが遡上し、漁獲高も増え、見事にサケの増殖に成功したのだ。そして、サケは村上藩きつての財源にまでなり、サケの密漁は重い罪科に処されたほどである。こうして、米が凶作の年にも、村上ではサケで命を長らえた、

とまで伝えられる。この事業の成功により、幕末には藩の運上金二千両近くもあつたとされ、村上はサケと米作で繁栄し、越後きつての雄藩となったという。(中略)

日本海の寒風が作る塩引き

冷蔵庫や冷凍庫がなかった時代、秋から冬にかけて大量に漁獲されるサケの保存が問題であった。村上では昔ながらの「塩引き」が基本だ。新鮮な生サケのえら、内臓、血合などを取り除いて、尾のほうから頭にかけて丁寧な塩をすり込み、三〜四日塩漬けにする。その後、一晚流水などで塩抜きし、体表のぬめりなどを洗い落とし、十日〜二週間ほど寒風にさらして乾燥・熟成させる。

この乾燥で重要なのが、冬の日本海特有の季節風で、適度な低温と日本海から蒸発する水分を含んだほどよい湿度、ミネラルを含んだ潮風などの要素が絶妙に組み合わさって、水分を取り除きながら、低温発酵を促し、生サケにはないうま味を生み出すのだ。

しかし、一般の新巻サケの製法と大きく違うのは、内臓を取り除く際に、腹をすべて切り開かず、腹の一部をつなげておく点だ。これは、武士の町・村上では「切腹」を嫌ったことや、恵みをもたらしてくれる大切なサケに切腹させることまかりならぬ、という意味からだと言われている。また、寒風にさらす際も、頭を上にした「首吊り」を嫌い頭を下にして吊すなど、城下町文化ならではのこだわりがある。

こうしたサケの塩引き作りは一家の主人の仕事で、できあがりの

味はもちろん、姿形や面構えまでも自慢し合うそうだ。そして、半年強干したものを夏祭りの振舞い用に用いる。その酒びたし用は、皮をはぎ、食せない部分を切り取り、薄く切り分ける作業は熟練を要するため、最近では自宅で干し上げたものを、専門業者に持ち込んで加工してもらう人が多い。

村上市は越後平野の日本を代表する米所にある。越後平野米を使った淡麗辛口の代名詞ともいえる「メ張鶴」とサケ料理とのハーモニーはこたえられない。またこの町にはサケ料理の専門店が多いのも魅力的だ。

(以上、「食材魚貝大辞典 サケ・マスのすべて」より 執筆者・中村庸夫氏)

どうやら楚割鮭の姿が見えてきたようだ。

鮭物語⑤ 「楚割鮭のつくり方」

では、これまでの検証から「楚割鮭」の作り方と献上の手順について推理してみよう。(信濃国の場合について)

一、旧暦の九〜十一月、

- ・ 遡上してきた鮭を捕る。
- ・ 鮭の内臓とエラを取り除き、良く洗ってヌメリをとる。
(氷頭や背腸は別に処理する)

- ・ 鮭に塩をすり込み、七〜十日ほど塩漬にする。
- ・ その後、水洗いをして塩抜きし、塩加減を調整する。
- ・ 風通しが良く程良い湿度が保てる場所で陰干しする。
(雪原の小舎ならば最適か?)

一、凡そ半年後、

- ・ 鮭の頭を取り、皮を剥ぐ。
- ・ 三枚に下ろした後、更に身を細く切り分ける。
(長さ四十〜六十cm、厚み一〜二cm、幅数cm程度か?)
- ・ すはえ状になった鮭の身を、縄で簾状に括る。
- ・ 再び陰干しし、出荷の時期を待つ。

一、旧暦の九月初旬、

- ・ 簾状の鮭を一旦解き、鮭一尾分毎に再び縄で纏める。
- ・ 鮭六尾分を籠に収め、八籠分を一荷とする。
- ・ 郡役所へ出頭し、出来上がった楚割鮭の検査を受ける。
- ・ 検査後、他の御贄と共に京へ発つ。

一、旧暦の十月初旬、出発から二十日程で京に着く。

(天候により日数は増減するが、運賃は二十一日分とされる)

これも「中らずと雖も遠からず」か。

鮭物語⑥ 「安曇野の鮭」

「信濃安曇族の謎を追う」(以下「安曇族の謎」とする)によれば、

穂高町の郷土資料館には、かつて万水川よろずいがわなどでサケを捕るのに使った大小の投げ網が展示されている。そして、その説明板にはこう書かれている。

万水川よろずいがわ流域は、古代から鮭や鱒の一大漁場として知られていました。かつては、産卵期に日本海から信濃川・犀川・穂高川・高瀬川・万水川をさかのぼって白砂の流れに産卵する鮭や鱒を大ヤスで突いて漁獲する河川漁がさかんでした。古代朝廷の食膳にも、犀川や穂高川などでとれた鮭が、安曇野に定住して発展した安曇氏を通じて献納されたようで、その様子が「延喜式えんぎしき」に書かれています。しかし、現代では、ダム建設などの影響により、昭和十六年頃を境に、漁獲量が激減したということです。

(「安曇族の謎」より)

では、日本海から安曇野までの距離を、地図から計測すると、

信濃川河口～大豆島(千曲川と犀川との分岐点)まで、約一九五km
大豆橋～山清路(犀川と麻績川との分岐点)まで、約四七km
山清路～明科(安曇野を流れる河川の合流地点)まで、約二二km
合計二六〇km余りとなる。

鮭は生まれた川に入ると一切餌を取らず蓄積した体力だけで川を遡上すると云われる。信濃川の河口から安曇野まで二六〇kmの間に鮭の脂肪分はすっかり抜けてしまふであろう。つまり、旨味の薄い鮭となる。ところが、脂肪分の少ない鮭の身は脂焼けせず、寧ろ長期間の保存に向いているとも云われる。同じ楚割鮭でも越後産は旨味重視、信濃産は長期保存重視だったのであるか。

さて、広い流域面積を持つ信濃川沿いであつて、なぜ安曇野の地が鮭の一大漁場であつたか。鮭の卵の大きさは、五～九・五mm(平均七・五mm)で、砂礫の川底に産卵床と呼ばれる凹みを作り卵を産み落とすため、砂礫の大きさが、五～三十mm程度であることが望まれる。更に、産卵から稚魚になるまでの間の最適な水温は十～十三度とされる。安曇野は扇状地で砂礫が多く年間を通して十三度の水が豊富に湧き出る所が各所にあることから、鮭の産卵場として絶好の地であつたのだ。

また、鮭は積算温度(積算温度＝平均水温×日数)が四八〇度になると孵化し、同じく積算温度四八〇度で稚魚になるとされる。

よつて、卵から稚魚になるまでの日数は、

平均水温十一度の時、(四八〇÷四八〇)÷十一＝八十七日

〃 十二度の時、(四八〇÷四八〇)÷十二＝八十日

〃 十三度の時、(四八〇÷四八〇)÷十三＝七十四日

となる。

親鮭の遡上速度は時速数kmから二十kmで、一日に三十kmほど移動すると云われ、信濃川の河口から安曇野までは七～九日程度かかることになる。ところが、河口付近では冬期の平均水温は安曇野より一～二度程度

低いため、もし稚魚もまた一日に三十kmほど移動するものとすれば、河口に近いところで生まれ育った稚魚と安曇野で生まれ育った稚魚とは、河口付近で同じ頃に出くわすか、或いは安曇野の稚魚の方が先に海へ旅立つことになる。

次に、「信府統記⑥ シナリオ2」で麻の産地として紹介した「麻績」について述べる。麻績の里は犀川の難所である山清路付近で岐れる麻績川を東へ十kmほど遡った山間であり、平安時代の末期に「麻績御厨」として伊勢神宮の領地として寄進された。その御厨としての献上物について、建久四年に神宮領の明細帳として書かれた「神鳳鈔」から引用する。

麻績御厨

上分 鮭百五十尺 同兎一桶 搗栗一斗 干棗一斗
口入料 六丈布六十段 四丈布十六段 鮭三十隻 同兎一桶

とある。品目と数量を見ると、前掲の「内膳式 諸国例貢御贄年料」よりやや多い負担となっている。但し、御厨の場合、租庸調の負担率が一般の領地とは異なるため、単純には比較できない。

同書に仁科御厨分として「仁科御厨 四十丁 布八十段」とあるが、鮭に関連する記述は見えない。

また「勘仲記」に「保延六年 越前守は鮭がよく取れないため減免の願いを出している」とあり、鮭の漁獲量が不安定であったことが窺える。その理由が、鮭資源の減衰か、或いは犀川の流れにトラブルがあったかどうかは不明である。

鮭物語⑦ 「鮭の領域」

では、鮭は古代社会に於いてどのような位置にあったか。

鮭やその加工品は、京に於いては北方産の珍味として尊ばれる品ではあっても、決して主たる食糧ではなかった。けれども北方の生産地では穀物と並ぶ主要な食糧だったのではないだろうか。

ここで「鮭の領域」について考えてみよう。「*の領域」とは民俗学の用語で、その「*」に対する宗教的行事や禁忌(タブー)を持つ地域を呼んでいる。鮭に関して、そうした伝承を持つ地域は、鮭の占める位置が極めて重要であったことの証しと考えられる。そこで、幾つかの事例を【日本民俗文化資料集成19 鮭・鱒の民族】から見よう。

江戸時代には、北海道に住むアイヌの冬の主な食糧はサケでありました。ある日本人がアイヌに向かって、「お前達はサケを主食にしている。だからサケはいわば命の恩人だ。それなのにお前たちはサケの皮で製った靴をはいているが、けしからんではないか。」と言いました。するとそのアイヌは日本人の足を見て、「日本人は米を食っているが、その米の木(ワラ)で製った靴をはいているが、それはどういうわけか。」と言いかえしたという話があります。

東北地方には、十一月十五日に、サケの王様が眷属を引連れて川を上るといふ伝承がある。その時、サケの王様は「おおすけ、こすけ、今のぼる」と叫び、その声を聞いたものは三日以内に死ぬ。そこで、これを聞かぬように、モチをつけてその音で叫び声をまぎらしたり、

モチで耳をふさいだりしたといひます(民俗学事典)。おおすけ(大介)というのは、昔、国守が赴任して来ない時、国府の実務をとった役人は、たいてい次官に当る大介であつたので、信濃でも国庁の命令が大介の署名で発行されている例があります。大介が国司の実権者の代名詞でありましたから、サケの王様を「おおすけ」と呼んだのでしよう。

「北越雪譜」によると、越後の国では、毎年旧暦七月二十七日の方々の諏訪社の祭の次の日から、サケの漁をはじめ、十二月の寒あけに終つたといひます。「北越雪譜」には、この禁を破つて罰を受けた漁夫の話が出ています。「前にもいへる如く、鮭の漁は寒中を限りとす。寒あけて捕れば祟をなすといひつたふ。我が若かりし時水村の一農夫、寒あけて後、獺かわうその捕りたる鮭を奪い、これを喰いて熱になやみ、三日にして死したることあり。されば、たたりありという口碑の説も誣しゆべからず。又、かれが産みおきたるはらごをとれば、その家断絶すといひつたふ。」

諏訪社の祭りが終わるまでサケ漁をしないというようなタブー(禁忌)は、乱獲を防ぐための古代人の知恵が生み出したものであり、狩猟の神として諏訪社にふさわしい信仰です。

こういうように、サケと神様や宗教が結びついた習慣や言い伝えが、北方の民族には殊に多く、サケを神に祭っているところもありサケの内蔵は決して食はず、その故郷である海へかえしてやるというところもあります。民俗学では、サケについての宗教的行事をもつ地域を、「サケの領域」とよんでいます。これは日本ばかり

ではなく、米国カリフォルニアのインディアンをはじめ、北方民族には少くありません。

さて、原始時代の信濃は、もちろんこのような「サケの領域」であつたと思われず。ことに千曲川・犀川流域はサケが豊富であつたと思われずから、縄文式文化時代までの人々などには、ことに冬季の食糧としてサケは重要なものだったに違いありません。何しろサケは遺物として残りにくいものですから、具体的な証拠をあげることはできないけれども、平安時代になつても、サケやその加工品が信濃の名産に数えられていることから見ても、それより古い時代、ことに狩猟がおもな生活の手段だつたころには、サケの重要性が大きかつたことは疑いありません。

(以上【日本民俗文化資料集成19 鮭・鱒の民俗】)

「信濃の鮭」より 執筆者 小林計一郎氏

つまり、六世紀の中葉に安曇族が安曇野の地に入植した当初、豊富な鮭を捕ること、当座の糧として十分とは言えないまでも、飢えに苦しむことはなかつたのではないか。安曇族は廻船や交易を得意とする一族ではあるが、中には漁労に詳しい者もいたであろうし、鮭の加工や保存法については、糸魚川の蝦夷えみしを通じて越後方面の蝦夷から学ぶことができたはずだ。(この頃は、未だ越後国はなく、彼等は北方の蝦夷の一員であつた)

そして、小太郎やその母(糟屋さやきつての海女)の活躍によつて、犀川の流れを妨げていた山清路さんせいじの岩を取り除き、安曇野の地から水の患うれいが遠退いて、少しずつ耕地を増やして行つたことであろう。更に幾年月か後

追手の心配がなくなつた頃には、安曇野で産する鮭の加工品や、隣の麻績の里をはじめ北方で採れる麻などを持って、再び交易の営みを始めたことであろう。雪国で産する麻は、草木灰によるアク抜きではなく、雪晒しによる仕上げで良質な品が得られたと云う。

やがて、安曇野の地に平穏な日々がやってきた時、
思いも寄らぬ客を迎えることになった。

畿内の安曇氏① 「シナリオ5」

里役の小舎にて

副里長（元鍛冶長であつた海人3）

糟屋の地を発つてから二十年余りが過ぎた。葛子様は四十路の半ば、益々お盛んにあられる。春から夏は自ら畑に出られ、秋から冬は鮭を追い、とても大君様とは思えぬ日々を過ごされている。隊長殿は昨年自ら辞され、今は元の副隊長殿が里長を務めている。

ところで、この地にそびえる山は録の者が見立ての通り「有明山」と名付け、この里は「有明の里」と呼ぶようになった。

さて、顧みれば糸魚川の里からこの地に向かう時、船を引き上げていた者等が船諸共谷底に落ち五人の輩を失った。その後五日かけて皆で探したが見つからなかった。その時力を貸してくれた蝦夷2が、「今の時季、雪解けの水で川の流れは速い。

一日で海へ出てしまうであろう。だが、海は海人の故郷ではないか。五人は海に召され海人の守護神になられたに違いない」と言った。

その後、老いて逝きし者十人、この地で生まれたる者二十人、今は一族の者合わせて一八〇人となった。

川下の岩崩へたる地の工事は、やはり難しく危うかった。始め小太郎が要になつて事を進めたが、なかなか思うように捗らなかつた。それをご覧になられた小太郎の母上が、「見ていられぬ。我も加わる」と言つて、母子共に力を合わせてからは大いに事が進んだ。糟屋一と呼ばれた海女の力に若者等はみな驚いた。「二人合わせた力は、とても人の為す技とは思われぬ」と誰彼となく言つた。とは言え、雪解けの水が溢れぬようになるまで七年の歳月を費やした。小太郎曰く「まだまだだ。大雨降ればどこかの川が溢れる。これからも進める」と。

やはり、蝦夷2の力は大きかつた。鮭の捕り方や蓄え方など、北の蝦夷を連れてきて教えを受けることができた。更に、塩や出来上がった鮭の品の取引についても力になってくれた。噂によれば、彼は先年妻を失つたとのこと。どうも海女の誰かに思いを寄せているようだ。

そうこうする内に、今年もまた春がやってきた。

ある日、塩を求めに糸魚川の里まで下つた塩役（元海人8）が、手の者の他に蝦夷2と見知らぬ者三人を連れて帰つてきた。よく見ると何とその一人は海人7だった。

塩役 糸魚川の里で思わぬ者に出会った。それがこの海人7だ。彼は

二十年前に船を掠めて逃げたのだが、幸い能登の縁者の元に辿り着き、今はその地の海人として昔のように諸国を廻っているという。

海人7が申すには、蝦夷2の仲立ちにより有明の里で製れる鮭の品を京へ運びし時、膳職様の目に留まり、「有明の郷の鮭を御膳に献りしところ、帝は大層お気に召された。これから年に数度荷を送り届けよ」との思し召しを賜り、こうして膳職様をお連れ申し上げた。と言っている。

蝦夷2 断りなく海人7に近づき申し訳ない。彼の船は誰よりも速い。済まぬとは思いつつも、痛みやすい糧の類は、どうしても頼まざるを得なかった。

副里長 過ぎたることだ。案ずるな。達者で何よりだ。

海人7 副里長様のお心を損ね痛み入ります。礼無き事とは存じますが、敢えて申し開きをいたします。私は陸が不得手なのです。陸に上がれば正にカッパそのものです。今こうしていても足下が揺らぎます。どうかお許しくださいませ。けれどもいつも皆の事を案じてまいりました。既に帝も代わり追手の患いも失せました。せめてその事だけでもお伝え申し上げたく、恥を忍んでやってまいりました。

膳職1 海人7の言う通りである。今や糟屋の事を責める者は誰もいない。寧ろ別の捉え方をする者すらいる。糟屋の屯倉を献りて後行方知れずになり、暫くは追手を掛けたのだが、それから

と云うもの諸国で思わぬ事が続くようになり、やがて追手を解かれたのだ。実は、どこの国でも後ろめたい事の一つや二つはあるものだが、糟屋の話聞き及んだ国々から次々と屯倉が献られたのだ。そのために争いは減り、朝廷の力は益々強くなった。既に葛子殿の罪は忘れ去られている。

副里長 それは此の上なき知らせ、大君様や里長も喜びましょう。

膳職1 京から遙々やってきた目当ては、塩役殿の言われた通り、鮭の品についてだ。帝がお気に召された上は、膳職を預かる身にとつて捨て置けぬ。直ぐにも取引を望むところだ。ついては、この地の者の戸籍を起し田畑を与え皆一人前の国民として録すことを約する。だが、国民となれば果たさねばならぬ務めが生ずる。糟屋の頃と同じく、租や調を納め、庸の役に応ぜねばならぬ。帝がお気に召された鮭の品はそれらの換わりにもなる。負目が増すばかりではない。朝廷の名に於いてこの地を守り、争い事が起これば力になる。昔の様に諸国を廻る許しも得られる。この地に神社を建てることも認められる。他所の里から嫁を迎えることもできる。このことは既に朝廷に申し上げ、御墨付を得ている。有明の里の行く末を案ずるならば、答えは一つではないか。

副里長 私にはお答えできかねます。大君様や里長に凶らねばなりません。暫くお待ちください。ただ今、大君様は麻績の里に、里長は川会の地に居られます。二人は明日戻ります。

膳職1 我の生まれについて明かす。我も安曇の一族である。元は同じ

糟屋の出である。その昔、**譽田別天皇**（応神天皇）の御代に朝廷に取り立てられた**大浜宿彌**の裔である。今は宮中の内膳司を賜っている。我はその手の者だ。我が殿も糟屋の衆については心を痛めている。良き応えを待つ。

膳職2 我が殿とは、お父上のことであられる。
副里長 恐れ入ります。

畿内の安曇氏② 「屯倉」

【屯倉】（ミは接頭語。ヤケはヤカ（宅・家）の転、屋舎・倉庫の意）

大和朝廷の直轄領から収穫した稲米を蓄積する倉。転じて、朝廷の直轄領。官家・屯家・屯宅・三宅などとも書く。（広辞苑）

葛子が糟屋の屯倉を献上した年は西暦五二八年、その六年後の五三四年から五三六年までの三年間に諸国から献上された屯倉の数は四十個所に上る。記紀に見える屯倉の総数は五十九個所であるから、その比率は凡そ三分の二となる。この突然の屯倉献上ブームは、糟屋の一件とは無関係であろうか。（下表参照）

ものは序で、下表中の橘花屯倉は後の橘樹郡、倉櫛屯倉は後の久良岐郡と考えられている。多氷は多摩とされるが、横淳については不明である。

〔表六〕

天皇・年	西暦	屯倉名	国
垂仁 27 年		米目邑屯倉	大和
仲哀 2 年		淡路屯倉	淡路
仁徳 13 年		茨田屯倉	河内
仁徳 43 年		依網屯倉	河内
履中即位前		村合屯倉	(不明)
履中元年		蔣代屯倉	大和
安康期		五處之屯宅	大和
清寧 2 年		縮見屯宅	播磨
継体 8 年	514	匝布屯倉	大和
継体 22 年	528	糟屋屯倉	筑紫
安閑元年	534	伊甚屯倉	武蔵
安閑元年	534	小墾田屯倉	大和
安閑元年	534	桜井屯倉	河内
安閑元年	534	茅淳屯倉	和泉
安閑元年	534	難波屯倉	河内
安閑元年	534	竹村屯倉	河内
安閑元年	534	廬城部屯倉	安芸
安閑元年	534	横淳屯倉	武蔵
安閑元年	534	橘花屯倉	武蔵
安閑元年	534	多氷屯倉	武蔵
安閑元年	534	倉櫛屯倉	武蔵
安閑 2 年	535	穂波屯倉	筑紫
安閑 2 年	535	鎌屯倉	筑紫
安閑 2 年	535	湊崎屯倉	豊
安閑 2 年	535	桑原屯倉	豊
安閑 2 年	535	肝等屯倉	豊
安閑 2 年	535	大抜屯倉	豊

安閑 2 年	535	我鹿屯倉	豊
安閑 2 年	535	春日部屯倉	火
安閑 2 年	535	越部屯倉	播磨
安閑 2 年	535	牛鹿屯倉	播磨
安閑 2 年	535	後城屯倉	備後
安閑 2 年	535	多補屯倉	備後
安閑 2 年	535	来履屯倉	備後
安閑 2 年	535	葉稚屯倉	備後
安閑 2 年	535	河音屯倉	備後
安閑 2 年	535	膽殖屯倉	婀娜 (不明)
安閑 2 年	535	膽年部屯倉	婀娜 (不明)
安閑 2 年	535	春日部屯倉	阿波
安閑 2 年	535	経湍屯倉	紀
安閑 2 年	535	河辺屯倉	紀
安閑 2 年	535	蘇斯屯倉	丹波
安閑 2 年	535	葦浦屯倉	近江
安閑 2 年	535	間敷屯倉	尾張
安閑 2 年	535	入鹿屯倉	尾張
安閑 2 年	535	緑野屯倉	上野毛
安閑 2 年	535	稚贄屯倉	駿河
宣化元年	536	新家屯倉	伊勢
宣化元年	536	那津官家	筑紫
欽明 16 年	555	白猪屯倉	吉備
欽明 17 年	556	兒島郡屯倉	備前
欽明 17 年	556	韓人大身狹屯倉	大和
欽明 17 年	556	高麗人小身狹屯倉	大和
欽明 17 年	556	海部屯倉	紀
皇極 2 年	643	深草屯倉	山背

畿内の安曇氏③ 「百済の弥勒寺」

二〇〇九年一月二十五日、安曇野物語にとつて見過ごすことのできないニュースが飛び込んできた。物語の上では少し先の話になるが、ニュースは鮮度が大切、韓国の代表的な新聞である「朝鮮日報」のインターネットニュースから、その記事の全文を転載する。

秘密のベールを脱いだ百済最大の寺

ほとんど記録がなかった弥勒寺、西暦六三九年の創建が明らかに

一四〇〇年前の姿を完ぺきにとどめる遺物

石塔の様式・金属工芸の歴史を研究する際の基準に

説話から歴史へ…。

百済最大の寺、全羅北道益山にある弥勒寺の創建過程は、これまでベールに包まれていた。しかし今回、国立文化財研究所が行った発掘により、その詳細が明らかになりつつある。今回の発掘は、一四〇〇年前のタイムカプセルを完ぺきな状態で取り出したようなものだ。西暦六三九年に塔を作った際の来歴を記す舍利奉安記が発見されたのをはじめとして、舍利を納める瓶や頭につけるアクセサリー、装飾用の刀やガラス玉など五〇五点の遺物が同時に発掘された。国立文化財研究所の金奉建^{キム・ボンゴン}所長が「文献の不足を補ってくれる貴重な遺物だ」と語ったのもこのためだ。

弥勒寺の場合、『三國史記』には記録がない。武王が在位二十五年目に王興寺を竣工、宮殿の南側に池を掘った、などという役事の記録はあるものの、超大型の寺である弥勒寺に関する記録はない。ただ『三國遺事』に、

薯童王子と善花姫のラブストーリーとともに、弥勒寺創建にまつわる説話が簡単に紹介されているだけだ。このため、百済最大の石塔についても、建立の年代は西暦七〜八世紀ごろだと漠然と推定するしかなかった。こうしたミステリーを全て解き明かしてくれたのが、縦一〇・五cm、横一五・五cmの金板に書かれた一四九文字の漢字だったわけだ。少なくとも西塔については、西暦六三九年に建立されたという事実が判明した。

このため今回の発掘は、建築史・金属工芸史などさまざまな分野にわたり明確な基準を示してくれるものだ、という評価を受けている。弥勒寺跡の西塔についていえば、木塔から石塔へと変化を遂げた典型的な遺物だ。今回の解体発掘過程を通じ、当時の塔の建築方式が明確になっただけでなく、今後における三國時代末期や統一新羅時代の塔の様式を研究する際の基準も整えられると見られる。ペ・ビョンソン弥勒寺址石塔補修整備事業団長は、弥勒寺跡の石塔の特徴について、「通常、木塔では心礎石の周辺に舍利器を安置するが、今回は心礎石にたどり着く前に、一層目の心柱石から舍利器が出土した」と説明した。

さまざまな文様が表面に彫り込まれた金製舍利壺・銀製舍利盒・銀製冠飾などは、西暦七世紀前半、絶頂期にあった百済の金属工芸技術の水準を測る尺度になると見込まれている。国立文化財研究所は、今回発掘された金属製の遺物はいずれも中国から輸入されたものではなく、百済国内で製作されたものと推定している。(以上、朝鮮日報のインターネットニュースから)

この記事が安曇野とどう結びつくか、その答えは少し先になる…。

畿内の安曇氏④ 「沼河比売」

さて、有明の里では葛子を始め幹部連中が集まり、今後の身の振り方について議論している。二日経ったが未だ結論はでない。その間に「御小休」を。今回のテーマは「新潟美人」についてである。

古事記上巻より（訳は筆者 諸本を参考にした）

八千矛神（やちほこのかみ）は、越の国の沼河ぬなかわに住む沼河比売ぬなかわひめを妻にしようと思われて、夜に沼河比売の家に行き、家の窓の外から、中にいる沼河比売に向かって、次のような歌を詠まれました。

「八千矛神は、八島国やしまくにのあちこちに妻を探し、遠い遠い越の国に賢く美しい女性さかしがいますと聞き、求婚をしに通いました。太刀の緒おもまだ解とかず上着とがもまだ脱がないまま、乙女の寝ている窓の板戸を押し揺すぶり引き揺すぶりして立ち竦すくんでいると、そのうち、緑の山にはヌエが鳴き、野の鳥のキジは叫び、鶏も鳴き出した。ああ、忌々しい鳴く鳥よ、

お願いだから鳴くのを止めさせてくれ。空を飛ぶ使いの鳥よ」
・・・これを語り言としてお伝えします。

これに沼河比売は、まだ戸を開けずに家の中からこう歌でお答えになりました。

「八千矛の神様。私は萎しなれた草たのような女です。私の心は落ち着か

ずにフラフラ飛ぶ水鳥のようです。今は自分のことしか考えていない鳥、でもいずれば、あなた様の鳥になりました。ですから、どうぞ（鳥を）殺さないでください。空を飛ぶ使いの鳥よ」
・・・これを語り言としてお伝えします。

「緑の山に日が沈んだら、真つ暗な夜がやって来ます。でも、あなたは、朝日のようにさわやかにやって来て、楮こうぞの綱なわのような白い腕、泡雪のような若く白い乳房をそつと抱いてください。そして手をぎゅつと握ってください。玉のような美しい私の手を絡めて、脚を長々と伸ばしてお寛くわんぎなさいますでしょうか、あまり恋焦がれませぬようになさってください。八千矛の神様」
・・・これを語り言としてお伝えします。

そこで、その夜はお会いにならないで、翌晩お会いになり結婚されました。

（注）「ヌエ」山に住むと信じられていた想像上の怪物。頭はサル、胴はキツネ、尾はヘビ、手足はトラ。実際は、森に住むトラツグミという鳥の声をこの怪物の声と信じていた。

つまり、沼河ぬなかわの里（姫川の里 糸魚川の里）は、新潟美人発祥の地である。そして、その事が安曇族の行く末を決する上で大きな意味を持つことになったのである。

畿内の安曇氏⑤ 「シナリオ6」

葛子、里長・副里長・所役の長を集める

葛子 皆の思いを聞けども、なかなか一つに纏まらぬな。

葛子 罪が忘れ去られたとは云え、皆で糟屋の地に帰ることはできまい。

既に屯倉となり他の者が移り住まう地であろう。志賀島も同じであろう。となれば、我等はこの有明の地を拠り所とせざるを得ない。糸魚川の蝦夷に凶れば、いつか姫川の口に湊を開き、昔の様に海へ出ることもできよう。今都人の申事を断れば、やがて争いの日が訪れよう。我はそう思う。

(注) 糸魚川は地名、姫川は川の名、時々混同される。本文でも姫川の里とすることがある。

副里長 申し上げます。蝦夷2の便りによれば、此の頃「肅慎」なる

者等と北の蝦夷との争いが絶えないと云われます。肅慎については良く判りませぬが、海ばかりではなく陸の戦いも手強く、蝦夷から恐れられているそうです。

葛子 どこかの海人の兵士か。

副里長 高句麗より北の者ではないかと云われています。

葛子 そうか、我等が海へ戻る日は、まだ先の事か。

里長 この地を拠り所とした時、庸の務めに堪えられましようか。

葛子 租や調は致し方ないが、確かに庸は重い。一族の者は増したとは

里長 仰せの通りと存じます。

葛子 我は有明の里を好ましく思う。野の花、萌える山の緑、涼しき夏

赤や黄に映える紅葉、そして清い水。糟屋にはないものばかりだ。冬の雪は辛いが小舎の中での手技は楽しい。この十年余りの穏やかな日々は、私の心を動かした。糟屋の頃の様に、海人の帰りを待ち侘びることもない。海中に逝く者もない。気掛かりなことは唯一つだけだ。

里長 如何なることでしょうか。

葛子 言い難いことなのだが敢えて申そう。この地に来てから多くの子が生まれた。糟屋の頃よりも多いであろう。ところが此の頃身体弱き子が少なくない。三歳を迎えることなく逝く子もいる。昔から縁の近い者が結ばれると良き子に恵まれぬと言われてきたが、今そのことを案じている。それだけではない。海中に逝く者がなく、今は男より女の方が少ない。このままでは嫁が足りなくなる。

里長 私も同じ事を案じておりました。

副里長 前々から思うところがあります。何故か若者等が姫川の里へ下ることを楽しみにしているのです。重い荷を背負って山路を行く辛さなど無きが如く、我先にとその役を望むのです。始めは

海が恋しい故にと推し量りましたが、恋しいのは海ではなく、
どうも姫川の娘等のようでは……

里長 小太郎、そちはこの中では最も若い。何か便りを得ているで
あろう。

小太郎 通うのは男だけではありませぬ。女もいます。

副里長 もしや蝦夷2のことでは。

小太郎 ……

副里長 やはり噂通りか。だが蝦夷2は蝦夷の長殿の跡継ぎではないか。

小太郎 それ故に二人とも思い病んでいるのです。

葛子 して、その女とは誰じや。

小太郎 塩役殿の娘です。この地に船を運び上げし時、船と共に逝かれた

五人の中に許嫁がいたのです。その時は十一二でしたから、今は
三十二になります。

里長 あの時は蝦夷2のお蔭で皆の心を鎮めることができた。彼は

良き男だ。身内になれば心強い。

葛子 何を思い病むことがあるか。日出度きことではないか。彼の

長とは我も気が合う。これから先も互に力となろう。

里長、事を進めよ。

里長 畏まりました。

塩役 娘も喜びましょう。有り難き幸せに存じます。

里長 話が少し逸れたように思われます。都人への応は如何いたしま

しょうか。

葛子 逸れてはいない。我等が一族の行く末を案ずるならば、言向に

順う他はあるまい。然為れば糸井川だけではなく諏訪や筑摩など

他所の里から嫁を迎えることができる。有明の民が増えれば

庸の務めにも堪えられよう。再び船を出せる日も来よう。鮭や

麻の取引も栄える。今のままでは、やがて一族は滅びよう。

里長 大君様の御心に従います。

副里長 私も従います。

…… (みなの方が頷いた)

葛子 膳職殿をお通しせよ。

副里長 畏まりました。

……

膳職1 長く待たせたな。だが良き応が得られ我も嬉しく思う。先の

事については改めて使いの者を遣す。二日の間、この地を見て

廻った。政所となる地も心積りした。我には未だ務めがある。

あす諏訪へ向かう。

葛子 小太郎、膳職殿を諏訪までお送りせよ。

小太郎 畏まりました。

畿内の安曇氏⑥ 「科野国造」

小太郎は都人を諏訪まで送ることになった。往復四〜五日かかるであろう。その間に幾つかの関連情報を集めてみよう。

【婚（よばい）】求婚すること。言い寄ること。夜、恋人のもとへ忍んで行くこと。相手の寝所へ忍び入ること。（広辞苑）

【婚・夜這（よばい）】結婚を求めること。求婚。妻問。中古ごろから一般化した語源俗解で、男が夜陰に乗り、はつて女のもとに入り込むこと。近世では、近辺の家、または同一家屋内で宿泊者・奉公人などがある場合の、男女間のことである。家内を行くとき、戸のきしる敷居をぬらし、ふんどしを敷き延べてその上を踏むなどの工夫を要する。村里では若者の習俗と化した場合が多く、寡婦や未婚の娘を目指して、往々にして男女合意のうえで行われた。（角川古語大辞典）

建御名方神

さて、八千矛神（Ⅱ大国主命）が、越の国の沼河に住む沼河比売をよばつた結果について、【先代旧事本紀】を見てみよう。

（この【先代旧事本紀】は、平安初期の偽撰とされ、昔から冷遇されてきた書である。六世紀に蘇我氏との対立から亡ぼされた物部氏の記述が目立つことから、後世、物部氏の復権を狙って書き上げられたものと云われる）

【先代旧事本紀】地祇本紀の一節

素戔鳴尊の御子の大己貴神には、**大国主神、大物主神、大国玉神、**国造大穴牟遲命、**顕見國玉神、葦原醜雄命、**そして八千矛神の

八つの名があり、子は百八十一の神があります。

・（中略）・

越の国の沼河姫を娶り、一男が生まれました。その名は建御名方神、

信濃国諏訪郡の諏方神社に坐す。

八坂刀売神

建御名方神の妃神は八坂刀売神とされる。この神は記紀には現れないが、穂高見命の妹とする伝承がある（出典未確認）。とするならば、父は綿津見神であり、この妃神も安曇族の一員となる。泉小太郎伝説に「犀龍は諏訪大明神の化身である」と出てくることも頷ける。

美保郷

【出雲風土記】によれば、

「所造天下大神命（Ⅱ大国主命）、高志の国に坐す神、意支都久辰為神の子、奴奈宜波比賣命に娶いて産みませる神、御須須美命、この神爰に坐す。故れ美保と云う」

つまり、大国主命と沼河比売の間には、一男建御名方神の他に、一女御須須美命が産まれている。この神は出雲国美保郷の美保神社に事代主命とともに祀られている。事代主命は諏訪大社の祭神でもある。

諏訪大社

以上、事の真偽はともかく、糸井川〜安曇野〜松本平〜諏訪に到る地域には、深い繋がりがあつたことを窺わせる。けれども、諏訪大社に関しては、安曇野と同様多くの謎に包まれている。

創建の年代、祭神、上社（前宮・本宮）下社（春宮・秋宮）合わせて四社に分かれている理由、諏訪氏・金刺氏・守矢氏の関係、御柱の意味等々、簡単に触れることすらできない。諏訪大社の「御由緒」では、「御鎮座の年代、起源等の詳細については知るすべもありませんが、我国最古の神社の一つに数えられます」と言及を避けている。

肅慎（みしはせ・しゆくしん）

「肅慎」について、『日本書紀』欽明天皇五年十二月の条から引用する。

越の国からの報告によれば、佐渡島の北の御名部の海岸に肅慎人がおり、船に乗ってきて留まっている。春夏は魚をとって食料にしている。かの島の人は人間ではないと言っている。またオニであるとも言つて、島民は敢えて肅慎人に近づかない。

島の東の禹武という村の人が椎の実を拾って、これを煮て食べようと思った。灰の中に入れて炒った。その皮が変化して二人の人間になり、火の上を一尺ばかり飛び上がった。時を経て相戦った。村の人はいぶかしく思い、庭に置いた。するとまた前のように飛んで相戦うのをやめない。ある人が占つて「この村の人はきつとオニに惑わされよう」と言った。それほど時間のたたないうちに、占いで言ったように、物が掠め取られた。

そこで、肅慎人は瀬波河浦に移った。浦の神の霊力は強かった。人は敢えて近づかなかった。（肅慎人は）のどが渴いたのでその浦の水を飲んだ。死者は半分になろうとしていた。骨は岩穴にたまった。俗に肅慎隈と呼ぶ。

（この日本書記の記述に関しては、後世の後付けではないかとの説が有力で、これまた真偽の程は不明である。）

蹴裂伝説

安曇野に伝わる泉小太郎伝説、即ち、岩を裂き割って湖沼の水を流し田畑を拓いたと云う伝説は、一般に蹴裂伝説と呼ばれる。そうした伝説は全国各地に伝わっている。例えば、同じ信濃の佐久地方にも語り継がれている。佐久では田畑を荒らす大鼠が登場する。村人は大きな唐猫を見付けてきて、大鼠を退治することにした。進退窮まった大鼠は湖の端の岩山を噛み切った。そこで湖水が流れ出したという。

更に、甲斐の鰍沢にも同様の伝説がある、鰍沢ではある神が山を蹴り裂いたという。ここに「佐久」は「裂く」ではないかとの説が浮上する。鰍沢には「蹴裂神社」がある。同じ甲斐の金櫻神社も臭う。

安曇野を流れる犀川の「サイ」は、鉄を意味する「サヒ」や「サブ」に近い。穂高見命の別名は「宇都志日金折命」である。その「金折」は「金裂」とも解される。つまり、安曇族は海人であると同時に、金属の利器をもって湖沼や湿地帯を開墾し、田畑として拓く技術集団ではなかったか。蹴裂伝説で最も有名なのは、阿蘇の火口原を干した神八井耳命の子、健磐龍命伝説である。前出の【先代旧事本紀】に、阿蘇国造は神八井耳命の孫速瓶玉命、科野国造は神八井耳命の孫建五百建命とある。

ローカルな話がグローバルになってきた。

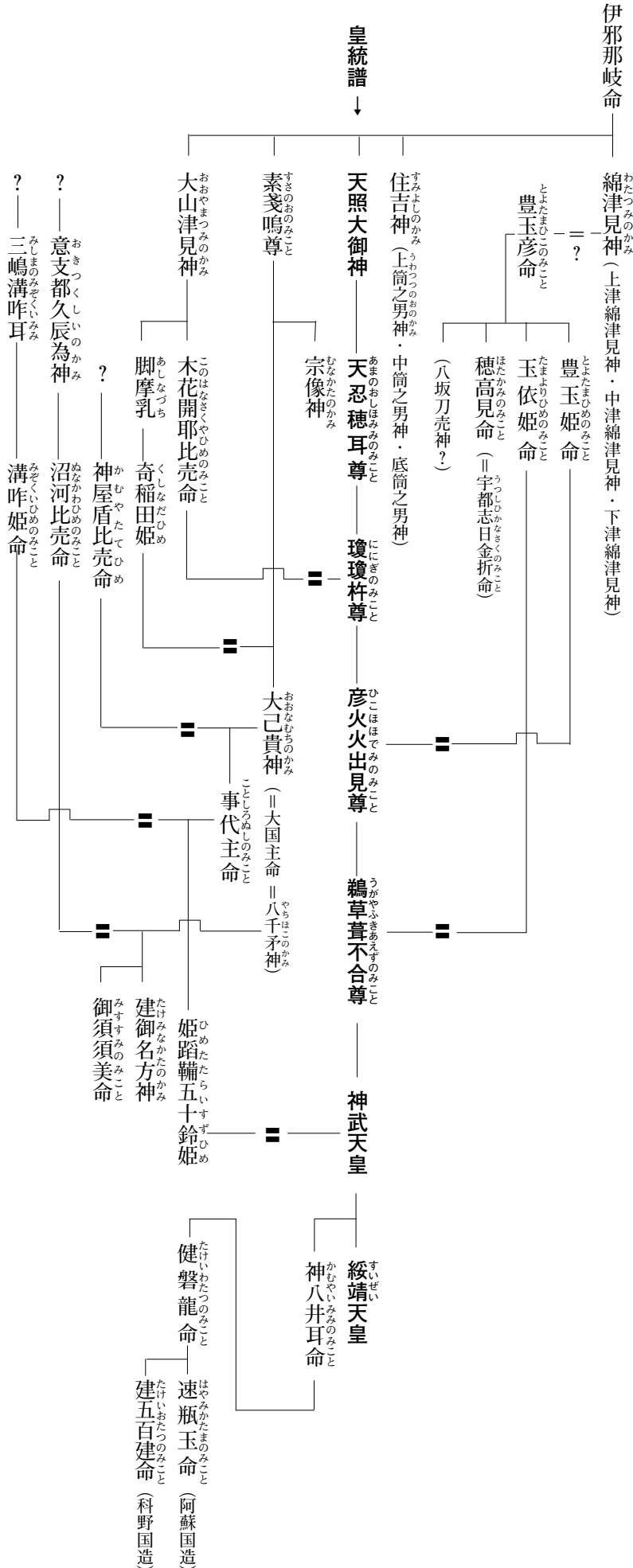
畿内の安曇氏⑦ 「神々の系譜」

さて、「神々皆兄弟」的な様相になってしまった。そこでこれまで本稿に登場した神々について整理してみよう。(■は結婚マーク)

伊邪那岐命
いざなぎのみこと

伊邪那美命
いざなみのみこと

淡路嶋・伊豫之二名嶋(四国)・隠岐嶋・筑紫嶋(九州)・杵嶋嶋・津嶋(对馬)・佐渡嶋、大倭豊秋津嶋(本州)



以上の系譜から判ることは、

- ・ 綿津見神も大山津見神も、皇統譜中重要な位置にいる。
- ・ 大山津見神の一族は、天孫系と出雲系の両方に妃を出している。
- ・ 皇統譜中、出雲系の妃を迎えたのは神武天皇からか。
- ・ 神武天皇から見て、穗高見命は叔父、阿蘇国造と科野国造は曾孫に当たる。
- ・ つまり、安曇一族と阿蘇一族（阿蘇国造・科野国造）は遠い親戚に当たる。等々である。

さて、都人を諏訪へ送った小太郎はどうしたであろうか。

膳職 1 そちの名は京まで聞こえているぞ。

小太郎 また、如何して。

膳職 1 川下の岩崩えたる地を開いて水を治めた功が筑摩や麻績の里の噂になり、やがて国司を通して京に届いたのだ。

小太郎 恐れ入ります。

膳職 1 して、その技はどこで覚えたのだ。

小太郎 往昔、磐井の大君様の墓を造る時、阿蘇の山に入り、石の切り出しを手伝いました。その時習い覚ええました。

膳職 1 まだお前が年若い頃ではないか。

小太郎 鉄の矢を使って大岩が割れる姿は、決して忘れることはできません。

膳職 1 実はな、石割の技を確かめるのも今度我が京からきた理由の一つなのだ。小太郎よ、そちは彼方此方の里から請われている

のだぞ。だが、国司としては国民として録されていない者に頼むことはできぬのだ。そこで鮭の事と合わせて来たのだ。

小太郎 重ねて恐れ入ります。

膳職 1 ところで、信濃の国司は阿蘇氏の裔である。阿蘇の一族は

神日本磐余彦命（神武天皇）の御子である神八井耳命の裔である。

我等安曇の一族とは遠き縁に当たる。いづれ国司に呼ばれるであらう。

小太郎 私のような者が役に立つのでしょうか。

膳職 1 有明の里を廻りお前の技を見た。間違いない。確かな腕だ。

して、鉄はどこで手に入れたのだ。

小太郎 糟屋から運びました。残りわずかです。

膳職 1 近江の北の方に我等の輩がいる。その里の近くに良い鉄がある。要るなら申せ、取引は容易い。

小太郎 里長に図ります。

・ ・ ・

小太郎 諏訪の里はまもなくです。

膳職 1 どうだ、諏訪の里長に会うか。

小太郎 そのような役は聞いておりません。

膳職 1 我の命だと云えば良いではないか。

小太郎 ・ ・ ・

〔表七の二〕

道	国	等級	郡数	郷数	推定戸数	推定人口	式内社数 (座数)	式内社 分布率
五畿	山城	上	8	78	3,900	97,000	122	1.56
	大和	大	15	89	4,450	110,000	286	3.21
	河内	大	14	80	4,000	99,000	113	1.41
	和泉	下	3	24	1,200	29,000	62	2.58
東海道	摂津	上	13	78	3,900	97,000	75	0.96
	伊賀	下	4	18	900	22,000	25	1.39
	伊勢	大	13	93	4,650	115,000	253	2.72
	志摩	下	2	14	700	17,000	3	0.21
	尾張	上	8	69	3,450	86,000	121	1.75
	三河	上	8	70	3,500	87,000	26	0.37
	遠江	上	13	95	4,750	118,000	62	0.65
	駿河	上	7	59	2,950	73,000	22	0.37
	伊豆	下	3	21	1,050	26,000	92	4.38
	甲斐	上	4	31	1,550	38,000	20	0.65
	相模	上	8	67	3,350	83,000	13	0.19
	武蔵	大	21	120	6,000	149,000	44	0.37
	安房	中	4	32	1,600	39,000	6	0.19
	上総	大	11	76	3,800	94,000	5	0.07
下総	大	11	92	4,600	114,000	11	0.12	
常陸	大	11	133	6,650	165,000	28	0.21	
東山道	近江	大	12	93	4,650	115,000	155	1.67
	美濃	上	18	129	6,450	160,000	39	0.30
	飛騨	下	3	13	650	16,000	8	0.62
	信濃	上	10	67	3,350	83,000	48	0.72
	上野	大	14	102	5,100	127,000	12	0.12
	下野	上	9	70	3,500	87,000	11	0.16
	陸奥	大	35	188	9,400	234,000	100	0.53
北陸道	出羽	上	9	71	3,550	88,000	9	0.13
	若狭	中	3	21	1,050	26,000	42	2.00
	越前	大	6	55	2,750	68,000	126	2.29
	加賀	上	4	30	1,500	37,000	42	1.40
	能登	中	4	26	1,300	32,000	43	1.65
	越中	上	4	42	2,100	52,000	34	0.81
山陰道	越後	上	7	34	1,700	42,000	56	1.65
	佐渡	中	3	22	1,100	27,000	9	0.41
	丹波	上	6	63	3,150	78,000	71	1.13
	丹後	中	5	35	1,750	43,000	65	1.86
	但馬	上	8	59	2,950	73,000	131	2.22
	因幡	上	7	50	2,500	62,000	50	1.00
	伯耆	上	6	48	2,400	59,000	6	0.13
	出雲	上	10	78	3,900	97,000	187	2.40
山陽道	石見	中	6	37	1,850	46,000	34	0.92
	隠岐	下	4	12	600	14,000	16	1.33
	播磨	大	12	97	4,850	120,000	50	0.52
	美作	上	7	64	3,200	79,000	11	0.17
	備前	上	8	55	2,750	68,000	26	0.47
	備中	上	9	72	3,600	89,000	18	0.25
	備後	上	14	60	3,000	74,000	17	0.28
	安芸	上	8	62	3,100	77,000	3	0.05
南海道	周防	上	6	46	2,300	57,000	10	0.22
	長門	中	5	40	2,000	49,000	5	0.13
	紀伊	上	7	56	2,800	69,000	31	0.55
	淡路	下	2	17	850	21,000	13	0.76
	阿波	上	9	44	2,200	54,000	50	1.14
	讃岐	上	11	90	4,500	112,000	24	0.27
西海道	伊予	上	14	72	3,600	89,000	24	0.33
	土佐	中	7	43	2,150	53,000	21	0.49
	筑前	上	15	102	5,100	127,000	19	0.19
	筑後	上	10	54	2,700	67,000	4	0.07
	豊前	上	8	43	2,150	53,000	6	0.14
	豊後	上	8	47	2,350	58,000	6	0.13
	肥前	上	11	44	2,200	54,000	4	0.09
	肥後	大	14	99	4,950	123,000	4	0.04
	日向	中	5	28	1,400	34,000	4	0.14
	大隅	中	8	37	1,850	46,000	5	0.14
薩摩	中	13	35	1,750	43,000	2	0.06	
壱岐	下	2	11	550	13,000	24	2.18	
対馬	下	2	9	450	11,000	29	3.22	
合計			589	4,011	200,550	5,000,000	3,093	0.77

次に、古代の科野（八世紀初頭から信濃）について、他の諸国と比較してみよう。史料は十世紀初頭のものであるが、傾向は見えるであろう。そこで、倭名類聚鈔から郡と郷について、延喜式から式内社の分布について表にまとめた。当時の郷は五十戸を単位とするとの説により「郷×五十一推定戸数」とし、また当時の日本の総人口を五〇〇万人と仮定

し、国別の推定人口を計算した。「式内社分布率」とは、一郷当たりの式内社数である。これによつて、式内社の密度がわかる。

（なお、式内社は他に「宮中三十六座、京中三座」あり、合計三三三座となる）

畿内の安曇氏⑧ 「国力」

では、前頁の「表七の二」を見てみよう。先ず左列は所謂五畿七道である。近年議論されている道州制の大本である。古代に「道」を司る役所はなかったようであるが、帳簿上では必ず「道」毎に纏められている。崇神天皇の時代に四道將軍が派遣されたとの記述が記紀に見える。

二列目の国名をみると全て二文字である。古くは、摂津は「津」、豊前・豊後は「豊」、肥前・肥後は「肥」と呼ばれ、武蔵の古い表記は「无耶志」とされる。

ところが、元明天皇和銅六年「地名には好字を着けよ」との詔により、地名の表記は好字二文字に改められた。科野が信濃、阿曇が安曇になったのもその頃とされる。(好字制とも呼ばれる)

【続日本紀】和銅六年五月の条、

五月甲子。制。畿内七道諸國郡郷名着好字。其郡内所生。銀銅彩色草木禽獸魚虫等物。具録色目。及土地沃瘠。山川原野名号所由。又古老相傳舊聞異事。載于史籍亦宜言上。

読み下すと、

五月甲子の日、次のように制した。

畿内及び七道諸國の郡・郷の名称は、好き字を選んで着けよ。郡内に産出する銀・銅・彩色・草木・鳥獸・魚・虫などのものは、詳しくその種類を記し、土地が肥えているか瘠せているか、山・川・原・野の名称の由来、また古老が伝える旧聞や異った事柄は、史蹟に記載して報告せよ。

元明天皇の詔には、「好字」の定義については触れていない。その後の地名の表記から「好字⇨好き字二文字」と解されている。

次に「等級」について見てみよう。律令制では国力を「大国・上国・中国・下国」の四等級に分類した。その元となった資料は、人口や租税と考えられるが、必ずしも人口と租税は比例していない。そこで、十世紀初頭の税帳を延喜式から、田地の面積を和名類從鈔から引用し、次頁の「表七の二」に記載した。

主税とは、正税・公廩・国分寺料・池溝料・救急料・俘囚料などの総称。九州地方には、府官の公廩として太宰府へ納入する料がある。

税の納入単位は「束」となっている。稲一掴みが一把、十把が一束。一束分の米は粉末状態で約一斤〇六〇〇gとのこと。正税は一反当たり二束二把で、負担率は三%と言われている。よって一町は十反であるから、町当たりの平均的な収穫高は、二・九三石となる。

大国は、大和・河内・伊勢・武蔵・上総・下総・常陸・近江・上野・陸奥・越前・播磨・肥後の十三カ国である。左表の主税と田地総面積を見ると、上位十三カ国と一致しない。主税は租庸調の主要な要素ではあるが、調を始めとする貢献物の内容によって諸国の格付けが影響されたものと考えられる。大国の中で最も主税負担の大きい国は陸奥国である。当時の陸奥国は、現在の福島県・宮城県・岩手県に及ぶ広大な地域を占めていた。とすると、今日的な尺度からすれば、実質的に最も負担の大きい国は、表中で二番目に主税の多い肥後国である。田地の総面積はそれほどではないものの、太宰府への納入分が突出している。太宰府分は九州地区の六カ国合計百万束の内、三十五万束が肥後国の負担となっている。

道	国	等級	推定人口	主税	正税	田地総面積	石高		主税 負担率	式内社 分布係数
				単位：束	単位：束	単位：町	単位：束	単位：石		
五畿	山城	上	97,000	424,079	150,000	8,962	6,571,913	26,288	6.5%	39
	大和	大	110,000	554,600	200,000	17,906	13,130,993	52,524	4.2%	80
	河内	大	99,000	400,954	149,477	11,338	8,314,827	33,259	4.8%	35
	和泉	下	29,000	227,500	80,000	4,570	3,351,040	13,404	6.8%	64
	摂津	上	97,000	480,000	185,000	12,525	9,185,000	36,740	5.2%	24
東海道	伊賀	下	22,000	317,000	135,000	4,511	3,308,140	13,233	9.6%	34
	伊勢	大	115,000	726,000	300,000	18,131	13,295,773	53,183	5.5%	67
	志摩	下	17,000	1,700	1,200	124	90,933	364	1.9%	5
	尾張	上	86,000	472,000	200,000	6,821	5,001,847	20,007	9.4%	43
	三河	上	87,000	477,000	200,000	6,821	5,001,847	20,007	9.5%	9
	遠江	上	118,000	772,260	280,000	13,611	9,981,620	39,926	7.7%	16
	駿河	上	73,000	642,534	230,000	9,063	6,646,347	26,585	9.7%	9
	伊豆	下	26,000	179,000	65,000	2,110	1,547,627	6,191	11.6%	108
	甲斐	上	38,000	542,500	240,000	12,250	8,983,260	35,933	6.0%	16
	相模	上	83,000	868,120	300,000	11,236	8,239,807	32,959	10.5%	5
	武蔵	大	149,000	1,113,754	400,000	35,575	26,088,113	104,352	4.3%	9
	安房	中	39,000	342,000	150,000	4,336	3,179,587	12,718	10.8%	5
	上総	大	94,000	1,071,000	400,000	22,847	16,754,393	67,018	6.4%	2
	下総	大	114,000	1,027,000	400,000	26,433	19,383,907	77,536	5.3%	3
	常陸	大	165,000	1,396,000	500,000	40,093	29,401,240	117,605	4.7%	5
東山道	近江	大	115,000	1,207,376	400,000	33,403	24,495,167	97,981	4.9%	41
	美濃	上	160,000	880,000	300,000	14,823	10,870,273	43,481	8.1%	7
	飛騨	下	16,000	106,000	40,000	6,616	4,851,513	19,406	2.2%	15
	信濃	上	83,000	895,000	350,000	30,909	22,666,453	90,666	3.9%	18
	上野	大	127,000	1,086,935	400,000	30,937	22,687,133	90,749	4.8%	3
	下野	上	87,000	874,000	300,000	30,156	22,114,253	88,457	4.0%	4
	陸奥	大	234,000	1,582,715	603,000	51,440	37,722,887	150,892	4.2%	13
北陸道	出羽	上	88,000	973,392	250,000	26,109	19,146,747	76,587	5.1%	3
	若狭	中	26,000	241,000	90,000	3,074	2,254,560	9,018	10.7%	50
	越前	大	68,000	1,028,000	400,000	12,066	8,848,400	35,394	11.6%	57
	加賀	上	37,000	686,000	300,000	13,767	10,095,580	40,382	6.8%	35
	能登	中	32,000	386,000	150,000	8,206	6,017,587	24,070	6.4%	41
	越中	上	52,000	840,433	300,000	47,910	35,133,633	140,535	2.4%	20
	越後	上	42,000	833,455	330,000	44,998	32,998,167	131,993	2.5%	41
山陰道	佐渡	中	27,000	171,500	38,000	3,960	2,904,293	11,617	5.9%	10
	丹波	上	78,000	664,000	230,000	10,666	7,821,733	31,287	8.5%	28
	丹後	中	43,000	431,800	170,000	4,756	3,487,733	13,951	12.4%	46
	但馬	上	73,000	740,000	340,000	7,556	5,540,920	22,164	13.4%	55
	因幡	上	62,000	710,878	300,000	7,915	5,804,187	23,217	12.2%	25
	伯耆	上	59,000	655,000	250,000	8,162	5,985,173	23,941	10.9%	3
	出雲	上	97,000	695,000	260,000	9,436	6,919,587	27,678	10.0%	59
	石見	中	46,000	391,000	155,000	4,885	3,582,260	14,329	10.9%	23
山陽道	隠岐	下	14,000	70,000	20,000	585	429,147	1,717	16.3%	33
	播磨	大	120,000	1,234,500	440,000	21,414	15,703,820	62,815	7.9%	13
	美作	上	79,000	764,000	300,000	11,021	8,082,287	32,329	9.5%	4
	備前	上	68,000	956,640	381,150	13,186	9,669,513	38,678	9.9%	12
	備中	上	89,000	743,000	300,000	10,228	7,500,387	30,002	9.9%	6
	備後	上	74,000	625,000	240,000	9,301	6,820,880	27,284	9.2%	7
	安芸	上	77,000	632,000	230,000	7,358	5,395,720	21,583	11.7%	1
	周防	上	57,000	560,000	210,000	7,834	5,745,153	22,981	9.7%	5
南海道	長門	中	49,000	361,000	110,000	4,603	3,375,753	13,503	10.7%	3
	紀伊	上	69,000	470,816	175,000	7,199	5,278,900	21,116	8.9%	14
	淡路	下	21,000	126,800	35,000	2,691	1,973,327	7,893	6.4%	19
	阿波	上	54,000	506,500	200,000	3,415	2,503,967	10,016	20.2%	28
	讃岐	上	112,000	884,500	350,000	18,648	13,674,833	54,699	6.5%	7
	伊予	上	89,000	810,000	300,000	13,511	9,908,360	39,633	8.2%	8
西海道	土佐	中	53,000	528,688	200,000	6,451	4,730,733	18,923	11.2%	12
	筑前	上	127,000	790,063	200,000	18,500	13,566,667	54,267	5.8%	5
	筑後	上	67,000	623,581	200,000	12,800	9,386,667	37,547	6.6%	2
	豊前	上	53,000	609,828	200,000	13,200	9,680,000	38,720	6.3%	3
	豊後	上	58,000	743,842	200,000	7,500	5,500,000	22,000	13.5%	3
	肥前	上	54,000	692,589	200,000	13,900	10,193,333	40,773	6.8%	2
	肥後	大	123,000	1,579,117	400,000	23,500	17,233,333	68,933	9.2%	1
	日向	中	34,000	373,101	150,000	4,800	3,520,000	14,080	10.6%	4
	大隅	中	46,000	242,040	86,040	4,800	3,520,000	14,080	6.9%	3
	薩摩	中	43,000	242,500	85,000	4,800	3,520,000	14,080	6.9%	1
合計	壱岐	下	13,000	80,000	5,000	620	454,667	1,819	17.6%	54
	対馬	下	11,000	3,920	3,920	428	313,867	1,255	1.2%	80
合計			5,000,000	43,368,510	15,742,787	923,302	677,087,767	2,708,351	6.4%	

その理由については、「火の国」の章で検討する。

「表七の二」に戻って郡・郷を見てみよう。ここでも陸奥国が郡数・郷数とも最多である。諸国の郡内の郷数は区々で、最小は二郷、最大は十八郷である。この郷数から戸数・人口を算出したものの、田地総面積や石高との比例関係を見出すことは難しい。やはり調について精査しなければならぬようだ。諸国の調は延喜式に詳しく掲載されているが、その価値を米に換算した場合の数値がよく判らず、目下調査中である。また、推定人口についても同様である。決め手となるデータがなく、参考資料程度である。

次に、「表七の二」米の生産高（石高）を見ると、陸奥・越中・越後・常陸・武蔵の上位五国に続き、信濃が六位に着けている。陸奥を例外とすれば、越中が一位、越後が二位となる。往昔から中部以北の国々が米所だったようだ。

「表七の二」の後ろから二列目に「主税負担率」を示した。最小値は対馬の一・二％、最大値は阿波の二十・二％、平均値は六・四％である。総じて際立った特徴は見いだせない。

さて、ものは序で、一戸当たりの主税を計算してみた。

「主税総額」四三、三六八、五一〇束、「戸数」二二〇、〇五五戸とすると、「一戸当たりの主税」二二六束＝三三〇kg＝三八、九二五円となる。

*米一束＝〇・六kg、一kg＝三〇〇円で計算した。

*計算の元となった数値の根拠が不確かなので参考程度に留め置きたい。

当時の国民は、生産高の三％と言われる正税の他に、種々の税や調・

庸があり、今日に較べて決して軽い負担ではなかったものと思われる。

さて、「表七の二」に於いて、式内社数のバラツキが目立つ。先ず、式内社とは何かを確認する。

延喜式は弘仁式・貞観式の後を承けて編纂された律令の施行細則である。神名帳はその中にあり、祈年祭の幣帛にあずかる宮中・京中・五畿七道の官社三、一一三座（一社で複数の祭神が登載された神社もあり、社数では二八六一社）を式内社という。したがって延喜式が成立した延長五年以前に創建された神社となり、千年以上の歴史がある神社となる。中には廃絶した式内社や、該当すると称する神社が複数で論争している式内社もある。

と一般的に考えられている。しかしながら、式内社の国別分布をみると、右の説明だけでは納得できない。

官社であるならば、社格によって、朝廷からの使者（獻幣使）・国司・郡司などが主要な祭事に幣帛を奉ることになり、必然的にその地域を代表する神社と認めたくなる。

そこで、一郷当たりの平均式内社数を国毎に算出した。その結果が「表七の二」の式内社分布率である。更に比較し易いように、分布率最小の肥後国を一とした時の倍数を「分布係数」として、「表七の二」の右端に記載した。分布係数の最大値は伊豆国の「二〇八」である。これは尋常ではない。参議院選挙に於ける一票の格差や、夏の甲子園大会出場の場合など比ではない。何か特別な理由があるはずだ。誰でもそう考える

であろう。ところが、その謎に迫った歴史家は見当たらない。一部の歴史愛好家が怪しげな説を述べるに留まっている。

伊豆国は古くから流刑地とされた。古代から中世の流罪人を調べると伊豆国が突出している。藤原広嗣の乱に連座して流罪となった藤原良繼を始め、氷上川繼、長野女王、橘逸勢、文室宮田麻呂、伴善男、役小角等の名が見える。

日本の歴史上、死刑が執行されなかった時代がある。光仁元年(一〇八〇)に藤原仲成が薬子の乱で死刑になつてから、平治元年(一一五〇)に保元の乱で源為義らが斬首されるまでの三四年間である。その最大の理由は、御霊信仰に基おんりょうづく怨霊たの祟りを恐れたことにあると言われる。仮に死罪の判決を受けても、実際には一等級減じて流罪になつたようだ。

怨霊とは、政争での失脚者や戦乱での敗北者の霊、つまり恨みを残して非業の死を遂げた者の霊である。怨霊は、その相手や敵などに災禍をもたらす他、社会全体に対する災禍をもたらすものと考えられていた。藤原広嗣、井上内親王、他戸親王、早良親王などは怨霊になつたとされる。こうした怨霊を復位し、諡号しごうや官位を贈り、その霊を鎮め、神として祀れば、かえって御霊として霊は鎮護の神として平穏を与えろという考え方が平安期を通して起こつた。中でも有名なのが菅原道真を祀る天神信仰とされる。

藤原時平の陰謀によつて大臣の地位を追われ、大宰府へ左遷された道真は失意のうちに没した。彼の死後、疫病がはやり、日照りが続き、また醍醐天皇の皇子が相次いで病死した。さらには

清涼殿が落雷を受け多くの死傷者が出た。これらが道真の祟りだと恐れられた朝廷は、道真の罪を赦すと共に贈位を行つた。清涼殿落雷の事件から道真の怨霊は雷神と結びつけられた。元々京都の北野の地には火雷神という地主神が祀られており、朝廷はここに北野天満宮を建立して道真の祟りを鎮めようとした。道真が亡くなつた太宰府にも太宰府天満宮が建立された。

また、天曆三年(九四九)には難波京の西北の鎮めとされた大將軍社前に一夜にして七本の松が生えたという話により、勅命により大阪天満宮が建立された。永延元年(九八七)には「北野天満宮大神」の神号が下された。また、天満大自在天神、日本太政威徳天なども呼ばれ、恐ろしい怨霊として恐れられた。(ウィキペディアより)

伊豆国(伊豆諸島を含む)に式内社が多い理由は、古代から平安時代にかけて、政争の失脚者が伊豆の地に流刑となり、その一族の祖神を祀つたからではないだろうか。「子孫の祭祀の絶えた者が怨霊となる」との説もある。そうした祟りを恐れて、朝廷としても官社として怠りなく祭祀を執り行つたのではないだろうか。そして、伊豆半島には、京都に因む地名が少なくない。賀茂・桂川・嵐山・長岡等々。

次に、式内社の多い国々について見てみよう。畿内の山城・大和・河内・摂津は、朝廷のお膝元であり、諸豪族が盤踞する地である。式内社が多いことに何ら疑問はない。伊勢の地は皇祖神天照大御神を祀る地であり、これもまた疑問はない。出雲については「神やらいの地」との説もあり俄には判断できない。この件について言及すると本稿の枠を大きく

越えるので「神々の集う地」として留め置く。そこで、近江・若狭・越前・能登・丹後・但馬・吉岐・対馬について見てみよう。

- ・近江国は畿内に近く京が置かれた時代もあり豪族は多い。応神天皇所縁とされる息長氏の根拠地でもある。渡来神伝承も少なくない。
- また、諸職の故郷として特異な地域でもある。(この件については後述する)
- ・若狭国もまた渡来神の伝承がある。若狭彦神社の縁起書に「その形、俗体にして唐人の如く云々」と見える。
- ・越前国は都怒我阿羅斯等の渡来伝承がある。
- ・能登国は古くから流刑の地とされる。また対馬海流の打ち寄せる地でもある。
- ・丹後と但馬の両国には、渡来神天日槍にまつわる伝承が多い。

・吉岐や対馬は、大和朝廷以前の時代から朝鮮半島との交流が深い。そればかりではない。「対馬こそ高天原だ」との妄説も聞こえる。

なぜ、渡来神伝承のある地域に式内社が多いのだろうか。これもまた謎と言えよう。もし、渡来神伝説Ⅱ渡来人の入植、とするならば、多少理解できる。高麗・新羅・百済に所縁のある神社は少なくない。そうした神社のある地には渡来人入植の伝承がある。この件に関しては更に入念な調査を要するであろう。では、式内社の分布係数最小の肥後国はどうだろうか。この件については次章「火の国」で述べる。

これまでの検証から、信濃国の国力は全国平均に近く、流刑地としても取分け目立たず、渡来神の伝承も少ない。鮭と麻、そして高く深い山と湖が特徴と言えようか。果たしてそれだけだろうか。

火の国① 「不知火伝説」

安曇族の謎を追っていたら、阿蘇氏との関りについて調べざるを得なくなった。暫く安曇野から離れ火の国へ旅立とう。

さて、火の国(熊本県)出身の有名人はと問われたら、多くの人は加藤清正を上げるだろう。その他数え上げたら切りがない程の、政治家・軍人・経済人・文化人・芸能人・スポーツ選手等を輩出している。とてもイメージが纏まらない。そこで、女優と女性歌手に限定して列記する。

女優 石田えり・荻野目慶子・上月晃(宝塚)・島田陽子・宮崎美子…

(熊本県人ではないが熊本大学出身の斉藤慶子も加えたい)

歌手 石川さゆり・水前寺清子・八代亜紀…

よし、火の国のイメージが定まったところで本論に入ろう。

本稿の六頁 和多都美神社②「海の幸」の節で「不知火海のうたせ船」について述べた。実は本章へ導く伏線でもあったのだ。では、不知火伝説について調べてみよう。

【日本書紀】景行天皇十八年五月一日の条

葦北から船出して火国に着いた。ここで日が暮れた。暗くて岸に着くことが難しかった。遙かに火の光が見えた。天皇は船頭に詔して、「真つ直ぐに火の元へ向かって行け」と言われた。それで火に向かって行くと、岸に着くことができた。天皇はその火の光る元を尋ねて、「何という邑か」と聞かれた。国人は答えて、「これは八代県の豊村です」と言った。またその火を問われて、「これは誰の

火か」と。しかし主が判らない。人の燃やす火ではないということから、その国を名付けて火国とした。

【熊本県のホームページ】

今から千数百年前に景行天皇は九州巡幸になりました。一行の船は、暗闇の八代海を進むうち、方角が分からなくなりました。すると暗い海に一つの火が燃え上がり、いつしかその火が十になり、百になり無数の火となりました。不思議な火は海面いっぱいになり、あたりは昼間のように明るくなりました。一行は、その火をたよりに無事火の国（熊本）に上陸できました。以来、その不思議な火のことを「不知火」というようになったと伝えられています。

現代では、不知火は干潟の位置や形、潮の干満の大きさ、適度な風速で吹く視線方向の風、海面上の気温分布など、さまざまな自然条件が重なって初めて見られる、世界でも希な自然の光の屈折現象だといわれています。

日本書紀の記述から火の国の由来は判った。では、この時景行天皇は誰を伴っていたか。【肥前国風土記】ちかしま 値嘉嶋の条に、「昔、景行天皇、巡幸給いし時、（中略）陪従の阿曇連百足を遣わして・（後略）」と見えることから、葦北から船出した時、阿曇連百足を伴っていたものと思われる。そして船頭は安曇の海人ではなかったか。

また、景行天皇が船出した場所は、現在の葦北郡芦北町佐敷さしきと考えられている。その湊は、一九八五年十月に筆者が乗った「うたせ船」の出港地でもあった。

火の国② 「熊本城の石垣」

もし初めて熊本県を訪れるならば、阿蘇と熊本城は外せないであろう。阿蘇山には世界最大のカルデラがある。熊本城は名古屋城・姫路城と共に日本三大名城と称される。何れも熊本県ばかりではなく日本を代表する名所と言えよう。

とりわけ熊本城の石垣は、その巨大さと美しさに圧倒される。

Q 1 熊本城は誰が造ったか。

Q 2 石垣の石はどこから運んだか。

Q 3 その石は誰が積んだか。

答えは、

A 1 加藤清正。

A 2 阿蘇の山を始め領内全域から。

A 3 近江の穴太衆あなうしゅう。

熊本城は、かつて茶臼山と呼ばれた丘陵地に、加藤清正が慶長六年（一六〇一）から慶長十二年（一六〇七）にかけて築いたという。中でも武者返しと呼ばれる美しい曲線を描く石垣は有名で、安土城の石垣を造った近江の石工集団「穴太衆」を呼び寄せて積み上げたという。その時、阿蘇の山から切り出された石を始め、領内の墓石や板碑に到るまで、あらゆる石材を集めたという。（穴太衆については後述する）

では、阿蘇の石について調べてみよう。

阿蘇の山の産する石は熔結凝灰岩ようけつぎょうかいがんと呼ばれる。高温の火山灰が大量に厚く積もり、その内部で再び融けた後に圧密されて生じた岩石という。

通常の岩石に比べて軟らかく加工がしやすい反面、軟らかいため雨風による浸食を受け易い。その加工しやすいことから、石垣の他、石橋・燈籠・墓石などに広く使われ、熊本県を始め九州地方には石造りの構築物が多いとされる。(大分県臼杵の石仏も阿蘇熔結凝灰岩という) また、時代を遡れば、古墳の石室に安置される石棺の材料としても使われたという。

一九七五年、熊本県宇土市の教育委員会に勤める高木恭二氏は、当時石棺の研究者として全国的に知られた間壁忠彦氏の訪問を受け、宇土地方の古墳を案内した。その時、間壁氏は「阿蘇熔結凝灰岩の石棺が九州以外に十例ある」と高木氏に語った。その事実を知った高木氏は驚くとともに、なぜ九州の外にあるのか興味を持った。以来、高木氏は阿蘇熔結凝灰岩の石棺を調査することになった。そして高木氏は、熊本大学地質研究室の協力を得て、熊本県の菊池川流域で切り出された石が、大阪府藤井寺市にある古墳の石棺として使われていることを確認した。

一九八三年十月、高木氏は「石棺輸送論」なる論文を「九州考古学」に発表した。その冒頭に、

古墳時代における重量物運搬に、海運が大きな役割を果たしたであろうことは想像に難くない。それは陸上交通の基本的確立をみる律令以後においても、米などの輸送にこの方法が用いられたことによっても推論できる。いいかえれば、陸路が整備される以前は海運が主要な輸送機関であったということができよう……

とあり、やがてこの論文が考古学会のみならず歴史学会にも大きな衝撃を与えることになった。

つづく……